

やぶちゃん版萩原朔太郎全歌集 © 附やぶちゃん注

「やぶちゃん注」底本は筑摩書房版「萩原朔太郎全集」の第三巻・第十五巻・補巻を使用、編年体構成とし、原則、同底本下段に示されてある初出形で示すこととした。但し、鑑賞に著しい困難を有する誤字や脱字・錯字については同底本の校訂本文を参考にしつつ、独自に校訂した（そうした操作を行った部分には総てその旨の注を施してある。なお、字のポイントは前書や標題で異なるが、ここでは一切それを見捨て、同ポイントで示してある。字の配置はほぼ準じた。

異なった稿（同一雑誌でも発表欄が異なるものも別稿と採った）の間には、

* * *

を挟んだ。但し、「ソライロノハナ」は引用の前後に、

を入れ、全体をソリッドなものとして捉えるために、先の記号を配さず、歌群間は概ね三行空きで示した（歌群終了が分かり難い箇所には終了したことを示す注を入れて識別し易くはしておいた）。但し、改頁によって分かち書きの短歌が分断したり、標題だけが頁末にくる箇所ではわざと空行を増やして送ってあるので注意されたい。草稿類の内、先行する発表歌の注で既に示したものについては省略した。類型・相似・相同歌の注については、先行して注したものについては省略した（但し、「ソライロノハナ」では既に私が作った「ソライロノハナ」注（後述）をそのまま流用したために重複している）。書簡中の短歌で書信自体が短歌と強い親和性を持っていると判断したものは、書信の一部又は全文を電子化して示してある。

なお、萩原朔太郎の自選私選歌集である「ソライロノハナ」からは短歌のみを採ったが、私は既に「[ソライロノハナ 附やぶちゃん注](#)」PDF縦書版を公開している。全貌はそちらを参照されたい。

PDF化に際し、ソフトの限界から一部の正字及びそれを含む文字列が転倒しており、また「廻」の字の旧字は空欄になってしまうので止むを得ず新字で表記してあるのは御寛恕願いたい。【二〇一四年十二月十八日 妻の誕生日に © 藪野直史】

いめに見しおほつ鯨の背にのりて九十九里はま今行くらんか

その松原都に何んのえにしありてふとのまどひの我たゆたしむ

「やぶちゃん注」現存する萩原朔太郎の短歌の内、公に発表された短歌に先行する最古の二首。

明治三五（一九〇二）年八月二日消印萩原栄次宛写真葉書より。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。萩原栄次は従兄（医師であった父密蔵の兄で萩原家医家十一代目萩原玄碩の長男。後に萩原主家十二代目となった。短歌をよくし、クリスチャンでもあったことから、若き日の朔太郎をそちらへよく導いた。謂わば、朔太郎の短歌の指導者であり、かの詩集「月に吠える」は彼に捧げられている）朔太郎より八つ年上）。二首の前に『只今青松館へ到着仕り候』、末尾に『八月朔日』とある。投函地は底本所収の当該書簡によれば『千葉縣下一ノ宮在青松館』。この避暑行は既刊全集の当該年には記載がない（『夏 一家で水戸海岸平磯へ避暑』とはある。なお、この直前の七月三十日消印の同人宛書簡に『明日九十九里が濱へ出發すべく候』とある）。古絵葉書販売サイト内にあった[同館の絵葉書](#)をリンクしておく（[同宛名面画像](#)も）。当時、朔太郎満十五歳。因みにここは後の大正五（一九一六）年に大学卒業直後の芥川龍之介（芋粥）脱稿直後で二十四歳）が久米正雄と避暑に訪れた「二宮館」の近くである。「いめ」は「夢」の上代語で「寝目^{いめ}」。「ゆめ」は平安以降に用いられた。校訂本文は「おほつ」を「おほき」とするが、採らない。」

* * *

朝行くに人目涼しき濱や濱小ぐつ玉靴玉漣のあと

えにし細う小き砂にたゞ泣きぬ歌は名になき濱のおぼる月

夏さむう歌もたぬ子の罪とはぬ君に上總の興は語られぬ。

「やぶちゃん注…明治三五（一九〇二）年八月十三日消印萩原栄次宛葉書より。投函地は同じく一ノ宮青松館。書簡末尾には『八月十二日夜』とクレジットされている。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。底本の短歌補遺パートの『書簡より』では第一首目を採っていない。これは、『坂東太郎』第三十四号（明治三五（一九〇二）年十二月発行）に掲載された、

朝ゆくに人目涼しき濱や濱小靴玉靴漣のあと

と相同歌と考えたからであろう（底本の書簡ではこの「玉漣」の「玉」の右に、前の「玉靴」の「玉」の衍字と判断する意味の傍点が附されてある）。但し、「ゆくに」「小靴」の表記が異なり、何よりもこの書簡の方が『坂東太郎』より先行するので初出としてこれは採るべきであると私は判断した。そもそも「玉漣」も確かに衍字が深く疑われるとはいえ、これをこう書いて「玉漣」と読ませようとした可能性を誰も排除は出来ないというのも私が採用した今一つの理由でもある。

二首目は、「ソライロノハナ」（推定で大正二（一九一三）年四月頃、朔太郎満二十七歳の時の製作）の「若きウエルテルの煩ひ」歌群の三首目に出る、

ゑにし細う冷たき砂にたゞ泣きぬ

戀としもなき濱のおぼろ月

の類型歌であるが、かなり異なる（「ゑにし」はママ）。三首目末尾の句点はママ。この短歌が本文の最後であることによるものと思われるが、暫くそのままとしておく。」

* * *

鞆のさゆらぎ止まぬ我が庭の芭蕉卷葉に細し春雨

「やぶちゃん注…『坂東太郎』第二十一巻第四号（明治三五（一九〇二）年十月発行）に服部躬治選で掲載された。底本の筑摩書房版全集第三巻の「短歌」の冒頭に載る。選者の服部躬治（明治八（一八七五）年〜大正一四（一九二五）年）は歌人で小説家水野仙子（せんこ）の実兄。福島生。国学院卒業後、跡見女学校で教鞭を執った。明治二六（一八九三）年に落合直文の「あさ香社」の結成に参加、明治三十一年には久保猪之吉・尾上柴舟らと「いか

づち会」を起こして新派和歌運動に活躍したが、大正期には歌壇から遠ざかった。歌集に「迦具土」。

かぐつちの血しほやここにたばしりし五百津磐村煙わきのぼる（「迦具土」）

（以上は講談社「日本人名大辞典」に拠る）。

当時、朔太郎、未だ満十五歳。

『坂東太郎』は前橋中学校（現在の県立前橋高等学校）の校友会誌。」

* * *

ひと夜えにし

おち椿ふみては人のこひしくて春日七日を倦^{うん}じぬる里

流れ来て加茂川さむき春のよひ京の欄人うつくしき

あけぼのの花により來しそぞろ道そぞろあふ人皆うつくしき

松落葉ふみつつ行けば里ちかし朝靄みちにうすれうすれゆく

朝ゆくに人目涼しき濱や濱小靴玉靴漣のあと

「やぶちゃん注…『坂東太郎』第三十四号（明治三五（一九〇二）年十二月発行）に掲載された。萩原朔太郎満十六歳。」

* * *

白黄紅花^{しろきべに}さまさまの菊に酔ひてとなりの翁けふもひるいする

そぞろにも逍遙ふ野邊の朝ぼらけ山西にはれて虹の彩ほそき

別れては京の白梅興もなし笛をたよりに加茂下り行く

「やぶちゃん注…『坂東太郎』第三十五号（明治三六（一九〇三）年三月発行）に「美棹」の雅号で掲載された三首。萩原朔太郎満十六歳。

一首目の「ひるい」は「昼寝」か。」

* * *

歌ここに十年をわびぬ幼くて母と抱きし情ならずや

大八島わだつみかけて天走る豊旗雲の大いなる哉

ふりかかる小雨ねたしや若うして人山吹の亂れにたへぬ

一しきり黄をながしては山吹の小里の水の竹をめぐれる

「やぶちゃん注…『坂東太郎』第二十三卷第三号（明治三六（一九〇三）年五月発行）に「上

毛 萩原みさを」名義で掲載された四首。萩原朔太郎満十六歳。

初出では三首目「ふりかかる」の歌の後に、

情景抱擁して離れず。

四首目「一しきり」の歌の後に、

纖巧。

とあるが、これらは先に示した選者服部躬治の選評である。」

* * *

桃すもも籠にすみれと我が歌とつみつゝゆかむ春を美しみ

「やぶちゃん注…『坂東太郎』第三十六号（明治三六（一九〇三）年六月発行）に「萩原みさを」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。」

* * *

○

○倦んじてはわびては讃ふ大佛も眠りておわす京の東大寺

○

○歌あまさず、ひきゝに忌まぬ名なし草もとより京をさむう行く水（二首京にて）

★ ★

○はかな小草つむに小さき戀も得つ浪江行く水情あらしめよ（大坂にて）

「やぶちゃん注・明治三六（一九〇二）年六月一日消印萩原栄次宛葉書より。投函地は前橋。朔太郎、満十六歳。圈点や記号類は書簡にあるもの。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。一首目の「讃」は原書簡では「言」の部分が「口」（くちへん）であるが、読めないので校訂本文の表記を採った。「おわす」はママ。二首目の読点はママ。三首目の「浪江」は校訂本文では「浪花」と訂している。採らない。」

* * *

たづたづし暗きにおつる身の果をなくさめ得なば足らむ我幸わがさち

かたじけなさぐるに君の御手を得てさながら落つる闇を厭はぬ

信しんにはなれひとりさびしきうつろの身くむ手よなよな何を得つるや

「やぶちゃん注・『明星』卯年第七号・明治三六（一九〇三）年七月号の「夏ばな」欄に「萩原朔（前橋）」の名義と在地で掲載された。

初出では二首目の下句が、

さながら落つる闇を厭 ぬ

と脱字。底本（筑摩版全集第三巻）の改訂本文の形で示した。

一首目の「たづたづし」とは「たどたどし」の古形で、はつきりせず不安である、おぼつかず心細い、の意。

萩原朔太郎満十六歳。」

* * *

紅梅に二十年を倦みし人の如おのづからなる才ふけにけり

よれば戸に夢たゆげたげの香ひあり泣きたる人の宵にありきや

相見ざる幾年へぬる君ならむ肱細うして泣くにえたえぬ

いささかは我れと興ぜし花も見き今寂寞にたえぬ野の道

はらからが小唱になりし我が戀にあたたまるべき水流れゆく

魂は人にむくろは我に露ながら夏野の夢のなごり碎くる

名なし小草はかな小草の霜ばしら春の名残とふまむ人か

「やぶちゃん注…『文庫』第二十三巻第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛萩原美棹」名義で掲載された七首。第三首及び四首の「たえぬ」はママ。萩原朔太郎満十六歳。

初出では三首目が、選者服部躬治によって、

相見ざる幾年へぬる君ならむ肱細うして寄るにえたえぬ

と朱をいれられて載る。但し、直後に、

原作の五句、「泣く^{△△}にえたへぬ」。

という注記を附して斧正であることが示されてもある。

六首目「魂は人にむくろは我に露ながら夏野の夢のなごり碎くる」の歌の後に、
悲思哀調。

又云。原作の三句「歸りきて」「太古さながら」とありき。

と、選者服部躬治の選評がある。この記載に基づいて別稿を復元しておく。

魂は人にむくろは我に歸りきて夏野の夢のなごり碎くる

魂は人にむくろは我に太古さながら夏野の夢のなごり碎くる

私は個人的は「歸りきて」が好みである。

『文庫』は明治二八（一八九五）年九月創刊の投稿文芸雑誌（明治四三（一九一〇）年八月終刊。通巻二四四冊）。明治二二（一八八八）年創刊の『少年園』から分かれた『少年文庫』が前身だが、小説・評論・詩・短歌・俳句などの新人育成の場として勢力を持つようになり、特に詩人や歌人にはこの雑誌を登龍門として後に一家をなした者の数は夥しい。『文庫派』の別称を持つ河井醉茗・伊良子清白・横瀬夜雨・塚原山百合（後の島本赤彦）らを初めとして北原白秋・窪田空穂・三木露風・川路柳虹らの大家を輩出した雑誌であった。」

* * *

野より今うまれける魂をさなくて一人しなれば神もあはれめ

沁みにしは無花果の葉の乳のごと清らにあまきおもひなりける

あめつちを歌にたたへし昨日けふは薊の精戀ふる人

おくつきは大あめつちの一つ石と笑みも入らばや寢ばやそのした

もとめわび信のろひて歸れるに心はうつろ身はもぬけがら

「やぶちゃん注」『明星』卯年第八号・明治三六（一九〇三）年八月号の「無花果」欄に「萩原美棹」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。この五首、短歌嫌いの私が何故か、ひどく気に入ってしまったことを告白しておく。」

* * *

倦みては人かわきては人よりも來よ詩はよろこびの溢れぬる酒

「やぶちゃん注」『明星』卯年第八号・明治三六（一九〇三）年八月号の「星夜」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。」

* * *

鳥なきぬ小椿水にながると山居の日記の一人興なし

浦づたひ讃へむすべを又知らず赤人の富士は眞白き（田子の浦にて）

「やぶちゃん注」『明星』卯年第九号・明治三六（一九〇三）年九月号の「香草」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。後者は無論、「万葉集」巻第三の山部赤人の知られた長歌と短歌（三一七及び三二八番歌）に基づく。以下に示しておく。

*

山部宿禰赤人、不盡山を望める歌一首并せて短歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布土の高嶺を 天の原 振り
放（さ）げ見れば 渡る日の 影も隠（かく）らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり
時じくぞ 雪は降りける 語り繼ぎ 言ひ繼ぎゆかむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打ち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける

*

反歌は「新古今集」や「百人一首」などでは、

田子の浦にうち出でて見れば白妙しろたへの富士の高嶺に雪は降りつつ
であるが、私はこの『改悪』を好まない。というより、赤人がかくしたのでない以上、『改悪』などという生易しいものではない。短歌嫌いの私に言わせれば、これは立派な犯罪であり、これを赤人の歌として披露して恥じぬ後代の者どもは皆、剽窃（本歌取りとは訳が違う）を確信犯とする救い難い共同正犯——厚顔無恥おたんちゃんの鉄面皮てつめんぴとしか思わないと述べておく。」

さだかにはおどろき薊もわかちえず闇にただ啼く夕ほとゝぎす

幸ありて御手のひと鞭たまはらば花のごとも散りや往ぬべき

「やぶちゃん注…『明星』卯年第九号・明治三六（一九〇三）年九月号の「紗燈涼語」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。」

* * *

淋しさに歌はなりてきしかはあれど春の一人を戀ひむよしもなし

幾度か草に伏したる一人ぞや後よりかへせ馬頭觀音

君は去りぬ残るは吾と小さき世の月も月かは花は花かは

朝の戸に倚ればかつ散る緋芍薬うしとも見たる雲のみだれや

天地に水ひと流れ舟にして我もありきと忘るべしや夢

み歌さらになつかしみしたひつゝ忘れかねては行く萩が原

大空の物の動きとめざめては秋ぞこの子をよみがへらす

さぼてんの花よりひくき夏の雲物憂と人にせまる無聊や

たゆたひし夢さへ遂に力なくたえむとあらば戀はうせぬべし

「やぶちゃん注」『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛美棹」名義で掲載された九首。萩原朔太郎満十六歳。但し、これらは選者服部躬治が附した圈点と考えられる。以下、初出に附された服部の選評を示す。

三首目「君は去りぬ」は歌の後に、

情念は可し、四五、駢儷、却て自ら弱む。

とある。「駢儷」は「べんれい」と読み、四六駢儷体、四六文のこと。本来は漢文の文体の一つで四字又は六字の句を基本として対句を多用して句調を整えるときにも各所に典故を配した華麗典雅な、六朝から唐にかけて流行した美文。本邦でも奈良・平安期の漢文に多く見られる。ここは単に構造上の対句表現の畳みかけを難じている。

全字に圈点「○」を附した五首目「天地に」の後には、

意を展ぶる潤達、調を諧するに悠舒、感興の大なるなり。

とする。「悠舒」は「いうじよ（ゆうじょ）」と読み、ゆったりとして伸びやかなさま。

同じく全字に圈点「ゝ」を附した七首目の「大空の」には、

巧緻なり、然れども巧緻弄せず。意趣油然たり。

と絶賛する。「油然」（ゆぜん／ゆうぜん）とは盛んにわき起こるさま、心に浮かぶさまをいう。個人的には「天地に」の方が確かに「巧緻」で上手いと思うが、前者の青年らしい感傷の方が私には好ましい。他の評、圈点の違いからは服部も前者をより評価しているように私は思う（そもそも他の評にもあるように修辭的な巧緻性は服部には二の次であったように思われるからでもある）。

第八首「さぼてんの」には、

上句風趣あり、下句興會なし。ありといへどもそれに伴ふ語と調となし。

と難ずる。「興會」とは聞き慣れぬ語であるが、「きようゑ」と読むか。興感、上句が醸成した感懷を下句の文字言辞に於いて引き出すところの共感的興感といったニュアンスであり、この評には大いに同感する。」

はかなみて投げにし戀のおもかげの悲愁^{ひしう}さそひて來るゆふべかな

かよわくて御國^{みくに}はぐくむ歌もなし身は孤獨^{ひとり}にてようる胸もなし

湧きむるもひとたび冷えし胸の血のゆらぎなればか詩はいたいたし

「やぶちゃん注…『明星』卯年第十一号・明治三六（一九〇三）年十一月号の「紗燈涼語」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十六歳。因みに朔太郎の誕生日は十一月一日である。」

* * *

人の世のわが身なればか秋なればか夜ごろ哀歌^{あいか}と聞く潮^{しほ}の聲

わが歌のわれとかぼそうなるを見てこころもとなく泣く夕べかな

人の身は問ふもうれたし己が身はかへり見するにえ堪へじよ秋

寂光^{じやくくわう}や瞳^{ななめ}さへぎるうすあかり情^{なさけ}からせし秋のたはぶれ

黒髪のながきが故の恨にて世をばせめにし吾ならなくに

草花にほそうそゞぎし涙さへ君が小袖に堪へざらましを

「やぶちゃん注…『白百合』第一巻第二号・明治三六（一九〇三）年十二月号の「哀歌」欄に「萩原美棹（前橋）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。

『白百合』はこの年、『明星』にあきたらず、新詩社を脱退して東京純文社を興した相馬御風・前田林外・岩野泡鳴らが発行した文芸誌。確かにこれらの短歌は『明星』のストリートで馬鹿正直な浪漫主義に一回捻りしたようなりズムと語彙を持っているように私には

感じられる。

三首目の「うれたし」は「慨し」。「心痛し」の音変化で、憎らしい、いまいまい、嘆かわしい、の意。」

* * *

ああ無道、そこに幾日を住みわびつ。慣なれば世人の我も安けき。

その香ゆゑにその花ゆゑに、人は老を、泣きぬ泣かれぬ、こき紅椿。

うれし身は虫の鳴くごとうたふごと、かごとの宵ぞうつりけらしな。

草にふして美し人は泣きもやまず。別れもあへず、野はくれせまる。

わぎはひは野ゆく山ゆく君により吾によれども淋しともなし。

淋しけれど人は恨まじなげくまじ。おのが世なればやせもしてまし。

こほる月にむせぶか千々の草の花。露のさゞめき悲しげなるに。

よろこびに今ぞわがごと祝がへ虫。地に歌たりし幸や秋。

頼りつつむくろは地にながらへよ。うら淋しきに靈はほろびよ。

この戀よ、亂れて末は知らなくに、おどろにまとふ紅つたのごと。

うれたくも思はかれつ名はうせつ。吾に笑めとやせまる戀歌。

初秋や雁やそら行く中空に、みつる光は靈のきざしよ。

たゞひとり世をば讃へし子が門に榮えよ、さかえよ花緋木蓮

くらやみに動くものあり。日はしらで、いたち、もぐらのよべる如く。

「やぶちゃん注」『文庫』第二十四巻第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。圏点は選者服部躬治によるもの。一首目の下の句で一箇所だけ「も」となるのはママ。底本筑摩書房版全集の校訂本文では、「慣」の「な」のルビを誤りとし、「なる」として「慣れば」と『校訂』しているが、従わない。また、拡大して戴くと分かるが、最後の一首に配された圏点は「ゝ」ではなく、このみ白抜き「ゝ」であるので注意されたい。

『文庫』は明治二八（一八九五）年九月創刊の投稿文芸雑誌（明治四三（一九一〇）年八月終刊。通巻二四四冊）。明治二二（一八八八）年創刊の『少年園』から分かれた『少年文庫』が前身だが、小説・評論・詩・短歌・俳句などの新人育成の場として勢力を持つようになり、特に詩人や歌人にはこの雑誌を登龍門として後に一家をなした者の数は夥しい。『文庫派』の別称を持つ河井醉茗・伊良子清白・横瀬夜雨・塚原山百合（後の島木赤彦）らを初めとして北原白秋・窪田空穂・三木露風・川路柳虹らの大家を輩出した雑誌であった（ここは平凡社「世界大百科事典」に拠った）。

* * *

相似たる人か木精かひそみきて呼べば應ふる日なるが如し

ひよ鳥の啼くや朝雲寒うして人とすなほに別れけるかな

しら露におもひ消ぬべき心地して母なぐさめて摘む秋の草

夕月のさせば武藏の母もきてありし昔の夢さそふ夜や

「やぶちゃん注」『明星』卯年第十二号・明治三六（一九〇三）年十二月の「金鶏」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。」

* * *

やさし手に成りし小兎^{なんてん}南天の愛らしひとみものは云はずや

「やぶちゃん注…『明星』卯年第十二号・明治三六（一九〇三）年十二月の「寒菊」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。」

* * *

江を下る身をきる鳥の聲もして利根の夕靄悲哀はせまる

「やぶちゃん注…明治三七（一九〇三）年二月二十五日消印萩原栄次宛葉書より。投函地は前橋。朔太郎、満十七歳。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。書簡全体との連関性が窺われる歌であるので、全文を引いておく。

*

二十二日東屋に聲あり、一女生る、
名は未だ知らず幸に面白き御命名も玉はり度候、
先日は美しき葉書難有拜見仕り候 過日小生より差上げたる手紙受取りのことゝ存じ候
へ共念の爲申し上げ候、

★

友やなせ洗禮を受け候、小生も日曜毎には教會に足をはこび候、疑がはしき節甚だ多く
後日御教を仰ぎ申すべく候、

招魂河畔梅の花今を盛りに人の杖ひくもの日々数おほく候 たゞ悔しきは朝夕の逍遙に
心行く下河原を畑と化して人の歩むをとどめたることに候

江を下る身をきる鳥の聲もして利根の夕靄悲哀はせまる

二月廿四日、 前橋にて 美棹生、

*

「東屋」開業医であつた密造の医院の、自宅が東にあつたものをかく呼んでいるか。「一女

生る」は同年二月二十二日に誕生した妹（密蔵・ケイの五女）アイ（愛子。結局、彼の命名案が示されたらしいが、それ以前にかく命名されていたことが次の書簡（補巻・書簡番号七七三）の冒頭で記されてある）のこと。「先日は美しき葉書」底本注記によれば、利根河原の写真葉書らしい。「友やなせ」同じく底本注記によれば、『日本赤十字社及び東京大學附屬看護業務を學んだ』『築瀬看護婦會長』『築瀬まつ』の娘で朔太郎と親交のあったと思しい『築瀬芙美（當時十五、六歳）のことと思われる』とある。書簡七七三を読むと、家族ぐるみで親しくしていたらしい。なおこの二月に日露戦争が勃発、全集年譜によれば、父密蔵は軍資献納二百円（群馬県最高額）を寄附、計一万二千五百円に及ぶ国庫債券も購入している。また、四月には日本赤十字社篤志看護婦人会群馬支部が結成されているが、母ケイはその幹事の一人となっているが、これも日露戦争を背景としつつ、『築瀬看護婦會長』なる『築瀬まつ』という人物との親密な関係によるものを窺わせるように思われる。

「招魂河畔」前橋の利根川河畔のどこかの川原の通称であるが、不詳。後の「純情小曲集」の、

＊

利根川のほとり

きのふまた身を投げんと思ひて

利根川のほとりをさまよひしが

水の流れはやくして

わがなげきせきとむるすべもなければ

おめおめと生きながらへて

今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。

きのふけふ

ある甲斐もなきわが身をばかくばかりいとしと思ふうれしさ

たれかは殺すとするものぞ

抱きしめて抱きしめてこそ泣くべかりけれ。

＊

や、同詩集の「郷土望郷詩」の「監獄裏の林」などの原風景と考えてよいであろうか。」

＊

＊

＊

京の子なりき

たまたまに問へば趣もなき天王寺姉とひろひし落つばきかな

その香故にその花故に人は老を泣きぬ泣かれぬ濃紅椿（こきづきつばき）

哀愁（あいしゅう）の聲よりさめて我みしは一つ眼（ひとめ）をどる眞洞（まぼら）やみの世

春をいまだ朝睡の人の面影やはづかしげなる雲とながれて

「やぶちゃん注」『坂東太郎』第三十八号（明治三七（一九〇四）年三月発行）に掲載された。「濃紅椿」のルビ「こきづきつばき」はママ。萩原朔太郎満十七歳。

一首目の「姉」は実際の「姉」ではない。朔太郎の実在の姉は確かにいたにはいたが、朔太郎誕生の二年前に出生後幾許もなくして亡くなっている。以下、底本年譜によれば、明治一七（一八八四）年一月十八日生で名は「テイ」である（但し、戸籍上の記載はなく、墓碑に記されるのみである）。この「姉」とは何者か。親族の年上の思いを寄せていた誰彼であろうか、それとも……。

二首目は既に示した通り、

その香ゆゑにその花ゆゑに、人は老を、泣きぬ泣かれぬ、こき紅椿（べに）。

の形で、四ヶ月前の『文庫』第二十四巻第六号（明治三六（一九〇三）年十二月発行）に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載されている。「濃紅椿」の「こきづきつばき」は底本全集

改訂本文では、この先行する句形を根拠として「こきべにつばき」と訂している。穏当な補正ではある。しかし、しかし果たして本当にこれは単なる、この前橋中学校（現在の県立前橋高等学校）の校友会誌編集者や発行所の誤植であると断じられるのであろうか？

朱・赤・紅という色からは、今のように絶滅してしまう以前にあつては普通に見られた朱鷺（とぎ）（ペリカン目トキ科トキ亜科トキ *Nipponia Nippon* ——「鴝」「鶉」「桃花鳥」などとも書く。……それにしても何と美しい学名であることか……日本は「日本」を……とつくに、殺していたのである……）が普通に連想され「鴝色（とぎいろ）」という色名さえある。そうして、朱鷺の中国名や古典での別名は「紅鶴」と書き、これを古語では「つき」と読んだ。私はこの事

実一つをこの一首に並べてみただけでも、そう簡単には底本全集改訂本文を無批判に支持することは出来ないでいるのである。」

* * *

われにつらき悲しき君が影氷柱^{こおりむすね}いだけば身の凍^こるらし

感じてはわれおもしろし興ありて神がつくりし此かたは者

今出川菜^{いで}つみ流ししおもひでや趣^{しゆ}なき此日を忌む頻なる

「やぶちゃん注…『明星』辰年第三号（明治三七（一九〇四）年三月発行）の「雛の夜」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。」

* * *

天^{あめ}がける飛鳥^{ひちやう}かしらずゆかしむは鸚鵡^{ひんぽう}なりにし人の釋迦牟尼

「やぶちゃん注…『百合』第一巻第六号（明治三七（一九〇四）年四月発行）の「純文社詩稿」欄に「萩原美棹（前橋）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。歌意は私には今一つ、不審。因みにヒンドウ教ならば、インドはタミール族に伝わる伝承で、シヴァとパールヴァティーの息子とされる神カータヴァラーヤンが愛するマラー姫に逢うために鸚鵡^{ひんぽう}に変じてはいる（詳細なストーリーはブログ「[Priyan News & Gossips](#)」の当該神話を映画化した作品についての評「[レビュー：Kathavarayan](#)」に詳しい。しかし「釋迦牟尼」では意味が通らぬ。識者の御教授を乞う。」

* * *

夕吹雪西の京ふく日を思ひたれ戀ふとなく涙はながる

今にしてわがうた更になつかしやかへり見するに戀幼うて

かくありねありねと人の教ふるに來しわれゆゑに戀はなかりし

「やぶちゃん注…『白百合』第一卷第六号（明治三七（一九〇四）年四月發行）の「華籠」欄に「萩原美棹（前橋）」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。」

* * *

ああひと日、夢に草花美しう、胸に根こじに貸すことあらば。

かくてまた憂いかな春の夕光。きけや身をきる罪の子の歌。

五十鈴川五十鈴の宮の大前に、巨鈴なるごとわが詩高鳴る。

緋芍薬花ちる庭の艶やかさ、戀は濃雲と凝りにけらしな

いつの世より戀か香をもつそよ風の、疾風吹雪となりにしものか。
はやちふゑき

足んぬ智は、敢えてしねがふ歌の幸。來む世思はず、欲らず桂も。

そゞろ行くに、ここは名の國智慧の國。ふたゝび思ふ戀はいづかた。

たまさかに問へば趣しゆのなき天王寺、姉と拾ひし落椿かな。

母を失ひたる友に代りて

何者か行方さへぎる夜毎夜毎。母と添寢の夢ならなくに。

「やぶちゃん注…『文庫』第二十五卷第六号（明治三七（一九〇四）年四月發行）に「上毛萩原美棹」名義で掲載された九首。服部躬治選。萩原朔太郎満十七歳。

二首目「かくてまた」の「憂い」はママ。

三首目「五十鈴川」の「五十鈴の宮」は伊勢神宮内宮である皇大神宮の別称。下句の「巨鈴」（「こすず」と読んでいよう）は「五十鈴」から掛詞的に引き出された心象である。神仏習合以前の神道の古形を守る伊勢神宮には鰐口（鈴）はない。

五首目「いつの世より」の「疾風吹雪」の部分は一語と捉えず「疾風」（読みの「はやち」の「ち」は「東風」の「ち」と同じで、古典で「〜（の）風」の意の熟語を作る造語成分。「はやて」に同じい。）から「吹雪」へと推移するイメージと採る。

六首目「足んぬ智は」の「足んぬ」は、動詞「足る」の連用形に完了の助動詞「ぬ」の付いた「たりぬ」が撥音便化したものの名詞化したもので、満ち足りること。満足。堪能の意（あまり知られていないが、「堪能」という熟語自体、この「たんぬ」が音変化した語で「堪能」は全くの当て字である）。

七首目「たまさかに」の一首は、先に示した『坂東太郎』第三十八号（明治三七（一九〇四）年三月発行）に、

京の子なりき

たまたまに問へば趣もなき天王寺姉とひろひし落つばきかな
で載る。」

* * *

夢の國は流もありて花さきて音よき鳥さへ住むと聞けども

ふる山のきこりをとこが瘤とりし鬼なつかしや舞はむともども

牧の野の童に似たるあこがれが鞭もて死をば追ひ行くごとし

つめたげの眼百千は地にあれ愛にわが足る天の星々

手をあげて招けば肥えし野の牛も來りぬよりぬ何を語らむ

朝櫻すこしこぼれぬ折からの歌もおはまば染め出で給へ

「やぶちゃん注…『明星』辰年第六号（明治三七（一九〇四）年六月発行）の「鳴潮」欄に「萩原美棹」の名義で掲載された。萩原朔太郎満十七歳。

二首目「ともども」の後半は初出では「へ」。

四首目のルビの「ほしぼし」は初出では「へ」。

六首目の「おはめば」は底本全集の校訂本文では、朝櫻すこしこぼれぬ折からの歌もおはせば染め出で給へと訂されてある。」

* * *

夏衣

御送りの燭灯百千は櫻ともし さくしとて天童かざす別とあらば。

「やぶちゃん注…本首、精霊流しの情景かと思われるが私は歌意が汲めない。識者の御教授を乞うものである。」

昔見し花ちる里の古き井にありける影や幼な君われ。

古山の木樵男が瘤とりし鬼なつかしや舞はむともども。

「やぶちゃん注…「ともども」の後半は踊り字「へ」。本歌は、

ふる山のきこりをとこが瘤とりし鬼なつかしや舞はむともども

の表記で前月の『明星』辰年第六号（明治三七（一九〇四）年六月発行）に発表済み。」

音なしう涙おさへてあればとて春の光はくれであらめや。

スラブみなしはかれ聲に御軍の吾たたゑなむ日をも待つべし。

「やぶちゃん注…「しはかれ」「たゝゑなむ」はママ。底本改訂本文では、スラブみなしはがれ聲に御軍の吾たたへなむ日をも待つべし。と『訂正』されてある。

「スラブ」はスラヴ民族の連帯と統一を目指す汎スラヴ主義の思想者を指すか。「吾」とはそうした戦闘的汎スラヴ主義を唱える闘士を漠然と指すか。これは何か汎スラヴ主義運動のニュース報道や映像その他に触発された、朔太郎自らを汎スラヴ主義者に仮想したところの空想の一首か。今一つ、歌意を汲めない。識者の御教授を乞う。」

今ぞ世は驚かれぬる。パン神の領かたまたま堪へぬ寂寞^{しごま}に。

「やぶちゃん注…「たまたま」の後半は踊り字「へ」。

詩人の歎きというか、猥雑なる外界との断絶感はあるが、私が馬鹿なのか、今一つ、「パン神の領か」が指弾している対象の核心が今一つ見えてこない。どなたか、是非、御教授を願いたい。」

小羊の頸ふる鈴の優し音に似しともきゝし野行く春風。

人の歌は誦さむに寒ういたいたし。つめたければや胸たりるなし。

「やぶちゃん注…「いたいたし」の後半の「いた」は踊り字「へ」。

以上八首は『坂東太郎』第三十九号（明治三七（一九〇四）年七月発行）に掲載された。萩原朔太郎満十七歳。」

* * *

ゆふ月のさせば武蔵の母もきてありしむかしの夢さそふ夜や

月ふめばそぞろさびしき名はうせて濱の夕べをおどり笑む人

慕ひ行くにそこは名の口、智慧の口二度おもふ戀はいつかた

あひ行くに秋雨ほそう道ほそし人よみ手なる傘をたまへな

「やぶちゃん注…『白虹』創刊号（明治三七（一九〇四）年十一月発行）の「九輪草」欄に掲載された。萩原朔太郎満十八歳。「□」は「國」の古字。

『白虹』は「はっこう」と読み、岡山にあった血汐会（明治三十六年に当時、関西中学に在籍していた入沢涼月（本部は岡山市大字花畑の彼の自宅）・有本芳水・美土路昌一（元朝日新聞社長）らによって結成された文芸結社）が発行した文芸雑誌。同誌には尾上紫舟・小山内薫・正宗白鳥・小川未明ら中央の作家も寄稿した。

一首目は先の『明星』卯年第十二号（明治三六（一九〇三）年十二月発行）に、夕月のさせば武藏の母もきてありし昔の夢さそふ夜や
の表記で既発表。

三首目は先の『文庫』第二十五卷第六号（明治三七（一九〇四）年四月発行）に、そごろ行くに、ここは名の國智慧の國。ふたゝび思ふ戀はいつかた。

のヴァリアントである。なお本歌は底本改訂本文では、漂泊洗淨が施されてしまい、慕ひ行くにそこは名の國、智慧の國、二度おもふ戀はいつかたと綺麗に乾されてある。」

* * *

口紅に新春少女十六の笑うつくしき梅の園生や

「やぶちゃん注…『文庫』第二十八卷第二号（明治三八（一九〇五）年二月発行）に「上野美佐雄」という名義（過去に見られない雅号である）で掲載された。渡邊光風選。萩原朔太郎満十八歳。渡邊光風は、この新派和歌運動胎動期に当『文庫』や『青年文』『少年文庫』といった文芸投稿誌の短歌選者として知られた歌人。」

* * *

あはたゝし燃ゆる災の火車を忘れていにしつらき君かな

「やぶちゃん注…「あはたゝし」「災」はママ。底本改訂本文は、あわただし燃ゆる炎の火車を忘れていにしつらき君かなと訂す。」

たゝ願ふ君の傍へにある日をば夢のようなるその千年をば

「やぶちゃん注…「ようなる」はママ。「たゝ」は初出「だゝ」であるが、初出誌の誤植と断じて訂した。底本全集改訂本文も「ただ」。」

われ君を戀はん戀しき心より君を思へば胸ただ火なり

綾唄やあるひは牛の遠鳴や、君まつ秋の野の更けにけり

「やぶちゃん注…初出「更けにげり」。初出誌の誤植と断じて訂した。」

風ふきぬ木の葉地をうつ秋の夜はまたるゝ君かさびしと思へ

「やぶちゃん注…以上五首は『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された。萩原朔太郎満十八歳。」

* * *

ゑかたびら

山ずみの一人ありて文きぬと、封をし切らばたちばなこぼれむ。

通夜の夜を燈灯かこむ物語、欠伸かはゆき子の姿かな。

夏の日や、簾あまねくたれこめて、涼しと書きぬまづやる文へ。

ほとゝぎす、梅雨さみだればれの白日や、大河流るゝ音きゝ居れば。

さつきやみ烟たなびく暮れ方を、夢のようにて人に添ふみち。

大坂やわれ小なうて伯母上が、肩にすがりし木遣り街かな。

花やかに、かんてら燭ともすえん日を、二人いづれば月のぼりけり。

山百合の一輪うえて人まつと、まつり日いでし好きよあにびとよ。

梅雨つゆばれの柳色ます門邊をば、草笛ふきて君よぎりぬと。

山吹の垣根つくりてある夕、少女すむ家と仲へだてけり。

夕月や橋の袂に衣白き、人と別れぬ山百合のはな。

さくら貝、ふたつ重ねて海の趣味、いづれ深しと笑み問とはれけり。

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作。当時、朔太郎満十八歳。

五首目「夢のように」はママ。

六首目「小なうて」は「をさなうて」と読む（後注参照）。底本改訂本文では「幼なうて」と『訂正』するが採らない。

八首目「うえて」はママ。

十一首目「袂」はママ。

このうち、六首目「大坂や」と掉尾「さくら貝」の二首は、後に見るように第六高等学校『校友会誌』（明治四一（一九〇八）年十二月号）に、「美棹」署名で「水市覺有秋」の題の七首の中に配されて、それぞれ（順序は逆転されている）、

大坂やわれをさなうて伯母上が肩にすがりし木遣街きやりかな

櫻貝二つ竝べて海の趣味いづれ深しと笑み問はれけり

と改稿されている。以前にも「さくら貝」の短歌を単独で挙げた際にも述べたが、短歌を解さない私ではあるが——であるが故に——この一首は断然、この初出形の方が美しい。」

* * *

ろべりや

共住ともずみの好少このみなき君にして六月う植ゑぬろべりやの花

夏花なつばなに趣しゆある小家こいへの人なれば面影おもかげに似し戀もする哉

振袖ふりそでの桔梗きんぎょうの花の色いろのよきなつかし人ひとと涙もよほす

姉をんなに似し女も見たるその家に撫子なでしこうゑむ京きやうぶりにして

綾唄あやうたや或は牛とほなきの遠鳴とほなきや君待まつ秋あきの野は更ふけにけり

あはたゞし焼もゆる盆ほのほの火車ひくるまを忘わすれて行いにしつらき君かな

御手みてそへて悲しみ給たまへ野かざるを戀こひなき人の十九夏草

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された七首連作。同号には他に後に掲げる三群からなる十九首が載る。当時、朔太郎満十九歳。

「ろべりや」キキヨウ目キキヨウ科ミゾカクシ（溝隠）属 *Lobelia* のロベリア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）及びその園芸品種をいう。南アフリカ原産の秋播きの一年草で、高さ二十センチメートルほどでマウンド状に広がる。四月から七月頃に青紫色の美しい花を咲かせ、花色は赤紫色やピンク・白色などがある。（weblio

辞書の「植物図鑑」にある「[ロベリア・エリヌス（瑠璃蝶草）](#)」に拠った。画像は[グーグル画像検索「*Lobelia erinus*」](#)も参照されたい。

一首目の「ともづみ」の読みはママ。

五首目は、本初出では、

唄或は牛の遠鳴きや君待つ秋の野は更けにけり

であるが、これでは音数がおかしく、しかもこれは先の『白虹』第一巻第四号（明治三八年（一九〇五）年四月発行）に、

綾唄やあるひは牛の遠鳴や、君まつ秋の野の更けにけり

（「けり」は初出では「げり」と誤植）と同歌稿であるから、かく訂した（底本全集校訂本文もこれを探る）。

六首目の「あはたゞし」「焼ゆる」はママ。これはやはり『白虹』第一巻第四号に載る、あはたゞし燃ゆる災の火車を忘れていにしつらき君かな

（「災」は「炎」の誤植と思われる）と同歌稿である。

七首目の「野かざるを」は意味不明。「野飾るを」か。にしても韻律がすこぶる悪い。」

* * *

青すだれ吹く夕風は美き人の稽古おへたる窓よりもれて

ほとゝぎす女に友の多くしてその音づれのたそがれの頃

稻の穂は浅間かくすに丈たらず君と行く子に日は照りそへど

微風の歌語り吹く途すがら四の袖に螢おさへぬ

はなあやめ二十六夜の月影に透かして見たる帷子の人

春の夜やとある小路に驚きぬ巨人のように見えし水甕に

見代せば何の奇もなく友はあり相別れては胸やぶるまで

圓ろやかに名手は胸の上に置き左苺の草つむ少女

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作。同号にはこの前に、前に掲げた「ろべりや」七首、この後には後に掲げる二群からなる十一首が載る。当時、朔太郎満十九歳。

一首目「夕風」のルビは「ゆふやぜ」であるが誤植として訂した。「稽古」の「稽」の字の（つくり）の中の「匕」は初出では「上」の字体。「おへたる」はママ。

六首目「小路」の「こじ」はママ。底本全集校訂本文では「こうぢ」とする。「ように」もママ。

掉尾の「名手」はママ。底本全集校訂本文では「馬手」とする。」

* * *

ほしいまゝくづほれ泣けば寒き世も光そひくる心地のみして

夜は夜にて晝は晝にて戀いてあらばエトナの山はもえであるべし

からくりに見たる地獄の叫喚が待ち居るものと思ふ可笑しさ

寂律や葦に物いふ夕澤邊鳴立つからに思ふ西行

古年や王者に似たる思いでゝ浮び來淡く秋の夕雨

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された五首連作。同号にはこの前に、前に掲げた「ろべりや」七首の他、二歌群が載る。当時、朔太郎満十九歳。

二首目「戀いて」はママ。「エトナ」はイタリア南部シチリア島の東部にあるヨーロッパ最大の活火山エトナ山 (Etna)。ギリシャ神話ではガイアの息子で不死の怪物の王ティフォ

ンが封じられているとされ、また鍛冶神へパイスツスはこの山精であるエイトナを愛人とし、その情熱的な生涯の最後の仕事場としてこの山を選んだとも伝えられる。ただ、私が馬鹿なのかこの歌の意味は今一つ、よく汲み取れない。自分の恋情の炎が日夜絶えず激しければ、永遠の火を噴くはずのエトナ山でさえも、その私の情熱故に燃え尽きてしまうであろう、とでもいうのであろうか？ どうも短歌の苦手な私には分からぬ。識者の御教授を乞うものである。

三首目「叫喚」は初出では「叫喚」であるが、誤植と断じて訂した。無論、底本全集校訂本文も「叫喚」とする。「けうかん」の読みはママ。

四首目「ゆうさわべ」の読みはママ。」

* * *

夕ゆうざれやもろこし畑はたけ吹く風に衣手ころもでさむき秋は來にけり

春の夜や歌うたに更ふかせし小人せうじんの口元可愛かわゆき笑あみをしぞ思ふ

ほとゝぎす鳴なきぬ藤氏とうしを語る夜に秀才しうさいなれば簾みすまきあげよ

梅雨つゆばれの大河流るゝ國くにを北きたに晝顔ひるがほうゑぬ夢ゆめみる人と

古家ふるがやに昨日きのふ咲きたる五月花さつきばなつみな玉たまひそ雨降り出でむ

君見れば二條に生なひし街粧まちづくり扇もつ手の品てづくりけり

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ろべりや」他二十六首の掉尾を飾る六首連作。当時、朔太郎満十九歳。これらは例えば三首目が「枕草子」の「鳥は」と「香炉峰の雪」に基づく（藤氏を語る」は後発の「大鏡」の「藤氏物語」に引つ掛けた話であろう）、一種の時代夢想詠で統一されているように私には見える（但し、総てについての典拠を私は理解している訳ではない。また残念ながら、これらの短歌の印象はそれを探り

たいという興味も私には湧かせないものでもある。

一首目「夕ざれ」の読み「ゆう」はママ。

二首目「可愛ゆき」の読み「かわ」はママ。

五首目は初出では下句が「つみ玉ひそ雨降り出でむ」となっているが、脱字と断じて「な」を補った。底本校訂本文も無論、そうなっている。

六首目「品づくり」を底本校訂本文は誤字として「品つくり」と『訂正』している。私は従えない。」

* * *

窓に寄る日

燈灯のまへに君ありわれのありうれしけれども言の葉のなき

寒き日や胡瓜畑の霜を思ひ湯あみする窓を月のぞきけり

別れ居る心は淋しけどものを飼ひて生くべき日とよう似たる

山の上に一人家する夢を見て寝ざめの床はうるほひにけり

逢瀬山また口悪き博士等が見たまはずやと人のきづかひ

里川の底にうつれる星くづをいくつ數へて人にあふべき

「やぶちゃん注」『晩聲』創刊号（明治三九（一九〇六）年四月発行）に「美佐雄」の筆名で所収された。当時、朔太郎満十九歳。『晩聲』という雑誌は不詳。明治三七（一九〇四）年十一月十五日創刊の君島東陽編輯の暁声雑誌社の評論雑誌に同名のものがあるが、創刊年や雑誌の性質から別物である。

巻頭の「燈灯」は底本全集校訂本文は「燈火」と『訂』する。

「逢瀬山」の「口悪き博士」は何か典故があるのだろうか。識者の御教授を乞うもので

ある。」

* * *

ひまはりばな

驚きぬ日輪みれば紅熱して向日葵ばなと接吻するに

極熱の印度の人は色黒く物いふさまも倦き形かな

南國の窓に芭蕉の實を割るとさゝくれしたる人を夢みぬ

支那へ行く大路もとむと朝いでゝ夕かへらぬ逍遙人は

夢ざめや涙の痕にをどろきて少しく思ふよし幼なこと

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十四号（明治三九（一九〇六）年七月発行）に「美棹」の筆名で掲載された。朔太郎満十九歳。

四首目「逍遙人」のルビは初出では「せうよぶびと」。誤植と断じ、訂した。底本校訂本文も無論、「せうえうびと」とする。

五首目「をどろきて」及び「幼なこと」はママ。」

* * *

おどろきぬ日輪みれば紅熱してひまわりばなとくちづけするに



お染さまあれ久さまとより添ひてふたりゆく手に闇のあやなき

「やぶちゃん注…『無花果』（明治三九（一九〇六）年十一月発行）に「美棹」の筆名で掲載された。朔太郎満二十歳。「ひまわり」はママ。この第一首は先に掲げた『坂東太郎』第

四十四号（明治三九（一九〇六）年七月発行）の一種と表記違いの同一歌である。」

* * *

水市覺有秋

むらさきす路上の花のちひさきを愛づるばかりにゆく車かな

千石の水あぶ心地日ぐらしの一時に啼きぬ木蔭路入れば

海戀し山に登れば遠山は波のやうなり風の音さへ

櫻貝二つ並べて海の趣味いづれ深しと笑み問はれけり

「やぶちゃん注…三年前の前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に発表した「ゑかたびら」十二首連作の掉尾の、

さくら貝、ふたつ重ねて海の趣味、いづれ深しと笑み問はれけり。
の改作。初出に劣る。」

大坂やわれをさなうて伯母上が肩にすがりし木遣^{きやり}街かな

「やぶちゃん注…三年前の前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に発表した「ゑかたびら」十二首連作の一首、

大坂やわれ小なうて伯母上が、肩にすがりし木遣り街かな。
の表記違いの同一作。」

あめつちの途^{みち}にははぢぬ我ながら歌を一人の君にかくしぬ

ほとゝぎす女に友の多くしてその音づれのたそがれのころ

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に発表した八首連作の一首、

ほとゝぎす女をんなに友ともの多くしてその音おとづれのたそがれの頃
の表記違いの同一作。

以上七首は、第六高等学校『交友会誌』明治四一（一九〇八）年十二月号に掲載された。朔太郎満二十二歳。彼はこの前年九月に熊本の第五高等学校第一部乙類（英語文科）に入学したが、この年の七月に第一学年を落第、同月、岡山の第六高等学校を受験して合格、同年九月に同校第一部丙類（独語文科、独語法科）に入学していた。因みに但し、結局、定期試験を受けずに問題視されて六高も翌明治四十二年七月に落第、翌四十三年四月には慶応義塾大学部予科一年に入学するも同月中に退学（理由不明）、同年六、七月頃には六高もまた退学している（当時、チフスに罹患しており、表向きの退学理由はそれであるように底本年譜の記載では読めるように書かれてある）。学歴の仕切り直しは明治四四（一九一一年）五月の応義塾大学部予科一年の再入学であるが、ここもまたしても六ヶ月後の同年十一月に退学し、これが萩原朔太郎の最終学歴となった。」

* * *

かゝる日

○あゝえたえず、と思ふときは日記をくり。死なんと書いて心しづまる、

「やぶちゃん注…「たえず」はママ。この一首は、後の「ソライロノハナ」（昭和五二（一九七七）年に萩原家が発見入手したもので、それまで知られていなかった自筆本自選歌集。死後四十年、製作時に遡れば実に六十余年を経ての驚天動地の新発見であった。「自叙傳」のクレジットは『一九一三、四』で一九一三年は大正二年で同年四月時点で朔太郎は満二十七歳であった）の歌群「何處へ行く」の章にある、

あゝえたえず、と思ふときは日記にきをくり
死なんと書いて心しづまる

の表記違いの相同歌。」

○二三人木枯らふける大道を。去來す胸の淋しき思へ

○くれないの軍服着たる友の來て今日も語りぬワグネルのこと、

「やぶちゃん注…「くれない」はママ。この一首は、「ソライロノハナ」の歌群「午後」の、

くれない
紅の軍服着たる友の來て

今日も語りぬワグネルのこと

の表記違いの相同歌。」

○學問のきらひの男今日もきて。戀の話をしてかへりけり

「やぶちゃん注…この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」の章にある、

學問のきらひの男今日もきて

戀の話をして歸りけり

の表記違いの相同歌。」

○友の顔みるごと我は思ひいづ。かつて借したる金のわづかを

「やぶちゃん注…「借したる」はママ。底本の「短歌」補遺の本文では「貸したる」と訂するが従わない。古くは「貸」「借」の字は慣用上、相互に通用したからである。」

涙川ながれを早みのる舟の、棹さしかねついちち行くらん、

「やぶちゃん注…この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」の章にある、

涙川ながれを早みのる舟の

棹さしかねついちち行くらん

の表記違いの相同歌。」

○ぶらじゐるの海の色にもよく似ると。君の愛でこし青玉オウバースかな

「やぶちゃん注…この一首は、「ソライロノハナ」の歌群「午後」の、
ぶらじるの海の色にもよく似ると

君の愛でこしオツパアスかな

相似歌であるが、「青玉」の漢字表記及び「オツパース」という長音符使用が大きく異なる。これについては既に「ソライロノハナ」の当該歌の注で記したが、再掲しておく。ここに記された「青玉」という漢語は「サファイア」のことを指す。しかし英語の文字列「Sapphire」や発音は、どう考えても「オツパアス」又は「オツパース」とは読めない。これに近いのは同じ宝石の「黄玉」、則ち、「トパーズ」、「topaz」しかない。ただこれを誤用と指摘出来るかと言うと、実はトパーズにはブルー・トパーズという青色のものがあるから、これ、一概にトンデモ誤用とは言えない気がするのである。取り敢えず注はしておくこととした点である。これは最早、相同歌ではない。解題を見ると『全く同一字句のものは採らなかった』とあるが、これは『全く同一字句』では断じて、ない。」

○タざればそぞろありきす銃機屋の。まへに立ちてはピストルをみる、

「やぶちゃん注…「タざれば」「銃機屋」はママ。この一首は、翌年の『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された
タざればそぞろありきす銃機屋のまへに立ちてはピストルをみる
の表記違いの相同歌。」

○理想など高き聲にて言ひし故。あまたの人にとまれしかな。

「やぶちゃん注…この一首は、「ソライロノハナ」の歌群「午後」の、
理想など高き聲にて言ひし故
あまたの人にとまれしかな
の表記違いの相同歌。」

○君とわれ同じますにて見たる夜の芝居の膜の美しきこと

○目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る聲をきゝ。ところも知らぬ支那の街ゆく

「やぶちゃん注…この一首は、「ソライロノハナ」の歌群「午後」の、
目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る音をきゝ
ところも知らぬ、支那の街ゆく

の相似歌。「音」が「聲」となっており、相同ではない。底本の全集補巻では本一首を短歌の補遺に再録していないが、これは再録しなければならない類の有意な違いである。」

○フリユートを習ふ三夜さんやいもいねす。これがためにか肺をいためし、

「やぶちゃん注…「いねす」はママ。校訂本文は「いねず」とする。」

○自動車吾が住む家かきせるかみ。長外套をきて居るによき、

○八月は日輪ひぐるま花咲きぬ盛んなる、花は伏屋ふせやの軒をめぐりて、

「やぶちゃん注…この一首は、「ソライロノハナ」の歌群「午後」の、

八月や日向葵ひぐるまさきぬさかんなる

花は伏屋ふせやの軒をめぐりて
の相似歌である。」

○その女何とか言ひて吾が肩をふたつたゝしことがうれしき

「やぶちゃん注…この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」の章にある、
その女何とか言ひてわが肩を
ふたつ叩きしことがうれしき
の表記違いの相同歌である。」

○ピストルを持ちて歩けば巡查よびとがめぬ、これは吾を憐あはれため

「やぶちゃん注…この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」の章にある、ピストルを持ちて歩けば巡査よびとがめぬ、これは我を憚つため
の表記違いの相同歌である。」

○同人數そうぞめかして練りくるときいてはせみるともらひなりき、

「やぶちゃん注…「そうぞ」はママ。この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」の章にある、

同人數そうぞめかして練り來ると
きゝてはせ見るともらひなりき

の表記違いの相同歌である。にも拘わらず、何故か底本の全集補卷の「短歌」補遺では本文採用している。「覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る聲をきゝ。ところも知らぬ支那の街ゆく」を本文採用せず、これを採るといふのは（恐らく「きいて」と「きゝて」の違いなのであらうが）、私には全く解せない。」

○春ゆうべとある酒屋の店さきに リキユール LIQUORの瓶をめてゝかへりぬ

「やぶちゃん注…「ゆうべ」「めてゝ」はママ。この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」の章にある、

春ゆうべとある酒屋の店さきに

LIQUORの瓶を愛でゝかへりぬ

の相似歌である。「LIQUOR」の文字列にはルビがないから、これは相同歌ではない。これも「リキユール」とは読んでいないと断言出来ない以上、本来なら本文採用されるべき部類の一首である。」

○かなた日はてるてる海の青だくみ疊じょう八疊しける室へやに晝寝ひるいす

「やぶちゃん注…「てるてる」の後半は底本では踊り字「へ」。「じよう」はママ。この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」の章にある、

かなた日はてるてる海の青たゝみ

八疊ひける室に晝睡す^{（や ひるい）}

の表記違いの相同歌である。」

○春の夜の酒は泡だつシヤンパンシユ樂はたのしき戀の旋律^{メロディ}

「やぶちゃん注…この一首は、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」の章にある、

春の夜の酒は泡だつ三鞭酒^{シヤンパンシユ}

樂はたのしき戀のメロディ

の相似歌である。底本は相同歌として本文採用していない。私はこの二首、逆立ちしても相同歌とは思わない。」

○日每われ墮落しゆけば歌さへも、俳諧歌とや人は見るらん、

△以上二十一首ハ本年ノ二月ヨリ五月ニ至ルマデノ詠艸中代表的思想ノ作ノ

ミヲトル五月以後作ナシ、

「やぶちゃん注…以上の二十一首からなる「かゝる日」歌群は明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛書簡より。投函地は前橋。朔太郎、満二十二歳。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。非常に長い書簡の末尾に記されある。後書によって同年二月から五月の詠草の中から『代表的思想ノ作ノミヲトル』とあり、五月以後、この八月までは『以後作ナシ』とわざわざ断っている。

この七月に岡山の第六高等学校第一学年で落第、原級留置になっている（翌年夏に退学）。」

* * *

例により駄作數首近詠舊作うちまぜて御高評をあふぎまつり候、

樂隊のシンバルのする音にきゝぬそのとき君にきゝし一言、

自働車のはせゆくあとを見送りて涙ながしぬ故しらぬなり

「やぶちゃん注…後の「ソライロノハナ」（大正二（一九一三）年・満二十七歳）の歌群「午後」に載る、

自働車の馳せ行くあとを見送りて

涙ながしき故しらぬなり

の類型歌である。」

芝居みて河添かへる夜よるなどはよくよく人の戀しかりけり

「やぶちゃん注…「よくよく」の後半は底本では踊り字「へ」。同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」に載る、

芝居見て河添ひかへる夜などは

よくよく人の戀しかりけり

の表記違いの相同歌である。」

思ひ出は道根堀どうこんぼりの細小路、小間店の花ガスのいろ（大坂の懐く追はこゝにのみ残れり、）

「やぶちゃん注…「道根堀」及びルビ「どうこんぼり」もママ。「小間店」もママで以下の再掲歌から「小間物店」の脱字であることが分かる。「懐く追」は錯字を返り点で訂したものである。同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」に載る、

大坂の夜は美しくし

思ひ出は道頓堀の細小路

小間物店の花瓦斯のいろ

と、短歌自体は標記違いの相同歌といってもよいほどに酷似した一首である。」

野分して亂るゝ艸の色にだに、おぼつかなきは秋にぞありける、

はらはらと木末はなるゝ桐の葉にあわたゞしくも驚どろかれぬる

「やぶちゃん注…底本は「はらはらはら」で、三番目の「はら」を踊り字「へ」とするが、韻律からも誤字であるので、かく訂した。補巻の「短歌」パートでも同様に訂する。」

常盤津のさらへもよほす貸席の、軒提灯の下に別れぬ、（都會の戀は下町に美し）
ときはづ

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」に載る、

常盤津の復習（さらへ）もよほす貸席の

軒提灯の下に別れぬ

と、短歌自体は標記違いの相同歌である。」

教會は家もたぬ子の入るによき、ストーブの火のあたゝかければ（説教は要なし）

歌よまぬ吾が身に秋のなくもがな、涙せきとむすべしなければ

我が肺にナイフたてみん三鞭酒、栓ぬく如き音のするべし、

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「午後」に載る、

我が肺にナイフ立てみん三鞭酒

栓ぬく如き音のするべし

と標記違いの相同歌である。」

酔ひしれて何をか言ひし友らみな、去りぬこのときわれ流涕す、

「やぶちゃん注…後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」に載る、

酔ひしれて何をか言ひし友等みな

去りぬこのとき我れ流涕す

と標記違いの相同歌である。」

酔ひぬれば女の席にうちまぢり下卑たる踊するをよろこぶ

死ねよとやさはせがまずもピストルになゝつの弾はこめあるものを

「われ死なむ」「あゝ死に玉へいつにても」かくいふ故に死なれざりけり、（戀なくして死ぬるは淋し）

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」に載る、

「われ死なむ」「あゝ死にたまへいつにても」

かく言ふ故に死なれざりけり

と標記違いの相同歌である。」

口をあけとぼけ面づらしてある街の二町が程は知らであゆみき、

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」に載る、

口をあけとぼけ面づらしてある町の

二丁が程は知らで歩みき

と標記違いの相同歌である。」

襟白えりき女に見とれある町の電信柱はしりにつきあたりけり

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」に載る、襟しろき女に見とれ四ツ辻の

電信柱に突きあたりけり

の類型歌である。」

ポリスポリスポリス來よなど大聲に酔ひたる我れが街をねり行く

眞砂路まさはちにうちはらばびて煙艸たばこのむ、その楽しさはまたなしまたなし、

「やぶちゃん注…ルビ「まさはち」の「ち」はママ。」

かゝとあげ怒りて物をぐさ^ゝとふむ、それが 墓^{ひきかへる} なりき氣味の惡さ惡さ、

「やぶちゃん注…同じく、後の「ソライロノハナ」の歌群「何處へ行く」に載る、

踵^{かかと} あげ怒りてものをぐさと蹈む

それが墓がへるなりき氣味の惡さ惡さ

と標記違いの相同歌である。」

風の音にたましひ消して驚くを弱き男と笑ひ玉ふな、

火針もてストーブの火はかき亂す、恋のうもれ火おきもみだれず、

「やぶちゃん注…「火針」はママ。底本補卷の「短歌」パートでは「火箸」と『訂』する。」

くどくどと女々しき愚癡をくり返す友の來りぬ早くかくれん

「やぶちゃん注…「愚癡」は底本では「禺癡」。朔太郎の誤用の書き癖。「愚」に訂した。以下は、行空けなしでこの歌であるの次行から続く。」

朔太郎

榮次様

此の頃よみたる歌の中にて深く小生をして感動せしめたるもの有之候 即ち左の一首に
候

△目ざめたる朝^{あした}の窓^{すきま}の隠間^{すきま}より白き雲見ゆうら悲しけれ、「やぶちゃん注…これは朔太郎の短歌ではないので注意された。」

作者は四國の一女性、女學世界の二等賞に候があまりの絶唄に今日まで忘れず候、生の倦怠、生の悲哀はこの一首に詠みつくされたり、想調共に致れりつくせりの妙絶は古今の名歌として推選するにはぐからずと存じ候、明治にもし萬葉集なり古今集の編纂あらば此の作の如き必ず忘るべからざるものに候、心酔のあまり之を兄にも御紹介申しあげ候、

「やぶちゃん注…以上の二十二首からなる歌群は明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原榮次宛書簡より。投函地は前橋。朔太郎、満二十二歳。一九八九年二月刊の筑摩書房版

萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。非常に長い書簡の末尾に記されある。前書と、歌群の後に続く、当時の朔太郎がたまたま読んで感動した『女學雜誌』の四国の一女性の詠んだ一首についての絶賛の評言を合わせて電子化した。短歌群は底本では各首の間に行空けはなく、全体が二字下げとなっている。

「隠間」「絶唄」「致れり」「編算」「招介」の漢字は総てママ。朔太郎の引用する短歌の作者は不詳（『女學世界』のバック・ナンバーを調べれば分かると思うが、そこまでやるほどにはこの一首に私は感動はしない。何方か、興味を持たれた方に探索はお願いしたい）。なお、書簡はこれで終わっており、クレジットなどは入っていない。」

* * *

心臓に七首たてよシヤンパアニユ栓抜くごとき音のしつべし

拳もて石の扉を打つごとき愚^{おろか}もあへて君ゆるにする

「やぶちゃん注…『スバル』第一年第十一号（明治四十二（一九〇九）年十一月発行）の「昴詠草」欄に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十三歳。」

* * *

ばらばらとせまき路次より女どもはしりかかりぬにぐるひまなし 蒼、修、賢

たのしされどやや足らはぬよ譬ふれば序樂をきかぬオペラみるごと 蒼

夕さればそぞろありきす銃機屋のまへに立ちてはピストルをみる 蒼

死なんとて蹈切近く來しときに汽車の煙をみて逃げ出しき 蒼

始めての床に女を抱く如きものめづらしき怖れなるかな 萬、賢

春の夜は芝居の下座のすりがねを叩く男もうらやましかれ 蒼、蕭、萬、晶、賢

祭の日寝あかぬ床に寺寺の鐘きく如きもののたのしさ 晶、萬、蒼、啄

ひるすぎの HOTEL の窓に COCOA のみくづれし崖のあかつちをみる 萬、修、修、賢

「やぶちゃん注」『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十三歳。底本筑摩版全集の編者注によれば、各首の下は選者の略称で、『蒼（大井蒼梧）・修（平出修）・賢（川上賢三）・蕭（茅野蕭々）・萬（平野萬里）・晶（與謝野晶子）・啄（石川啄木）』とある。複数個は秀逸点か。以下、選者歌人のデータを示す。

・大井蒼梧（明治二二（一八七九）年？～昭和一二（一九三七）年）

・平出修（明治一一（一八七八）年～大正三（一九一四）年）…弁護士で小説家・歌人。大逆事件の弁護人として知られる。

・川上賢三…明星以来の同人か。モーパッサン「農夫の妻」の訳などがあるから仏文出身である。

・茅野蕭々（明治一六（一八八三）年～昭和二二（一九四六）年）…ドイツ文学者で歌人。長野県生で本名儀太郎、初号は暮雨。東京帝大卒。明星派新進歌人として注目された。『明星』廃刊後は白秋・啄木らと『スバル』に作品を発表した。三高・慶応大学・日本女子大学教授を勤めた。著作に「ゲョエテ研究」「独逸浪漫主義」、訳書に「リルケ詩抄」など（講談社「日本人名大辞典」に拠る）。

・平野萬里（明治一八（一八八五）年～昭和二二（一九四七）年）は歌人・詩人。埼玉県生。明治三四（一九〇二）年、郁文館中学卒業の年に新詩社入社、翌年九月に一高へ入学、明治三十八年、東京帝大工科大学応用化学科に進んだ。『明星』に短歌・詩・翻訳などを多数発表している。明治四〇（一九〇七）年に歌集「わかき日」を刊行、翌年に大学を卒業後は横浜でサラリーマンとなり、明治四十三年には満鉄中央試験所技師として大連に赴任した。その間、『明星』廃刊を受けた『スバル』創刊に尽力、同誌にも小説・戯曲を発表している。大正の初めには三年ほどドイツに留学して帰国後には農商務省技師となり、昭和一一（一九三八）年に商工省を退官するまで勤めた。大正前期に作歌を一時中断したが、大正一〇（一九二一）年の第二次『明星』創刊の参画から与謝野夫妻の没するまで鉄幹・

晶子と相い伴うように協力同行して作品を発表し続けた（以上は[ウイキの「平野万里」](#)に拠る）。

・與謝野晶子（明治一一（一八七八）年～昭和一七（一九四二）年）…この時、『スバル』発刊（明治四二（一九〇九）年。終刊は大正二（一九一三）年）の翌年で、当時満三十二歳。

・石川啄木（明治一九（一八八六）年～明治四五（一九一二）年）…当時は『東京朝日新聞』校正係をする傍ら、『スバル』創刊発行名義人として尽力した他、前年の初旬に終えた「二葉亭全集」の校正以後、同全集の出版事務全般をも受け持っていた。この年の八月下旬には評論「時代閉塞の現状」を執筆している。当時満二十四歳。」

* * *

民はみなかちどきあげぬ美しき捕虜とりこの馬車のまづ見えしとき

寒き風吹くと思ひぬ故郷の赤城の牧の古榎より

幼き日パン買ひに行きし店先の額のイエスをいまも忘れず

二月や笛の稽古に通ひたる故郷の町の橋のうす雪

「やぶちゃん注…『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十三歳。第一首はキリストの捕縛後の情景か。「馬車」というのが私には解せないのであるが。」

* * *

清元の神田祭のメロデイに似たる戀しぬたちばなの花

行く春の淡き悲しみいそつぷの蛙のはらの破れたる音

忘れず活動寫眞の幕切れにパリの大路を横ぎりしひと

しかれども悲劇の中の道化役の一人として我は生くべき

わが妹初戀すとは面白しオーケストラの若き笛ふき

日まはりの雄々しき花も此の國の人はかなしく捨てたまふ哉

「やぶちゃん注」『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十三歳。『創作』は同年三月に若山牧水（当時満二十五歳）が編集者として創刊した文芸総合雑誌で、当時、全文壇の注目を集めたが、版元との意見が合わず翌年九月に廃刊となった。」

* * *

欄に寄り酒をふくめば盃の底にも秋の愁ただよふ

赤城山鹿の子まだらに雪ふれば故郷びとも門松を立つ

町内の屋臺を引きし赤だすき十四の夏が戀の幕あき

「やぶちゃん注」『スバル』第三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された（「咲二」の誤りで校正漏れか誤植）。朔太郎満二十四歳。

二首目はこの年の医師で従兄萩原榮次宛年賀状に初出する。以下に示す（筑摩版全集書簡番号一二。消印一月五日前橋。「大坂府河内郡三木本村字南木本 萩原榮次様」宛。）。

*

昨年中の御無沙汰平に御海容被下度願上候

まへばしニテ

朔太郎

賀正

赤城山かのこまだらに雪ふれば 故郷びとも門松を立つ、

*

なお編者注には、夕暮れの山村風景を描いた版画の絵葉書で「松川」の印がある、とある。
無沙汰の挨拶は表書きの下、後半の年賀と短歌はその版画の余白に記されてある。」

* * *

薄暗き酒場の隅に在るひとが我に教へし道ならぬ道

砂山の枯草の上を我が行けば蟲力なく足下に飛ぶ

悲しみて二月の海に來て見れば浪うち際を犬の歩ける

かのベンチ海を見て居りかのベンチ日毎悲しき人待ちて居り

縁端に疲れし顔の煙草吸ふ教師の家の庭のこすもす

「やぶちゃん注…『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）の「歌」欄
「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十四歳。当時の朔太郎は前年の
初夏に岡山の六高を退学後、実家と東京を行き来して放浪、二月には比留間賢八の「マン
ドリン好楽会」に入門するなどしていた彷徨期であった。二首目の海は大磯海岸と考えて
よい。底本筑摩版全集の年譜（伊藤信吉・佐藤房儀編）の明治四四年の二月項に、『同月8
日 何となく東京を逃げだしたい氣持に驅られ、新橋ステーションから汽車に乗り大磯に
行き、海を見る』とある。」

* * *

罪人のように、私は都を逃れてこゝの海に漂泊して來ました、怪しきまでに痛々しい紳
經の刺激は私に海へ行けと命じました、

はてしもない青海原と、夢みるような海潮の響は、どんなに、此の頃の暗愁に閉された心をはればれた愉樂の世界へ導いて呉れる事かと、胸を轟かしながら初夏の大磯をたづねました、

あゝ然しそこには只深い沈黙と苦痛の憂色が漂ふて居るばかりでした、

去年の冬、失張同じ思で此處へ逃れて來たときに、不幸にも私が見出した絶望の海は、今日もまた私の前に横つて居るばかりでした、

△浮ね鳥、かなしむ我はこゝに來て海をし見れば涙ながるゝ

數年まへ、私は何事をも知らない幸福の日を無邪氣の少女たちと一所に、こゝの二階に送つた事がありました

△きのふまで少女の群と出窓に歌をうたひし我ならなくに

思ひ出の日は何時も發しげに笑み輝き、現實は黒き死の苦痛の影に私をおびやかします、△わだの原、沖つ潮あひに鳴く鳥のうら淋しげに物をこそ思へ

きのふの夕べ、人氣なき濱邊に出て、心ゆくばかり泣きあかしました、さめざめと稚子のように……

こゝに來て三日、歌も日記もたゞ涙のそればかり、

さらば、

二十二日、

「やぶちゃん注…以上の三首の短歌を含む書簡は明治四五（一九一二）年六月二十二日消印萩原榮次宛の葉書である。一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補巻の「短歌」パートにある『書簡より』から。投函地は大磯。発信署名の部分は、編者注によればはっきりとは読み取り難い（ローマ字部分）としながらも、

大磯ノ海ニテ Kana-iwa Ni-te

とあるとデータに載る。また編者注には、この書簡には付箋がついているとし、そこには、『石川縣加賀江郡山中温泉大嶋屋別荘ニテ 萩原榮次 當時右之地ニ居住候ニ付御轉送願候』とある由。

朔太郎、満二十五歳。この翌年、大正二（一九一三）年四月のクレジットを持つ私製歌集「ソライロノハナ」の、あの大磯である。

「Kana-iwa」というのはピンとこないが、因みに、現在の大磯海水浴場のシンボルとして、浜から十メートルほど沖合いに浮かぶ岩礁（周回凡そ二十メートル）があり、これを「かぶと岩」と読んでいる。これか？

「ソライロノハナ」へと続く雰囲気を行先させる貴重な書簡であるので、全文を電子化する。踊り字は正字化した。「神経」はママ。二ヶ所の「ように」及び「ような」もママ。

この三首の内、

きのふまで少女の群と出窓に歌をうたひし我バルコンならなくに

は「ソライロノハナ」のまさに「二月の海」（クレジット『一九一一、二』の冒頭の「大磯ノ海」の中で、中間部で以下の文に続いて示される四首の冒頭の一首と、表記違いの相同歌である。

*

五年まへの夏、希望に輝やく瞳を以て此處の松林の中から大洋の壯嚴を祝した紅顔の少年は頰唐の骸骨となつて長い漂泊の旅から歸つて來た。今見る海の色にもまして青ざめたるその顔色よ。

きのふまで少女の群とバルコンに

歌をうたひし我ならなくに

*

以下は略した。後掲する当該歌を参照されたい。」

「やぶちゃん注…以下、底本の「萩原朔太郎全集」第十五卷所収の「ソライロノハナ」の短歌を拾い出した。

これは昭和五二（一九七七）年に萩原家が発見入手したもので、それまで知られていな

かった自筆本自選歌集である。死後四十年、製作時に遡れば実に六十余年を経ての驚天動地の新発見であった。冒頭に「[自叙傳](#)」という半生記風のもの、それに続く、「二月の海」(「[大磯ノ海](#)」・「[平塚ノ海](#)」から成る)という歌物語風の悲話が語られ、以下に「若きウエルテルの煩ひ」「午後」「何處へ行く」「うすら目」という四篇の歌群が続いている。

「自叙傳」のクレジットは『一九一三、四』で一九一三年は大正二年で同年四月時点で朔太郎は満二十七歳であった。一応、このクレジットに従い、「ソライロノハナ」所収の短歌を総てここに配することにした(実際にはこの後の短歌の幾つかは、これらの間に入るものと考えてよいものと考えてよいものもあることは言を俟たないが、それはアカデミズムのやることであって私の仕儀の範疇ではないと述べておく)。

なお、私は既に「[ソライロノハナ](#)」全篇を、[オリジナル注釈付きで、縦書PDF版として公開している](#)ので是非、参照されたい。以下の注も基本的に「ソラロノハナ」のそれと同じである。

「自叙傳」には短歌は含まれないので、「二月の海」から短歌のみを引く。但し、これらの短歌群は物語本文との有機的結合の著しいものであるので、「[ソライロノハナ](#)」で物語とともに詠まれることを強くお勧めするものである。

まず、「二月の海」の「大磯の海」から。」

大磯よ汽車にのりたくなりたれば
海が戀しくなりたればきぬ

氷りたる二月の海の潮鳴を
泣きて聽かんと來しにあらねど

怖れつつ都をのがれ海に來て
潮鳴る音に心悲しむ

死ぬること思ふ哀しさ生くること
思ふさびしさ海に來て泣く

海の音きゝつゝ砂に寝ころびて
空を見て居れば泣きたくなりぬ

砂山にまろびて我が思ふこと
知れば驅も哀しみて鳴く

砂原の枯れ艸の上をわが行けば
虫力なく足もとに飛ぶ

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発
行）の「歌」欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一
首、砂山の枯草の上を我が行けば蟲力なく足下に飛ぶ
類型歌である。」

小磯なるかの砂山に忘れしは
草も蒔るべきつめたき涙

如何ならん小磯が濱の筆くさは
根を絶えぐさと思はざりしを

きのふまで少女の群とバルコンに
歌をうたひし我ならなくに

「やぶちゃん注…この一首は、本「ソライロノハナ」製作の前年である明治四五（一九一
二）年六月二十二日消印萩原栄次宛の葉書に出現する一首（書簡ごと総て前掲済）、
きのふまで少女の群と出窓バルコンに歌をうたひし我ならなくに
と表記違いの相同歌である。」

五とせのむかし女を戀したりき
その頃のことすべて美しくし

海ちかき濤龍館のおほばしまに
立つは月の出待つに似たれど

不孝なる繼子ましろこの如く世を怖れ
かつは怨みて仇をたくらむ

かの少女唄をうたへば悲しめる
我も冷えたる盃をあぐ

うれひつゝある少年と知るよしも
なければ彼はいそしみて弾く

少年の心をそゝる仇言も
たゞに悲しみ空耳にきく

美しき言葉すくなの少年よ
かく言ひかれは嫺めなまきてきぬ

海に來て泣きてかへらん我ぞとは
いかで知るらん昨夜の少女は

美しき海の少女と寢し故に
潮の香あびしにほひこそすれ

そのかみの虎が涙も悲しめる
この少年を濡すよしなし

「やぶちゃん注…続いて、「平塚の海」から同じく短歌のみを引く。」

病院の裏門を出て海岸へ
つゞける路のコスモスの花

平塚の佐々木病院のバルコンに
海を眺めてありし女よ

月光に魚の鱗のひかるとき
窓にもたれて泣く人を見き

悲しみて二月の海に來て見れば
浪うち際を犬の歩るける

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）の「歌」欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一、

悲しみて二月の海に來て見れば浪うち際を犬の歩ける
の標記違いの相同歌である。」

かくばかり悲しき海にたゞ一つ
颯のとぶは耐えがたきかな

人もなき砂山の上に置かれたる
ベンチは如何にさびしからずや

幾人の肺病患者が來て息みけん
平塚の濱のあはれベンチよ

かのベンチ海を見て居りかのベンチ
日毎悲しき人を待ち居り

「やぶちゃん注：この一首も先の注と同じ、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）の「歌」欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一、かのベンチ海を見て居りかのベンチ日毎悲しき人待ちて居りの標記違いの相同歌である。」

砂山にうちはら這ひて煙草のむ
かつはさびしく海を書きく

何となく泣きたくなりて海へきて
また悲しみて海をのがるゝ

「やぶちゃん注：以下、続く歌群「若きウエルテルの煩ひ」の章から順次短歌を掲げてゆく。」

柴の戸に君を訪ひたるその夜より
戀しくなりぬ北斗七星

春こゝにこゝに暫しの花の酔に
まどろむ蝶の夢あやぶみぬ

ゑにし細う冷たき砂にたゞ泣きぬ
戀としもなき濱のおぼろ月

「やぶちゃん注：「ゑにし」はママ。」

朝ざむを桃により來しそぞろ路
そぞろ逢ふひとみな美しき

「やぶちゃん注…この一首は萩原朔太郎満十六歳の時、『坂東太郎』第三十四号（明治三五（一九〇二）年十二月発行）に掲載された、最初期の短歌五首連作「ひと夜えにし」の三首目、

あけぼの花により來しそぞろ道そぞろあふ人皆うつくしき

の類型歌である。」

忍ひつゝ人と添ひ來し傘の一里
香は連翹の黄と迷ふ雨

「やぶちゃん注…「忍ひつゝ」はママ。下句は「ソライロノハナ」原本では「香は連翹の黄と迷ふ雨」となっているが、これでは如何にも意味も通らず、韻律も悪い。やや躊躇は感じるが底本の誤字を支持し、ここは校訂本文の「迷ふ」を採った。」

繪日傘は桃につゞきて清水院の
御堂十二に晝の鐘なる

「やぶちゃん注…「清水院の御堂十二」不詳。識者の御教授を乞う。」

我れ寧ろ煩（もだ）へに悶へ戀に戀ひて
野邊に我が世を笛吹かん願ひ

「やぶちゃん注…「煩へ」「悶へ」は孰れもママ。」

君に逢はず山百合つみて歸りくる
小出松原なくほととぎす

「やぶちゃん注…『小出松原』『純情小曲集』（大正一四（一九二五）年八月新潮社刊）の「郷土望景詩」の私の偏愛する一篇「小出新道」の自註「郷土望景詩の後に」に「小出松林」で出る。」「[一群の鳥（歌）](#)」萩原朔太郎 短歌十三首 附習作二十首 大正二（一九一三）年八月」の私の注を参照されたい。」

紅棹に山吹流す小歌舟
君が醉歌に眠る春の川

小雨黄に垣木蓮に低うして
忍ぶに人の口疾くちどなる夜や

「やぶちゃん注…『垣木蓮』は原本では「垣木蓮」。少し迷ったが全集校訂本文を採った。「口疾」は形容詞ク活用の「口疾くちどし」で、返事や返歌の受け答えがす早いこと、または、もの言うさまが軽率だという謂いである。後者の意であらう。」

いさゝかは我と興ぜし歌も見き
いま寂寞にたえぬ野の路

「やぶちゃん注…『たえぬ』はママ。萩原朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の第四首、

いささかは我れと興ぜし花も見き今寂寞にたえぬ野の道
と分かち書きを除けば相同歌である。」

何とてかの人の臆病なる
よれば戸に夢たゆたげの香ひあり
泣きたる人の宵にありきや

「やぶちゃん注…同じく『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）

に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の第二首、

よれば戸に夢たゆげたげの香ひあり泣きたる人の宵にありきや
と分かち書きを除けば相同歌である。」

旅にいつる日

母や指をあしたかむなの百合の薰り
今宵枕の月にえたえぬ

「やぶちゃん注…「たえぬ」はママ。上句は、母が旅に出るその日に、「お前の癖の、朝の寝起きに指を舐むのはいけないよ」と言ってくれた、その百合のような母の薰り、若しくはそれが現にある旅宿の百合の実際の薰りに導かれたという表現だろうか。識者の御教授を乞うものである。」

艶の名をたれや負はせし桃緋桃
ゆうべこの子に情もたぬ雨

「やぶちゃん注…「ゆうべ」はママ。「桃緋桃」は原本では「桃※桃」（「※」＝「糸」＋「兆」）。校訂本文を採った。」

雨細う情に春ゆく伏見途
京へ三里の傘おもからぬ

罪許せ臙脂梅花の薬あんにしふかき
別れなればの一夜の枕

「やぶちゃん注…読みの「ゑんじ」「ゑにし」はママ。」

君にとて投げたる謎のとけもやらで
この春くれぬ悲しからずや

従兄、姉どちと京都に

あそびて

はらからが朝院參西の院

比叡ひえやゝ寒き梅に參うでびと

「やぶちゃん注…原本は「參まううでびと」であるが、底本全集校訂本文と同じく衍字と判断しつつも、校訂本文のように「參まうでびと」という『補正』を行わず、本文原型を壊さないように「まう」のルビを示さずに「う」を残した形とした。」

野よりいま生まれける魂たまおきな幼くて

一人しなれば神もあはれめ

「やぶちゃん注…「幼くて」の「幼」は原本では「※」＝「糸」＋「刀」であるが、以下の公開作から誤字と断じて校訂本文と同じく「幼」の字を採った。「おさな」のルビはママ。朔太郎満十六歳の時の、『明星』卯年第八号・明治三六（一九〇三）年八月号の「無花果」欄に「萩原美棹」の名義で掲載された五首の巻頭歌、

野より今うまれける魂をさなくて一人しなれば神もあはれめ

と表記違いの相同歌である。」

天地に水ひと流れ舟にして

君とありきとおぼへしや夢

「やぶちゃん注…「おぼへ」はママ。この一首は、朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の五首目、

天地に水ひと流れ舟にして我もありきと忘るべしや夢
の類型歌である。」

菫つむと何時しか岡の三里こえて

迷ひ出でぬる桃多き里

「やぶちゃん注…原本では「迷ひ」は「述ひ」。先行例（本「歌群」若きウエルテルの煩ひ」五首目）及び全集校訂本文に従い、訂した。」

名なし小草はかな小草の霜柱

春の名残と踏まむ二人か

「やぶちゃん注…朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の掉尾、
名なし小草はかな小草の霜ばしら春の名残とふまむ人か
の類型歌である。」

み歌さらになつかしみつゝ慕ひつゝ

忘れかねては行く萩が原

「やぶちゃん注…朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の第六首目、
み歌さらになつかしみしたひつゝ忘れかねては行く萩が原
の類型歌である。」

花におちて花に歌えし身は胡蝶

戀のもだえに狂ひぬ倦みぬ

「やぶちゃん注…原本は、

花におちて花に歌えし身は胡蝶

戀のもたひに狂ひぬ倦みぬ

全集校訂本文は、

花におちて花に歌へし身は胡蝶
戀のもだえに狂ひぬ倦みぬ

である。「もたひ」の部分のみ、意味が通らぬので校訂本文を採った。」

美しう君よそほへて船にのせて
港いづべき戀もあらぢか

「やぶちゃん注」：「よそほへて」「あらぢか」は孰れもママ。底本の注には校訂本文でも「よそほへて」を維持し乍ら（他では歴史的仮名遣や誤字に対して鮮やかに文句なし注なしの確信犯の『補正』を英断しているにも拘わらず）、『「よそほへて」は「よそはせて」の意の誤用と思われる』という注を附すに留めている。」

くちなはの瞳おかしや世にはぢて
狐の如く野に迷ふわれ

「やぶちゃん注」：「おかしや」はママ。原本では「迷ふ」は「述ふ」であるが、先行する誤字と校訂本文から訂した。」

かくて尚千代もあるべし世は小さう
君が胸にといたつけ白鳩

「やぶちゃん注」：「いたつけ」は他動詞タ行下二段活用 of 古語「射立^{いた}つ」を「射立つく」という力行四段活用に誤って変化させた、その命令形か。——射た矢が突き立つように君の胸へと飛び込んでゆけ、白鳩よ——大方の御批判を俟つ。」

くらやみに動くものあり日は知らで
いたちむぐらの眞洞に似る世

年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首連作の掉尾、

くらやみに動くものあり。日はしらで、いたち、もぐらのよべる如く。

の類型歌であるが、下句のイメージは聴覚的な唸り声から視覚的なブラック・ホールの冥界へと変じて全く異なっている。「呻^に吟^よべる」という分かり難い古語とイメージの衝突の分かり難さは解消されたものの、「世」という上位構造の比喻が明らかにされてしまい、分かりが良過ぎる優等生短歌になってしまった感がある。句読点を配した独特のリズム感覚からも先行（と考えてよい）句形を私は支持する。」

別れても人待つほどはかへり来よ

岩にせかるゝ瀧川ならぬ

なべて世は美しくなべてけがらはし

解^げしえぬものと死は迫るかな

「やぶちゃん注…「美しく」はママ。」

時事を憤りて

ますらをはたゝず小麦は穂に笑めど

哥^コ薩^{サク}克^クかへらず秋やゝたけぬ

「やぶちゃん注…「穂」は原本では「※」（＝「禾」＋「耨」）であるが、文脈から訂した。校訂本文も「穂」とする。「哥^コ薩^{サク}克^ク」は、かつてウクライナと南ロシアなどに生活していた軍事的共同体であったコサック（Kosak）。本「ソライロノハナ」の製作は大正二（一九一三）年四月頃で、この歌自体の「時事を憤りて」とは、ロシア帝国の革命派に対する容赦ない弾圧やロシア帝国の第一次世界大戦参戦（一九一四年）への軍靴の音を指すものか。なお、コサック軍は同大戦ではロシア騎兵団の中心を成した。後のことながら、しかしこの後の一九一七（大正六年）年のロシア革命が勃発するとウクライナ・ドン・クバーニに於いてコサック三国は独立を宣言、三国はロシア白軍及びシベリアのコサック諸軍とともにロシア共産党及び赤軍に抵抗したが敗北、一九一八年から一九二〇年にかけてコサッ

ク階級は排除されてコサック諸軍も廃軍となった。なおこの後、裕福なコサックの一部は欧米諸国へ逃亡したが、残されたコサックは共産党による弾圧の対象となり、ソヴィエト政権はコサックの大部分とそれらの家族全員を死刑や流刑に処し、ホロドモール (Holodomor) : 一九三二年から一九三三年にかけてソビエト連邦ウクライナ社会主義ソビエト共和国・カザフスタン共和国・現ロシア連邦のクバーニ・ヴォルガ川沿岸地域・南ウラル・北シベリアなどのウクライナ人が住んでいた各地域で起こされた人工的な大飢饉。ウクライナ人たちは強制移住によって家畜や農地を奪われて、このジェノサイドによって四百万から千四百五十万人が死亡したとされる。これの大飢饉は現在、ウクライナ議会によってスターリンによる計画的な飢餓と認定されている) によって餓死させられた。このため、第二次世界大戦においてはコサック残党はドイツ軍に味方してソ連軍と戦ったが、ドイツの敗北とともにコサックは共同体としての姿を消した (ここは主にウィキの「コサック」及び「ホロドモール」に拠った)。これ以前のコサック関連の情報を私は不勉強にしてよく知らない。ここで朔太郎が憤ったコサックに関わる時事とは何だったのか？ 今一つ分からぬ。識者の御教授を乞うものである。」

淋しけれど人は怨まじ嘆くまじ
己が世なれば瘠せもしてまし

「やぶちゃん注…本首も同じく朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四巻第六号・明治三十六(一九〇三)年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首連作の六首目、淋しけれど人は恨まじなげくまじ。おのが世なればやせもしてまし。と表記違いの相同歌である。」

白百合の君と別れし夜
よめる

み別れに奉る夜のましろ百合
君を一人の姉とも知れな

君は去りぬ残るはわれと小さき世の
月も月かは花は花かは

「やぶちゃん注…朔太郎満十六歳の時、『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の三首目、君は去りぬ残るは吾と小さき世の月も月かは花は花かと分かち書きを除けば相同歌である。」

その舟よ我等が棹にとづめあへず
ついに空しく流れて去りにき

「やぶちゃん注…「ついに」はママ。」

大御代はこゝに美し春は戀に
かたちどられて咲く櫻花

足んぬ智はあへて願う歌の幸
來ん世思はずいらす桂も

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の『文庫』第二十五卷第六号（明治三七（一九〇四）年四月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された九首の六首目、足んぬ智は、敢えてしねがふ歌の幸。來む世思はず、欲らず桂も。の類型歌である。」

才た^{ざえ}らで御國はぐゝむ歌もなし
身は弱うしてよる胸もなし

「やぶちゃん注…朔太郎満十六歳の時の、『明星』卯年第十一号・明治三六（一九〇三）年十一月号の「紗燈涼語」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された三首の第二首目、かよわくて御國^{みくに}はぐくむ歌もなし身は孤獨^{ひとり}にてようる胸もなしの類型歌である。」

この戀よ亂れて末は知らなくに
おどろにまとう紅づたのごと

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の十一首目、

この戀よ、亂れて末は知らなくに、おどろにまとう紅づたのごと。
の表記違いの相同歌である。」

草に伏して美しひとは泣きもやまず
別れもあへず野は暮れせまる

「やぶちゃん注…前歌と同じく、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の十一首目、

草に伏して美し人は泣きもやまず、別れもあへず、野はくれせまる。
の表記違いの相同歌である。」

その香ゆへにその花ゆへに人は老を
泣きぬ泣かれぬ濃きべにつばき

「やぶちゃん注…二箇所「ゆへ」はママ。朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の第二首目、

その香ゆゑにその花ゆゑに、人は老を、泣きぬ泣かれぬ、こき紅椿^{べに}。
の表記違いの相同歌である。」

瑠璃鳥^{るりとり}の鳴けば朝雲さむうして
人とすなほに別れける哉

「やぶちゃん注…原本は「瑠璃鳥」を「瑠理鳥」とするが誤字と断じて訂した。底本校訂本文も「瑠璃鳥」とする。こちらは、朔太郎満十七歳の時の、『明星』卯年第十二号・明治

三六（一九〇三）年十二月の「金鶏」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された四首の第二首目、

ひよ鳥の啼くや朝雲寒うして人とすなほに別れけるかな
の類型歌である。」

抱きては交互^{かたみ}に泣きし日もありき
世にそむきしも何日の二人ぞ

野に見るは泣くによろしき秋の雨
こし路戀路の思ひ出ぐさよ

相似^{あひ}たる人か木精^{こだま}かひそみきて
呼べは應ふる日なるに似たり

「やぶちゃん注…呼べは」はママ。前と同じ『明星』卯年第十二号・明治三六（一九〇三）年十二月の「金鶏」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された四首の内の巻頭の、相似^{あひ}たる人か木精^{こだま}かひそみきて呼べは應^{こた}ふる日なるが如しの類型歌である。」

たゞきくは人の泣く聲むせぶ聲
陰魔地を這ふこがらしの風

手をあげて招けば肥えし野の牛も
來りぬ寄りぬ何を語らむ

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の、『明星』辰年第六号（明治三七（一九〇四）年六月発行）の「鳴潮」欄に「萩原美棹」の名義で掲載された六首の第五首目、手をあげて招けば肥えし野の牛も來りぬよりぬ何を語らむの表記違いの相同歌である。」

おとなしう涙ぬぐひてあればとて
十九の春はくれであらめや

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の、『坂東太郎』第三十九号（明治三七（一九〇四）年七月発行）に掲載された「夏衣」八首の四首目、
音なしう涙おさへてあればとて春の光はくれであらめや。
の類型歌であるが、本歌の方がいい。」

振り袖の桔梗の花の色のよき
なづかしひとゝ涙もよほす

「やぶちゃん注…ちよつと迷ったが「なづかし」はママとした。朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ろべりや」七首連作の三首目に、
振り袖の桔梗の花の色いろのよきなづかし人びとと涙もよほす
とはある。」

夏ばなの趣ある小家の人なれば
面影に似し戀もする哉

「やぶちゃん注…ちよつと迷ったが「なづかし」はママとした。同じく朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ろべりや」七首連作の三首目に、
夏花なつばなに趣しゆある小家こいへの人なれば面影おもかげに似し戀もする哉
の類型歌である。」

鬼どもが笑ふ聲にて戦争たゝかひは
終りぬ勝ちぬ民よ悦べ

からくりに見たる地獄の叫喚が
待ち居るものと思ふ可笑しさ

「やぶちゃん注…「地獄」の「獄」は原本では「獄」の上に（くさかんむり）が附く字。朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された（前に注した「ろべりや」連作の後の歌群）にある、

からくりに見たる地獄の叫喚が待ち居るものと思ふ可笑しさ
の表記違いの相同歌である。」

願はくば我なるものを五人に
いったり
とたり
十人になして笑ひ代さむ

「やぶちゃん注…校訂本文は「代さむ」を「交さむ」と訂する。」

たゞ一人座すれば淋し天地が
われのくびきにかゝる苦しみ

よろこびは千夜に一夜

たまたまの逢瀬を何なれば更かし給はぬ

あはたゞしの別れ、せちなの君かな

あはたゞし燃ゆる燄の火ぐるまを

忘れて去にしつらき君かな

「やぶちゃん注…前書の「たまたま」の後半は原本では踊り字「へ」、「あはたゞし」はママ、本文の「あはたゞし」もママ。「燃ゆる」は原本は「焼ゆる」であるが、誤字と断じて校訂本文を採った。朔太郎満十八歳の時の、『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された五首の巻頭の、

あはたゞし燃ゆる災の火車を忘れていにしつらき君かな

（「災」はママ。誤植と思われる）があるが、前書はない。」

君まつと一日は樂し君を戀ふと

千夜は果敢なき夢みてしがな

綾唄やあるひは牛の遠鳴や^{とほなき}

君まつ秋の野は更けにけり

「やぶちゃん注…「あるひは」はママ。この歌は朔太郎満十八歳の時の、『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された、

綾唄やあるひは牛の遠鳴や、君まつ秋の野の更けにけり

及び、朔太郎満十九歳の時、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で載せた、

綾唄や或は牛の遠鳴きや君待つ秋の野は更けにけり^{とほなき ま あき}

（一部の脱字を補正した。詳しくは当該先行作を見よ）の表記違いの相同歌である。」

風ふきぬ木の實地をうつ秋の夜は

待たるゝ君がさびしさ思へ

「やぶちゃん注…この歌は前と同じく『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された、

風ふきぬ木の葉地をうつ秋の夜はまたるゝ君かさびしさ思へ

の類型句（「木の葉」と「木の實」で有意に異なる）である。なお、底本全集の編者注にはもう一首を参照に掲げているのであるが、指示された頁には相同・相似歌は見当たらない。

この注は前の注と全く同じなので、校正か植字のミスと思われる。」

み手とりて涙そゝがん日もあらば

歌は桂の根にしづむべし

たゞ願ふ君がかたへにある日をば

夢のやうなるその千とせをば

「やぶちゃん注…この歌は前と同じく『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された、
たゞ願ふ君の傍へにある日をば夢のようなるその千年をば
の表記違いの相同歌である。」

われ君を戀す戀しき心より
君を思へば胸たゞ火なり

「やぶちゃん注…この歌も、同じく『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された、
われ君を戀はん戀しき心より君を思へば胸ただ火なり
の表記違いの相同歌である。」

わが脣と君がみ脣とひたすらに
ふれよいつまで泣いてあるべき

「やぶちゃん注…原本は「ひとすらに」であるが、意味が通らないので、校訂本文「ひたすらに」を採る。」

夜は夜にて晝は晝にて戀はであらば
エトナの山は燃えであるべし

「やぶちゃん注…原本は「焼えであるべし」であるが、意味が通らないので、校訂本文「燃えであるべし」を採る。太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された

夜は夜にて晝は晝にて戀いてあらばエトナの山はもえであるべし
の類型歌である。「戀いて」はママ。そこでの注したが再度注しておく、「エトナ」はイタリア南部シチリア島の東部にあるヨーロッパ最大の活火山エトナ山（Etna）。ギリシャ神話ではガイアの息子で不死の怪物の王ティフォンが封じられているとされ、また鍛冶神へ

パისტスはこの山精であるエトナを愛人とし、その情熱的な生涯の最後の仕事場としてこの山を選んだとも伝えられる。ただ、私が馬鹿なのかこの歌の意味は今一つ、よく汲み取れない。自分の恋情の炎が日夜絶えず激しければ、永遠の火を噴くはずのエトナ山でさえも、その私の情熱故に燃え尽きてしまうであろう、とでもいうのであろうか？ どうも短歌の苦手な私には分からぬ。識者の御教授を乞うものである。」

君が心、今は戀しきに狂はんとす

あゝ如何に君が戀しきなつかしき
たとへんやうもなき戀ひかな

「やぶちゃん注…原本は「なづかしき」であるが、校訂本文「なつかしき」を採った。」

あゝ二人戀しるものと見代はして
笑めばあまねく春はたらひぬ

「やぶちゃん注…「見代はして」は校訂本文では「見交はして」と訂する。「たらひぬ」は自動詞ハ行四段活用「たらふ」(十分である・不足がない／その表象に堪える・資格を持つ)の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形。

記号が配されて、ここで一つの歌群が終了している。但し、この歌群には次の「ゆふすずみ」のような総題はない。構造から見ると、ここは総題であるところの「若きウエルテルの煩い」の中の同じ「若きウエルテルの煩い」パートであると採れる。」

ゆうすゞみ

「やぶちゃん注…「ゆう」はママ。」

花やかにかんてらともす露田を
ふたり出づれば月のぼりけり

「やぶちゃん注…朔太郎満十八歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の七首目、

花やかに、かんでら燭ともすえん日を、二人いづれば月のぼりけり。
と表記違いの相同歌である。」

微風そよのうたがたりふく途みちすがら
四の袂そでに螢おさへぬ

「やぶちゃん注…前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の四首目、

微風そよかぜの歌語うたかたり吹く途みちすがら四の袖そでに螢ほたるおさへぬ
の類型歌である。」

夕づきや橋のたもとに衣しろき
人と別れぬ山百合のはな

「やぶちゃん注…朔太郎満十八歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の十一首目、

夕月や橋の袂に衣白き、人と別れぬ山百合のはな。
と類型歌である。「たもと」と「袂」は大きな相違で、実は「袂」は誤りかと疑われる。」

夕月夜潮なる音にあこがれて
君くる路を浪に畫きぬ

櫻貝ふたつ重ねて海の趣味
いづれ深しと笑み問はれけり

「やぶちゃん注…同じく、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の掉尾、

さくら貝、ふたつ重ねて海の趣味、いづれ深しと笑み問はれけり。

と表記違いの相同歌で、初出掲載で注した通り、彼はこの歌が好みだったらしく、その三年後の第六高等学校『交友会誌』明治四一（一九〇八）年十二月号に「水市覺有秋」という標題で掲載された連作中でも、

櫻貝二つ並べて海の趣味いづれ深しと笑み問はれけり

と改作している（この改作は先行作より遙かに劣ると私は思う。）」

海近き河邊に添ひし柳みち

月は二人の肩をすべりぬ

里河^{さと}の底にうつれる星くづを

いくつかぞへて君に逢うふべき

「やぶちゃん注…朔太郎満十九歳の時の、『晩聲』創刊号（明治三九（一九〇六）年四月発行）に「美佐雄」の筆名で所収された六首の掉尾、

里川の底にうつれる星くづをいくつ數へて人にあふべき

の表記違いの相同歌である。」

春の水山吹のせて流れずや

君が家居と指さす方へ

女みなつどひてこゝに庵^{いほり}せよ

美男ぞ多き行く春のくに

御染さまあれ久^{ひさ}さまとよりそひて

二人ゆく手に闇のあやなき

（踊りさらへの日即興）

「やぶちゃん注…朔太郎満二十歳の時の、『無花果』（明治三九（一九〇六）年十一月発行）に「美棹」の筆名で掲載された一首、

お染さまあれ久さまとより添ひてふたりゆく手に闇のあやなき
の表記違い相同歌である。」

たゞ一人至る仁にいます母上の
おん世悲しく死はなづきえぬ

雨の日や庫裏に膝くみ物いはず
叩けど飽かぬ古木魚かな

大聲こゑに柩をあけて呼び出でん
我やとこしへ死なじ老ひじと

「やぶちゃん注…「老ひじと」はママ。」

夏の日や日蔭もとむる唐獅子の
渴きせまると胸やく心地

「やぶちゃん注…記号が配されて歌群が終了している。」

はなあやめ

共ずみの好み君にして
六月植えぬろべりやの花

「やぶちゃん注…「植え」はママ。「ろべりや」は再注すると、キキヨウ目キキヨウ科ミゾ

カクシ（溝隠）属 *Lobelia* のロベリア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）及びその園芸品種をいう。南アフリカ原産の秋播きの一年草で、高さ二十センチメートルほどでマウンド状に広がる。四月から七月頃に青紫色の美しい花を咲かせ、花色は赤紫色やピンク・白色などがある。（weblio 辞書の「植物図鑑」にある「[ロベリア・エリヌス（瑠璃蝶草）](#)」に拠った。画像は[グーグル画像検索「Lobelia erinus」](#)も参照されたい）。

朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で掲載された七首連作の巻頭歌、

共住の好この少せうなき君にして六月植うゑぬるべりやの花
の表記違いの相同歌である。」

かきつばたいと美しき人妻は
朝靄いでゝ人思ふさま

春の夜やとある小路におどろきぬ
巨人のやうに見えし水甕みがめに

「やぶちゃん注…前の一首と同じ雑誌に「ろべりや」歌群の後に載る八首連作の第六首目の、

春はるの夜やとある小路こじに驚おどろきぬ巨人きよじんのように見えし水甕みがめに
の表記違いの相同歌である。」

夏祭すこしはなれて粧ひし
君と扇の風かはしけり

ほとゝぎす女に友の多くして
その音づれのたそがれの頃

「やぶちゃん注…朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の中
の一首、

ほととぎす女をんなに友ともの多くしてその音づれおとのたそがれの頃の表記違いの相同歌である。」

ほととぎす卯の花垣にしば鳴くを
枕はづして聴きたまふさま

「やぶちゃん注…原本は「垣」を「桓」とするが、誤字と断じて校訂本文の「垣」を採った。」

夏の風はにほひて吹きぬ街の子が
夕涼みする團扇つかひに

見かはせば何の奇もなく友はあり
あひ別れては胸やぶるまで

「やぶちゃん注…朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の一首、

見代みかはせば何なんの奇きもなく友ともはあり相別れては胸むねやぶるまで
表記違いの相同歌である。」

君を戀ふ眞玉白玉そが中の
ひとつ瓦とはぢらふわれは

ひとゝせにひとゝき逢ひてひと日をば
千日まつと悲しきたより

水の音蛙の唄につゝまれて
かゝる夕べをもの言ひしひと

千石の水あぶ心地ひぐらしの
一時に鳴きぬ木陰路入れば

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十二歳の時の、第六高等学校『交友会誌』明治四一（一九〇八）年十二月号に掲載された歌群「水市覺有秋」の一首、千石の水あぶ心地日ぐらしの一時に啼きぬ木陰路入ればの表記違いの相同歌である。」

むらさきの路傍の花のちいさを
愛でしかばかりに行く車びと

（以上二首鹽原温泉途上ノ作）

「やぶちゃん注…「路傍」の「傍」は原本では「へ」ではなく（こざとへん）であるが、校訂本文を採った。「ちいさき」はママ。前歌と同じく、歌群「水市覺有秋」の一首、むらさきす路上の花のちひさを愛づるばかりにゆく車かなの表記違いの相同歌である。」

驚きぬ日輪みれば紅熱^{ぐねつ}して
ひぐる^ま日葵向花とくちづけするに

「やぶちゃん注…「日葵向花」「日葵向」の文字列はママ。朔太郎満二十歳の時の、『無花果』（明治三九（一九〇六）年十一月発行）に「美棹」の筆名で掲載された歌群の一首、おどろきぬ日輪みれば紅熱してひまわりばなとくちづけするにの表記違いの相同歌である。」

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

晩秋哀悼歌

わが夢多き少年の日はこゝに終れり

哀悼歌以後われ長く詩を思はざりき

すべて仇敵たれすべて愛人も

おもて
面そむけぬ世は劫火たれ

「やぶちゃん注…「劫火」は原本は「却火」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「劫火」とする。」

なまじいにつらき御胸をきく日なく
許すべかりしさいはひとと

「やぶちゃん注…「なまじい」はママ。一首末原本は「さいはひとど」であるが、誤字と断じて」と訂した。校訂本文も「さいはひとと」とする。」

いかんせん君に捨てられ思ひ子は
石となりても世にありがたき

君といふつめたく美しき石彫お
女神戀して身はやせにけり

執着の涙ぞせめておん髪に
涙となりても降りそゞげかし

われに一人あめつち代へぬ愛人の
ありて楽しときのふ思ひぬ

何となく美しければ戀しければ
君とよびしを罪ありやいな

火にくべて大方やくに惜しからぢ
いまは要なき歌のすてがら

「やぶちゃん注…「惜しからぢ」はママ。

因みに、この最後の「晩秋哀悼歌」歌群は「ソライロノハナ」の中でも数少ない、類似
歌稿の存在しない全く新発見の歌群である。

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

「やぶちゃん注…次いで、歌群「午後」の章から順次短歌を掲載する。」

切愛すそのひとことのきゝたさに
あへても死なずありし身なれど

拳もて石の扉をうつ如き

愚かもあへて君ゆへにする

「やぶちゃん注…原本は「拳もて石の扉をもつ如き」、「愚かもあへて」は「禺かもあへて」
であるが、以下の先行発表作に基づき、訂した（底本校訂本文も同じく訂している）。朔太
郎満二十三歳の時の、『スバル』第一年第十一号（明治四十二（一九〇九）年十一月発行）
に「萩原咲二」名義で掲載された歌群の一首、

拳もて石の扉を打つとき愚^{おろか}もあへて君ゆるにする
の標記違いの相同歌である。」

體溫機^{しらぬく}管 極熱を

つめたき手してすかし見る君

「やぶちゃん注…「體温機」体温計。校訂本文は「體温器」と訂している。」

野守等の唄ふをきけば忘れぐさの
きのふ始めて思ひきざすと

「やぶちゃん注…「思ひきざすと」は原本では「思ひざきすと」であるが、意味不明なので、
錯字と断じて校訂本文通り、「思ひきざすと」と訂した。」

寝ざめして淋しき夜なり浪の音を
風のやうにもきく明石潟

(明石の宿にて)

西洋の習慣好む君ゆへに
別るゝきはも手を口にあつ

我が肺にナイフ立てみん三鞭酒
栓ぬく如き音のするべし

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩
原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

我が肺にナイフたてみん三鞭酒、栓ぬく如き音のするべし、
の表記違いの相同歌であり、二首目と同じく、後の朔太郎満二十三歳の時の『スバル』第
一年第十一号（明治四十二（一九〇九）年十一月発行）に掲載された歌群の一首、
心臓に匕首たてよシヤンパアニユ栓抜くごとき音のしつべし
の類型歌でもある。」

拳固^{こぶし}もて石の扉をうつ如き
愚かもあへて君ゆへにする

「やぶちゃん注…原本は「愚かもあへて」は「禺かもあへて」であるが、以下の重出作同

様に訂した（底本校訂本文も同じく訂している）。本歌は七首前、本「午後」の第二首目の、
拳もて石の扉をうつ如き

愚かもあへて君ゆへにする

の重出。手書き作成したものであるから、恐らく後から気がついたものの、修正を施さな
かった（施せなかった）ものと思われる。」

言ひ給へけしうはあらず我とても

この頃知りぬ少しく知りぬ

^{くれない}紅の軍服着たる友の來て

今日も語りぬワグネルのこと

「やぶちゃん注…「くれない」はママ。この「友」は軍人ではなく（日本の軍服に赤いものは襟章を除いてない）イギリスの近衛兵の上着のような（若しくはそのもの）「紅の軍服」を伊達に着ているものと思われる。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、くれないの軍服着たる友の來て今日も語りぬワグネルのこと、

の標記違いの相同歌である。」

かにかくと何を思ふや嬉しき日

何故わがやうにものを言はれぬ

春ゆうべとある酒屋の店さきに

LIQURの瓶を愛でゝかへりぬ

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

春ゆうべとある酒屋の店さきに^{リキュール}LIQURの瓶をめてゝかへりぬ
の標記違いの相同歌である。」

春の夜の酒は泡だつ三鞭酒
樂はたのしき戀のメロディ

「やぶちゃん注…「シヤンパニユ」はママ。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

春の夜の酒は泡だつシヤンパンシユ樂はたのしき戀の旋律
の標記の著しく異なる類型歌である（私はこれを相同歌とは採らない）。」

樂しされどやゝ足らはぬよ譬ふれば
序樂をきかぬオペラ見ること

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された歌群の一首、
たのしされどやや足らはぬよ譬ふれば序樂をきかぬオペラみること
の標記違いの相同歌である。」

妹が折々すなる態をして
もだして居りぬ女の中に

「やぶちゃん注…不思議な一首である。この「女の中に」「居」るのは「妹が折々すなる態をして」黙ったままにいる朔太郎自身である。」

かなた日はてるてる海の青たゝみ
八疊ひける室に晝睡す

「やぶちゃん注…「ひける」はママ。校訂本文は「しける」と訂する。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

かなた日はてるてる海の青疊八疊しける室に晝寝す
の標記違いの相同歌である。」

八月や日向葵さきぬさかんなる
花は伏屋の軒をめぐりて

「やぶちゃん注…「日向葵」はママ。「伏屋」は屋根の低い小さい家、みすばらしい家。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

八月は日輪花咲きぬ盛んなる、花は伏屋の軒をめぐりて、
の類型歌である。」

朝靄の中をわれ行く君に寄り
ばい。ぶくわへて今日もきのふも

「やぶちゃん注…「くわえて」はママ。」

ぶらじるの海の色にもよく似ると
君の愛でこしオツパアスかな

「やぶちゃん注…「オツパアス」新発見の明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書にある「かゝる日」歌群の中に、

ぶらじるの海の色にもよく似ると。君の愛でこし青玉かな

という酷似した類型歌があることから、ここに記された「青玉」という漢語は「サファイア」のことを指す。しかし英語の文字列「Sapphire」や発音は、どう考えても「オツパアス」又は「オツパース」とは読めない。これに近いのは同じ宝石の「黄玉」、則ち、「トップーズ」（topaz）しかない。ただこれを誤用と指摘出来るかと言うと、実はトップーズにはブルー・トップーズという青色のものがあるから、これ、一概にトンデモ誤用とは言えない気がするのである。取り敢えず注はしておくこととしたい。」

止めたまへかゝる譬たとへは方便歌
説く口振りに似てあさましゝ

理想など高き聲にて言ひし故
あまたの人にとまれしかな

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、理想など高き聲にて言ひし故。あまたの人にとまれしかな。の標記違いの相同歌である。」

指たてゝ驚かす如き眼付する
女をさへも三月戀しぬ

日ぐらしの唱などきゝて居り給ふ
ばいふに火をばつくるあひだも

目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る音をきゝ
ところも知らぬ、支那の街ゆく

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る音をきゝ。ところも知らぬ支那の街ゆく
の標記違いの相同歌である。」

自働車の馳せ行くあとを見送りて
涙ながしき故しらぬなり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

自働車のはせゆくあとを見送りて涙ながしぬ故しらぬなり
の表記違いの類型歌である。」

常盤津とぎわづの復習さへもよほす貸席の
軒提灯の下に別れぬ

「やぶちゃん注…「常盤津」はママ。正しくは「常磐津」。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、
常盤津とぎわづのさらへもよほす貸席の、軒提灯の下に別れぬ、（都會の戀は下町に美し）
の表記違いの相同歌である（後書はママ）。」

芝居見て河添ひかへる夜などは
よくよく人の戀しかりけり

「やぶちゃん注…「川添ひ」はママ。ここはどうみても正しくは「河沿ひ」であろうが、珍しく底本は誤字指示がなく、そのまま校訂本文も採っている。」

大坂の夜は美しく

思ひ出は道頓堀の細小路
小間物店の花瓦斯のいろ

「やぶちゃん注…「美しく」はママ。「道頓堀」は原本では「道紺堀」であるが、誤字と断じて「道頓堀」とした。校訂本文も同じく訂する。「花瓦斯」は「はなガス」と読み、種々の形や色に飾りたてた装飾・広告用のガス灯のこと。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

思ひ出は道根堀みちねぼりの細小路、小間店の花ガスのいろ（大坂の懐、追はこゝにのみ残れり、）
の表記違いの相同歌である（後書はママ。錯字をレ点で訂してある）。「小間店」は「小間物店」の脱字と見てよいが、どうもこれから察すると、思い込みの激しい朔太郎が道頓堀を「どうこんぼり」と誤って記憶し続けていたのではないかと考えられる。

こゝで記号が配されて歌群が終了している。」

たそがれ

海ちかき殖民地をばたそがれて
そゞろありきす如きさびしみ

「やぶちゃん注…「殖民地」はかく書く場合もある。」

淡雪の解くる岡邊に一人きて
はこべをつむもなぐさまぬ哉

冬の日
は淋しく沈む野に出でゝ
日暮れはものを思ふならはし

ちゆうりつぷの花咲く頃はうらぶれし
我も野に出で口笛を吹く

君まつと昔いくたび佇みし
門の扉にかゝる落日

場末なる酒屋の窓に身をよせて
悲しき秋の夕雲を見る

「やぶちゃん注…朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月二十八日附『上毛新聞』に発表した連作の一首、

場末なる酒場の窓に身をよせて悲しき秋の夕雲を見る
の標記違いの相同歌である。」

宿酔のあしたの床にふと思ふ
そのたまゆらの鈍き悲しみ

晝過ぎのホテルの窓に COCOA のみ
くづれし崖の赫土をみる

「やぶちゃん注…「赫土」はママ。朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された連作の一首、
窓ひるすぎの HOTEL の窓に COCOA のみくづれし崖のあかつちをみる
の標記違いの相同歌である。」

何やらん我が若者は白壁に
かくれ語りす雪どけの朝

始めての床に女を抱く如き
ものめづらしき不安なるかな

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された連作の一首、
始めての床に女を抱く如きものめづらしき怖れなるかな
の類型歌である。」

八疊の柱どけいのちくたくと
母の忍ばゆ家を思へば

春の夜は芝居の下座げざのすりがねを
たゝく男もうらやましけれ

「やぶちゃん注…前に同じく『スバル』第二年第一号に前の一首に続けて載る、
春の夜は芝居の下座のすりがねを叩く男もうらやましけれ

の標記違いの相同歌である。」

祭の日寝あかぬ床に寺々の
鐘きく如きものゝたのしさ

「やぶちゃん注…同じく『スバル』第二年第一号に前の一首に続けて載る、
祭の日寝あかぬ床に寺寺の鐘きく如きもののたのしさ
の標記違いの相同歌である。」

民はみなちどきあげぬ美しき
捕虜とりこの馬車のまづみえしとき

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）
年四月発行）に掲載された連作の一首、

民はみなちどきあげぬ美しき捕虜とりこの馬車のまづ見えしとき
の標記違いの相同歌である。」

幼き日パン買ひしに行きしその店の
額のイエスの忘れぬかな

「やぶちゃん注…「幼き」の「幼」の字は原本で「力」が「刀」であるが、誤字と断じて校
訂本文同様に「幼き」とした。「買ひしに行きし」の「買ひし」の「し」はママ。校訂本文
は誤字（衍字）として除去している。以下の先行作から見ても衍字の可能性が極めて強い
が、敢えてここはママとする。前に同じく『スバル』第二年第四号に掲載された連作の一
首、

幼き日パン買ひに行きし店先の額のイエスをいまも忘れず
の類型歌である。」

寒き風は吹くと思ひぬ故郷の
赤木牧場の古榎ふるえのきより

「やぶちゃん注…「榎」は原本では「瀨」。この字は鋤・犁^{すき}や鋤、若しくは動詞で、こなす・うちくたく、の意で誤字であるから、校訂本文に従って「榎」とした。赤木には複数の牧場が現存するが、ネット上の調査では同定出来なかった。御存じの方は御教授を乞うものである。この一首は、前の一首と同じく『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に掲載された、

寒き風吹くと思ひぬ故郷の赤城の牧の古榎より
の類型歌である。」

青山の原に捨てたる文がらを
行方も知らず吹く冬の風

靴ぬぐとかの玄關の鋪石に
涙おとしぬ放浪の子は

「やぶちゃん注…原本では「鋪」は「石」＋「甫」であるが、誤字と断じて、校訂本文に従い、「鋪」とした。」

君よぶと口笛ふきてかくれたる
昔の家の青桐の花

ステツキを振りつゝ街を行くことの
悲しくなりぬ何となけれど

さかづきをかちと合はせて靴音と
樂の響のうづまきに入る

寒き夜もあひ抱き跳ること知らぬ
この島びとは憐れなるかな

「やぶちゃん注…「跳る」の「跳」はママ。校訂本文は「踊る」とする。「この島びと」不詳。」

歌舞伎座の運動場にて見し人を

伊香保の町の石段に見き

「やぶちゃん注…「歌舞伎座」原本は「歌舞妓座」。誤字として訂した。校訂本文も「歌舞伎座」とする。「歌舞伎座の運動場」というのは当時の歌舞伎座の内部に存在した施設である。[ウィキの「歌舞伎座」](#)によると、『歌舞伎座は、明治の演劇改良運動の流れを受けて開設された。この運動の提唱者の一人でジャーナリストの福地源一郎（福地桜痴）と金融業者の千葉勝五郎の共同経営で、『明治二二（一八八九）年に東京市京橋区木挽町に開設されたものを第一期とするが、「建物の変遷」の項の「第一期（一八八九年竣工）」によれば、この時の観客席は三層構造となっており、三『階的一幕見席の後ろには運動場を作り、ここに食品、小間物などの売店があ』ったとある。ちよつとイメージしにくいだが、現在の遊戯室のような、スペースのことであろうか。識者の御教授を乞うものである。』

おちかた
遠方へ行くてふ新車の小窓より

しやくなぎ
あるとき見たる石楠の花

「やぶちゃん注…「おちかた」はママ。」

せり
さ霧たつ妻込山の鶏鳴に

あゝのし
ほの白々とあくる東雲

「やぶちゃん注…「妻込山」は校訂本文では「妻籠山」に訂されてある。長野県木曾郡南木曾町吾妻にある妻籠城址は別名妻籠山と呼ばれている。知られた妻籠宿の直近にある。ここか。」

くろがねの扉を固く閉す君

門の柱にすゝり泣くわれ

しかれども君てふものゝあることを
知らで過ぎたる十九またよし

遠方の村の白壁二三點

白々かなしく光る十月

「やぶちゃん注…原本は下句「白々かなしく光る十月」であるが、意味不明。校訂本文通り、「かなしく」の誤字と断じて訂した。」

町内の屋臺をひきし赤だすき

十四の夏が戀の幕あき

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』第三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に掲載された

町内の屋臺を引きし赤だすき十四の夏が戀の幕あき

の標記違いの相同歌である。」

河岸藏のかの白壁ぞ戀しけれ

戀の手習いろいろのこと

さくさくと靴音させて中隊の

すぎたるあとに吹く秋の風

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に掲載された、

さくさくと靴音くつおとさせて中隊ちゆうたいのすぎたるあとに吹く秋あきの風かぜ

の標記違いの相同歌である。」

椽ばたに疲れし顔が煙草吸ふ
教師の家の家の庭のこすもす

「やぶちゃん注…「椽」はママ。校訂本文は「𦵏」と訂するが、芥川龍之介など、「𦵏」を「椽」と書く慣用例は頗る多いので、訂せずにそのままとした。本歌は朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）に掲載された、縁端に疲れし顔の煙草吸ふ教師の家の庭のこすもすの標記違いの相同歌である。」

野分こそいと可笑しけれ花合の
猪つける札思ひ出づ

きさらぎや笛の稽古の通ひたる
我が故郷の橋のうす雪

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に掲載された、
二月や笛の稽古に通ひたる故郷の町の橋のうす雪
の類型歌である。」

前橋の電話交換局にありといふ
わが初戀の人のせうそこ

ある宵のそゞろありきにピンポンの
音を床しみ透き見せし家

行く春の淡き哀しみのイソツプの
蛙の腹に破裂せし音

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『創作』第一卷第四号・明治四三（一九〇二）

年六月号に掲載された、

行く春の淡き悲しみいそつぷの蛙のはらの破れたる音
の標記違いの相同歌である。」

清元の神田祭のメロディに

似たる戀しぬたちばなの花

「やぶちゃん注…同じく『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号の一首、
清元の神田祭のメロディに似たる戀しぬたちばなの花
の標記違いの相同歌である。」

わが妹初戀すとは面白し

オーケストラの若き笛ふき

「やぶちゃん注…同じく『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号の一首、
わが妹初戀すとは面白しオーケストラの若き笛ふき
の標記違いの相同歌である。」

ある宵のオペラの序幕合唱隊の
中に見し人わすられぬ哉

「やぶちゃん注…「合唱隊」はママ。底本校訂本文は「合唱隊」と訂する。従わない。」

花祭女王の君が車ひく

あはれなる子は涙ながして

岡山の高等學校の庭にさく
だありやの花こすもすの花

「やぶちゃん注…「岡山の高等學校」第六高等学校（現在の岡山大学）。以前にも注したが、

朔太郎は明治三九（一九〇六）年満十九歳の三月に群馬県立前橋中学校を卒業後、同年中に前橋中学校補習科や早稲田中学校補習科を経て、翌四十年九月に熊本の第五高等学校第一部乙類（英語文科）に入学したが、同年七月に第一学年を落第、同月、岡山の第六高等学校を受験して合格、同年九月に同校第一部丙類（独語文科、独語法科）に入学している。因みに但し、結局、定期試験を受けずに問題視されて六高も翌明治四十二年七月に落第、翌四十三年四月には慶応義塾大学部予科一年に入学するも同月中に退学（理由不明）、同年六、七月頃には六高もまた退学している（当時、チフスに罹患しており、表向きの退学理由はそれであるように底本年譜の記載では読めるように書かれてある）。学歴の仕切り直しは明治四四（一九一一）年五月の応義塾大学部予科一年の再入学であるが、ここもまたしても六ヶ月後の同年十一月に退学し、これが萩原朔太郎の最終学歴となった。」

冬枯れの畑の上に工場の

煙たなびく角筈のあさ

「やぶちゃん注…「角筈」（つのはず）は旧淀橋区、現在の東京都新宿区の南西部にかつてあった地名。現在の新宿区西新宿・歌舞伎町・新宿の一部に相当する。因みに参照したウイキの「[角筈](#)」によれば地名の由来は『諸説あるが、新宿区教育委員会では』『角筈周辺を開拓した渡辺与兵衛の髪束ね方が異様で、角にも矢筈にも見えたことから、人々が与兵衛を角髪または矢筈と呼び、これが転じて角筈となった』という『説を有力としている』とある。「角筈」とは一般名詞としては、弓矢の筈（矢の端の弓の弦に番える切り込みのある部分。矢筈）を動物の角で作ったものをいう。

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

「やぶちゃん注…以下、大標題「何處へ行く」歌群に入る。」

どこへゆくこの旅びとのせはしなき

あとに光れる青き貝がら

「やぶちゃん注…大標題「何處へ行く」の裏頁に配された一首。」

胸をうつこの引金をひく人を
得んとばかりにわれ戀を戀ふ

夕さればそぞろありきす銃器屋の
前に立ちてはピストルを見る

「やぶちゃん注…原本は「夕されば」。校訂本文に従った。朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載されたうちの一首、夕さればそぞろありきす銃機屋のまへに立ちてはピストルをみるの標記違いの相同歌である。」

いと可笑し蚤とる如き眼して
かたみ交互に求む戀のありかを

この心言ふはあさまし然れども
言はねば尚もけだものに似る

あゝえたえず、と思ふときは日記にきをくり
死なんと書いて心しづまる

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の冒頭の一首、あゝえたえず、と思ふときは日記をくり。死なんと書いて心しづまる、の標記違いの相同歌である。」

ピストルを持ちて歩けば巡査よび
とがめぬ、これは我を憐つため

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

ピストルを持ちて歩けば巡査よびとがめぬ、これは吾を憐れつため

の標記違いの相同歌である。」

「われ死なむ」「あゝ死にたまへいつにても」
かく言ふ故に死なれざりけり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

「われ死なむ」「あゝ死に玉へいつにても」かくいふ故に死なれざりけり、（戀なくして死ぬるは淋し）

の表記違いの相同歌である（後書はママ）。」

同人数そうぞめかして練り來ると

きゝてはせ見るともらひなりき

「やぶちゃん注…「そうぞ」はママ。「装束」で「さうぞ」が正しいか。校訂本文は「さうぞ」とする。「ともらひ」は「弔ひ」の音変化であるが、上句の「同人数」の謂いが私にはよく分からない識者の御教授を乞うものである。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

同人数そうぞめかして練りくるときいてはせみるともらひなりき、
の標記違いの相同歌である。」

瓶子もて机たゝける我が友を

「鬼」と罵り耳うつ女

酒のめば龜の子のごと頸ふりて

わからぬことを唄ふたのしさ

酔ひしれて何をか言ひし友等みな
去りぬこのとき我れ流涕す

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩
原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、
酔ひしれて何をか言ひし友らみな、去りぬこのときわれ流涕す、
の表記違いの相同歌である。」

その女何とか言ひてわが肩を
ふたつ叩きしことがうれしき

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一
日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、
その女何とか言ひて吾が肩をふたつたゝしことがうれしき
の表記違いの相同歌である。」

襟しろき女に見とれ四ツ辻の
電信柱に突きあたりけり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩
原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、
襟えり白き女に見とれある町の電信柱はしひしにつきあたりけり
の類型歌である。」

脳病と自ら言ひて學校を
怠ける男歌をよく詠む

學問のきらひの男今日もきて
戀の話をして歸りけり

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、學問のきらひの男今日もきて。戀の話をしてかへりけり
の標記違いの相同歌である。」

湯あがりを惚れる女もあらんかと
あかるき夜の街をゆきゝす

「やぶちゃん注…「惚れる」は原本では「惣れる」。誤字と断じて校訂本文を採った。」

口をあけとぼけ面づらしてある町の
二丁が程は知らで歩みき

「やぶちゃん注…「二丁」約二百十八メートル。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、
口をあけとぼけ面づらしてある街の二丁が程は知らであゆみき、
の表記違いの相同歌である。」

居酒屋のまへにとまりてふところの
錢をかぞふることが楽しき

踵かかとあげ怒りてものをぐさと蹈む
それが墓ひきがへるがへるなりき氣味の惡さ惡さ

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、
かゝとあげ怒りて物をぐさとふむ、それが墓ひきがへるなりき氣味の惡さ惡さ、
の表記違いの相同歌である。」

死なんとて蹈切近く來しときに

齧^{けふ}冊の煙みて逃げ出したりき

「やぶちゃん注…「齧冊」の「齧」は原本では「米」＋「氣」であるが、誤字と断じて「齧」

とした。校訂本文は無論、「汽車」とするが採らない。これは朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された一首、

死なんとて蹈切近く來しときに汽車の煙をみて逃げ出しき

の類型歌である。」

この男寢ても覺めても煙草のむ

悲しきくせをおぼへけるかな

「やぶちゃん注…「おぼへ」はママ。」

ボンボンの中より甘きキララソオを

吸ふ心もておん胸にゆく

「やぶちゃん注…「キララソオ」はママ。校訂本文は「キュラソオ」とする。採らない。「curacao」（キュラソー）はリキュール酒の一種で西インド諸島のキュラソー島特産のオレンジの皮を味つけに用いるのでこの名がある。やや苦みのある甘い洋酒で酒精分三〇～四〇％と高い。色は無色・褐色・緑色など各種ある。」

ともすれば口をゆがめて延次郎^{えんじろ}の

假聲^{こはいろ}つかふ人を忘れず

「やぶちゃん注…「假聲^{こはいろ}」はママ。校訂本文は「聲色^{こわいろ}」とする。採らない。「延次郎」とは

歌舞伎役者の名跡河内屋實川延二郎^{じつかわえんじろう}と思われ、創作年代から見て、明治一九（一八八六）年に九歳で二代目實川延二郎の名で初舞台を踏み、後に延若^{えんじやく}を襲名（大正四（一九一五）年）した初代實川延若の長男二代目實川延若（明治一〇（一八七七）年～昭和二六（一九

五一（年）かと思われる。参照した[ウイキの「實川延若（2代目）」](#)によれば、戦前、濃厚な上方の芸風が批評家に高く評価されたとあり、『口跡に優れ、時代がかった口調から急に世話にくだける間が絶品であった。類い稀な演技力もさることながら、立派な押し出しと色気の有る目元が、得も言われぬエロチシズムを生み出し、「油壺からでたような」という評が与えられた。その色気の力は『双蝶々曲輪日記・引窓』の濡髪をつとめたとき、あまりの凄さに与兵衛で舞台を共にした初代中村鴈治郎が嫉妬したほどだった』。『色気の有る芸については、延二郎時代、初めて東京の舞台に立ったときに「上味酩で煮上げたような」と評されている』とある役者である。」

島子てふ藝者がくれしハンカチを
母に見られし一大事かな

浅草の活動寫眞に今日もゆく
女の髪の毛を嗅ぎに行く

「何なれば羊の如くさまよふや」
「死ぬべき場所を求めんがため」

年ごろをくせともなりぬピストルを
ふとんの下に敷きて寝ること

いづこにか我は行くべき今日もまた
電車に乗りて街をめぐれり

寄宿舎の裏門を出で旅泊屋はたじやに
しのびて行くは一人泣くため

「やぶちゃん注…校訂本文は「旅泊屋」を「旅籠屋」とする。採らない。」

涙川ながれを早みのる舟の
棹さしかねついつち行くらん

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、
涙川ながれを早みのる舟の、棹さしかねついつち行くらん、
の標記違いの相同歌である。」

大雷雨すぎたるのちの遠鳴を
とほなり
いでゆ
温泉の中にきくころよさ

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

午後三時會社をいづるスコツチの
中にまぢりて我が影も行く

「やぶちゃん注…「まぢりて」はママ。「スコツチ」スコツチ・ツイード (Scotch tweed)。スコットランド産の羊毛の紡毛糸を用いて機械織りしたざっくりとした毛織物。因みに英語の「tweedy」には、ツイードを着た（好む）以外に、田舎に住む上流階級らしいという意がある。」

パノラマの暗き階子を登るより
すこしまさりし不安なるかな

（初めて女を抱けり）

「やぶちゃん注…「階子」はママ。校訂本文は無論、「梯子」とする。ここで述べておくが（今までもそのセオリーで電子化してきているのであるが）、私は誤字や当て字であってもそれを訂せずとも分かり、意味として全く問題なく採れて認識出来る場合は、改訂すべき

ではないと考えている。

「パノラマ」上野及び浅草にあったパノラマ館のイメージと思われる。以下、サイト「meijitaisho.net」の「[パノラマ館](#)」の記載によれば、日本初登場となったパノラマ館は明治二三（一八九〇）年五月七日（朔太郎未だ満四歳である）に上野公園内に開館した「上野パノラマ館」で、戊辰戦争の白河の戦いを描いた「奥州白川大戦争図」を配したこのパノラマ館は同公園で開催中だった第三回内国勸業博覧会の人出もあって大きな人気を集めた。続いて、二週間後の五月二十三日には浅草公園六区内に日本で二番目のパノラマ館「日本パノラマ館」が登場している。数あるパノラマ館の中でもとりわけ高い人気を集めたこの日本パノラマ館は、円形小屋で直径三十六メートル・全高約三十メートルという当時としては異様に巨大にして高層の建物であった（華族女学校や農商務省舎を手がけた建築家にいのみたかまさ新家孝正の設計）。サンフランシスコ直輸入の本格的な南北戦争図を配したその圧倒的なパノラマは開館直後から大人気となり、五ヶ月間で二〇万人もの観客を動員したとある。朔太郎は「[パノラマ館にて](#)」（リンク先は「宿命」（昭和一四（一九三九）年創元社刊）版。[初出形「青色のさびしい光線」](#)も参照されたい。孰れも私の電子テキストである）を詠み、同詩集末の「附録 散文詩自註」に本詩の自註も掲げており、そこから一部を引用すると（「[パノラマ館にて](#)」のリンク先に同註全文を掲げてある。なお、傍線はやぶちゃん）、

＊

パノラマ館にて 幼年時代の追懐詩である。明治何年頃か覺えないが、私のごく幼ない頃、上野にパノラマ館があつた。今の科學博物館がある近所で、その高い屋根の上には、赤地に白く PANORAMA と書いた旗が、葉櫻の陰にへんぼん翩翩としてゐた。私は此所で、南北戦争とワートルローのパノラマを見た。狭く暗く、トンネルのやうになつて梯子段を登つて行くと、急に明るい廣闊とした望樓に出た。不思議なことには、そのパノラマ館の家の中に、戸外で見ると同じやうな青空が、無限の穹窿となつて廣がつてるのだ。私は子供の驚異から、確かに魔法の國へ來たと思つた。（中略）

館全體の構造は、今の國技館などのやうに圓形になつて居るので、中心の望樓に立つて眺望すれば、四方の全景が一望の下に入るわけである。そこには一人の説明者が居て、畫面のあちこちを指さしながら、絶えず抑揚のある聲で語つてゐた。その説明の聲に混つて、不斷にまたオルゴールの音が聴えてゐた。それはおそらく、館の何所かで鳴らしてゐるのであらう。少しも騒がしくなく、靜かな夢みるやうな音の響で、絶えず子守唄のやうに流れてゐた。（その頃は、まだ蓄音機が渡來してなかつた。それでかうした音楽の場合、たい

てい自鳴機のオルゴールを用ゐた。)

パノラマ館の印象は、奇妙に物靜かなものであつた。それはおそらく畫面に描かれた風景が、その動體のままの位地で、永久に靜止してゐることから、心象的に感じられるヴィジョンであらう。馬上に戰況を見てゐる將軍も、銃をそろへて突撃してゐる兵士たちも、その活動の姿勢のまま、岩に刻まれた人のやうに、永久に靜止してゐるのである。それは環境の印象が、さながら現實を生寫しにして、あだかも實の世界に居るやうな錯覺をあたへることから、不思議に矛盾した奇異の思ひを感じさせ、宇宙に太陽が出來ない以前の、劫初の靜寂を思はせるのである。特に大砲や火藥の煙が、永久に消え去ることなく、その同じ形のままで、遠い空に夢の如く浮んでゐるのは、寂しくもまた悲しい限りの思ひであつた。その上にもまた、特殊な館の構造から、入口の梯子を昇降する人の足音が、周囲の壁に反響して、遠雷を聽くやうに出來てるので、あたかも畫面の中の大砲が、遠くで鳴つてゐるやうに聽えるのである。

だがパノラマ館に入つた人が、何人も決して忘られないのは、油繪具で描いた空の青色である。それが現實の世界に穹窿してゐる、現實の青空であることを、初めに人人が錯覺することから、その油繪具のワニスの匂ひと、非現實的に美しい青色とが、この世の外の海市のやうに、阿片の夢に見る空のやうに、妖しい夢魔の幻覺を呼び起すのである。

*

以下、参考先「meijitaisho.net」の「[パノラマ館](#)」から引用すると、かくも『圧倒的な視覚体験を提供したパノラマ館でしたが、背景の巨大な図絵や前景の造作物等、規模が大がかりなパノラマは、新図を頻繁に入れ替えることは困難で、人気の維持には苦労していたようです。いずれのパノラマ館も、開館当初は高い人気を集めますが、最初の感動が強いだけに同じ絵のままでは飽きられるのも早く、しばらくすると客足は途絶えがちになります。そのため何とか数年ごとに新図に入れ替えて、客足を呼び戻すというかたちが専らでした。』『しかしこのように更新のサイクルが遅く、加えて基本的には絵が靜止したままのパノラマは、上映の入れ替えが頻繁で、実像が動き続ける新時代の見世物にはかなうべくもありません。』明治四十年代に『入って国内に活動写真が全盛し始めると、その人気を奪われるのに時間はかからず、大正時代を待たずに相次いでその姿を消していきました。一時は大変な人気を集めた日本パノラマ館も、日露戦争の頃まではなんとか客足をつないだものの、その後は急速に人気を失つて』、明治四二(一九〇九)年に閉鎖したとある。

さて、本「ソライロノハナ」の「自敘傳」のクレジットは大正二(一九一三)年四月(同

年四月時点で朔太郎は満二十七歳であった）ではあるが、次の次の一首の元が明治四三（一九〇二）年六月以前の句であるから、この歌の作品内時制をそれ以前（上野や浅草のパノラマ館があつた時期）と考えることはなんら問題なく、まさに浅草の日本パノラマ館（と限定しているわけではないが、私には恐らくは啄木の短歌などの影響か、何故かそれらしく思われてしょうがないのである。悪しからず）の閉鎖される直前の景とするのも、これまた哀感を興に添えるという気が私にはするのである。」

鶏鳴けいめいすかく言ひ君をかい抱く

きぬぎぬこそはまたなかりけれ

しかれども悲劇の中の道化役者の

一人にんとして我は生くべき

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十三歳の時の、『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号に掲載されたものの一首、

しかれども悲劇の中の道化役の一人として我は生くべき

標記違いの相同歌である。」

いかならん尚も流涕したまふは

悲劇の幕のとぢしのちにも

不覺にも胸さはがせて背後より

おどかす君がにくきたくらみ

「やぶちゃん注…「さはがせて」はママ。」

尊氏といふわが伯父は日の本に
すこし過ぎたる人なりしかな

「やぶちゃん注…「尊氏といふわが伯父」不詳。萩原家には父光蔵（萩原玄隆三男）の上に

は長男玄得（腸チフスで早逝）と次男玄碩という伯父がおり、この玄碩という人物が医家であった主家萩原家第十一代目を継いでいる（養子先から戻ったらしい）が、この人物を指すのではあるまいか？（母方の八木家には俊一郎という叔父はいるものの伯父はいない）。大阪府八尾市立図書館公式サイト「デジタルアーカイブ」内の「[萩原朔太郎](#)」によれば、祖父玄隆は八尾の旧家の出で、『朔太郎の父密蔵は、八尾市南木の本で代々続く医家の三男として生まれ』（嘉永五（一八五二）年）、明治一四（一八八一）年に『東京帝国大学医学部別科を卒業後、群馬県立病院の医師として前橋に赴任。土地の素封家の娘と結婚し』（密蔵三十五歳、妻ケイ（朔太郎の母）二十歳。但し、密蔵は五歳若く年齢を詐称していた。ケイは終生それを信じていたと底本全集の年譜にある）明治一九（一八八六）年十一月一日に朔太郎が誕生、自身の医院を『開業したのはその前年で、前橋随一の名士として市の医師会長まで勤め』たとあり、その後に『八尾の本家は、密蔵の次兄玄碩が継ぎ、現在はその孫にあたる隆氏が、萩原家16代目として家業（内科医院）を継いでおられ』、『隆氏の父栄次は、医師であると同時に短歌をたしなむ風雅の人で、朔太郎の良き理解者でもあり』、『朔太郎は、八歳年長のこの従兄を兄とも慕い、終生敬愛してやま』ず、『朔太郎の第一詩集『月に吠える』の初版は栄次に捧げられ』ている。『隆氏は、昭和54年、筑摩書房から『若き日の萩原朔太郎』を上梓されました。自己の内面を赤裸々に吐露した朔太郎の栄次宛書簡に著者ならではの解説が付された本書は、すぐれた“朔太郎論”であるとともに、ふたつの高貴なる魂の交友録だといえるでしょう。また、『河内どんこう 60号』にも『我が家と萩原朔太郎』という隆氏の一文が掲載されています』とある。この現在の萩原朔太郎の伯父の子孫の名前が「隆」（「たかし」であろう）というお名前であることに着目したい。全集の系図に出る「玄碩」という名は如何にも昔の医家の号そのものである。この人は実はこの「隆」という名に響きも合う「尊氏」というのが本名であったのではあるまいか？ 識者の御教授を乞うものである。」

櫻さく夷の國に生れしは

いかなる母が不覺なりけむ

「やぶちゃん注…朔太郎の母ケイは旧厩橋松平藩藩士で当時は師範学校副校長（県衛生課兼務）であった八木始の長女で、慶応三（一八六七）年に前橋で生まれている。父始は古武士風の厳格な性格で子弟への躾も厳しかったが、一面ハイカラ趣味の持ち主でもあった

と年譜にある。彼女と朔太郎の異常とも言える母子の愛情関係はよく知られたところではあるが、ここで朔太郎が述べているこの「母が」「櫻さく夷の國に生れ」てしまったことは想像を絶するほどに「不覺」であったことであろう、と述懐するその具体的な核心部分にはよく分らない。識者の御教授を乞うものである。」

相乗りの俤の上に君とわれ

溢ずりせしをたれか知るべき

夕ざればハーモニカ吹く少年の
群れにまぢりて藥田に行く

「やぶちゃん注：「夕ざれば」「まぢりて」はママ。」

春の夜の芝居の木戸のくらやみに
待たれし人の恨まれしかな

百人の若き姫等が振りかざす
櫻の枝にうたれ死なばや

やゝ咲きしあつき息する紅の
牡丹の花にくちびるをあつ

こゝろもち重き島田を傾むけて
酒すゝむるが忘れぬかな

「やぶちゃん注：「傾むけて」はママ。」

燈臺の光とゞかぬ岩影を
知りて來にこし我等ならねど

「やぶちゃん注…底本の原文表示の後には『「來にこし」は原文のまま。』という編者注記がある。」

新宿のかの居酒屋の小娘と

もの言ふほどに成りにける哉

君が手に銀貨はなるゝ一刹那

浪にかくれぬ黒き男は

(江の島にて即興)

「やぶちゃん注…「一刹那」は原本では「一切刹」。誤植と断じて訂した。校訂本文も無論「刹那」と訂する。このシチュエーションは江の島裏手南側にある稚児ヶ淵を下った先、第一岩窟の前方にある海食崖下の魚板石の光景である。

私がテキスト化した明治三一（一八九八）年八月二十日発行の『風俗畫報』臨時増刊「江島・鵜沼・逗子・金澤名所圖會」の「江島」の部の「江島案内」の中の龍窟を概説した後（私の当該テキストに送り仮名を追加し、句読点・濁点・ルビなどを変更したり増やして読み易く補正した）、

*

窟^{いはや}を出れば、前に平坦なる巨岩あり。其の幅、七・八間、之を魚板石といふ。其の形、魚板に似たるを以て名づく。竝立^{ちようりつ}すれば、風光の美なる児が淵^{ちよ}に優^{まさ}れ。人をして轉々歸るを忘れしむ。但し、激浪、常に來りて岩角^{いはかど}を齧めば、或ひは全身飛沫を蒙ることあり。此邊に潜夫群居して、遊客の爲めに身を逆さにし、海水に没入し、鮑若しくは海老・榮螺等を捕へ來る。又錢貨を投ずれば、兒童、水底に入りて之を探り、或ひは身を水上に翻轉^{ほんてん}して、遊客の笑觀に供す。亦、一興といふべし。

*

とある。この朔太郎の体験は、まさにこの記事の書かれた数年後の経験である。

そもそも、この「魚板石」での漁師たちのパフォーマンスは、今から三百年以上も前の、貞享二（一六八五）年に板行された最古の鎌倉地誌である水戸光圀の「新編鎌倉志卷之六」にさえ既に記されている。以下も私の電子テキストから引こう（一部を読み易く変えた）。

＊

魚板石 マナイクイシ 龍穴の前にあり。面平 ワモテタヒラ かにして魚板の如し。遊人或は魚を割き、鰻 アヘビ を取らしめて見る。此の石上にて四方を眺望すれば、萬里の廻船數百艘、海上にうかめり。豆・駿・上・下總・房州等の諸峯眼前に有り。限り無き風景なり。

＊

ついでに、やはり私の電子化しているエドワード・モースの「日本その日その日」E・S・モース（石川欣一訳）の「第五章 大学の教授職と江ノ島の実験所」からも同じシー・クエンスを引用しておこう。

＊

翌朝我々は夙く起き、長い往来を通ってもう一軒の茶屋へ行った。ここは実に空気がよく、そして如何にも景色がよいので、私は永久的に一部屋借りることにした。海の向うの富士山の姿の美しさ。このことを決めてから、我々は固い岩に刻んだ段々を登って、島の最高点へ行った。この島には樹木が繁茂し、頂上にはお寺と神社とがあり、巡礼が大勢来る。いくつかの神社の背後で、島は海に臨む断崖絶壁で突然終っている。ここから我々は石段で下の狭い岸に降り、潜水夫が二人、貝を求めて水中に一分と十秒間もぐるのを見た。彼等が水面に出て来た時、我我は若干の銭を投げた。すると彼等はまたももぐって行った。銅貨ほしさにもぐる小さな男の子もいたが、水晶のように澄んだ水の中でバシヤバシヤやっている彼等の姿は、中々面白かった。

＊

ちなみにこれは明治一〇（一八七七）年の夏の情景である。

——そうして——ここからが私の注の真骨頂だ（既にその「新編鎌倉志卷之六」の当該項に私が附している注をほぼそのまま引く）。

萩原朔太郎といえば芥川龍之介だ！

芥川龍之介と江の島との関連で余り取り上げられることがないが、芥川龍之介の未完作品「大導寺信輔の半生」の最終章「六 友だち」には、その掉尾に、このまさに魚板石付近を舞台にした印象的なエピソードが語られているのである！ やはり私のテキストから当該部を引用しておく。

＊

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることとは出来なかつた。標準は只それだけだつた。しかしやはりこの標準にも全然例外のない訣ではなかつた。それは彼の友だちと彼と

の間を截斷する社會的階級の差別だつた。信輔は彼と育ちの似寄つた中流階級の青年には何のこだわりも感じなかつた。が、纔かに彼の知つた上流階級の青年には、——時には中流上層階級の青年にも妙に他人らしい憎惡を感じた。彼等の或ものは怠惰だつた。彼等の或ものは臆病だつた。又彼等の或ものは官能主義の奴隸だつた。けれども彼の憎んだのは必しもそれ等の爲ばかりではなかつた。いや、寧ろそれ等よりも何か漠然としたものの爲だつた。尤も彼等の或ものも彼等自身意識せずにこの「何か」を憎んでゐた。その爲に又下流階級に、——彼等の社會的對蹠點に病的な^さ感^じを感じてゐた。彼は彼等に同情した。しかし彼の同情も畢竟役には立たなかつた。この「何か」は握手する前にいつも針のやうに彼の手を刺した。或風の寒い四月の午後、高等學校の生徒だつた彼は彼等の一人、——或男爵の長男と江の島の崖の上に佇んでゐた。目の下はすぐに荒磯だつた。彼等は「潜り」の少年たちの爲に何枚かの銅貨を投げてやつた。少年たちは銅貨の落ちる度にぼんぼん海の中へ跳りこんだ。しかし一人海女^{あま}だけは崖の下に焚いた芥火の前に笑つて眺めてゐるばかりだつた。

「今度はあいつも飛びこませてやる。」

彼の友だちは一枚の銅貨を巻煙草の箱の銀紙に包んだ。それから體を反らせたと思うと、精一ぱい銅貨を投げ飛ばした。銅貨はきらきら光りながら、風の高い浪の向うへ落ちた。するともう海女はその時にはまつ先に海へ飛びこんでゐた。信輔は未だにありありと口もとに残酷な微笑を浮べた彼の友だちを覚えてゐる。彼の友だちは人並み以上に語學の才能を具へてゐた。しかし又確かに人並み以上に鋭い犬齒をも具へてゐた。……………

*

この本文中に「或風の寒い四月の午後、高等學校の生徒だつた彼は彼等の一人」とあるが、龍之介の一高卒業は大正二（一九一三）年七月であるから、これは明治四四（一九一一年）か翌年の四月、若しくは卒業年の大正二（一九一三）年四月の間の出来事となる。私は龍之介の謂いから、このシチュエーションは正に明治の最後の江の島を活写していると読む。

そうして——

——そうして、この一首の朔太郎の短歌の存在によつて！

——その同じ稚児が淵の魚板石のロケーションのフレームの中に！

——後に盟友となる若き日の萩原朔太郎もまた！

——その恋人とともに写っていることが証明されたのである！……………

最後に。

私はこの一首を若き日に読んだ瞬間、

『……この恋人が銀貨を投げた一刹那に「浪にかくれぬ黒き男」とは——朔太郎自身だな……』

と独りごちたものだった。……

そうして——

——そうして、私の瞼に浮かんだ映像は

——かの

——つげ義春の

——「海辺の叙景」

——そのエンディングのコマだった……

……朔太郎よ……彼女は確かに……君のファム・ファータルだったのだよ………」

逢はぬ夜はこほろぎさへも来て鳴くと

いふはいさゝか作りごとめく

(ある女の呼出しに答へて)

たんらんの蜘蛛が巣をはる手段^{てだて}より

尚にくむべき君がまなざし

「やぶちゃん注…「たんらん」「貪婪」で「貪婪^{どんらん}」に同じい。」

心地よし長椅子^{ソファ}の上に煙草のむ

歡樂の後の淡き倦怠

「やぶちゃん注…「倦怠」「倦怠」はこの場合は「倦」に同じい。」

猶太びとエホバの御子を待つ如く

果敢なきかなやわがたのみごと

あゝ君は何の權威ぞ渴きたる

我に缺けたる酒盃さかつきを投ぐ

われきゝぬ今日も捕手とりての二三人

門を開けよと叩ける音を

前橋の共進會の裏門の

畑の中にきく秋の風

「やぶちゃん注…「共進會」群馬県文書館発行の『[文書館だより](#)』（第十八号 平成四（一九九二年一月号））の（主任田中尚氏の冒頭記事に（リンク先はPDFファイル。当時の会場の写真あり）、

《引用開始》

明治四十二（一九一〇）年九月七日から二カ月間、群馬県主催一府十四県連合共進會が前橋市で開催されました。共進會とは、産業の振興をはかるため参加府県が物産を陳列し、その成績を審査表彰するというもので、府県連合のかたちで全国的に行われていました。

会場は前橋市内二カ所に設けられ、第一会場の清王寺町（現県民会館）には、市が一万九〇〇〇坪の土地を提供して本館がおくれました。第二会場の連雀町（現本町一丁目）には参考館が建てられ、第二会場は馬匹畜産共進會が紅雲町（現前橋女子高校）で行なわれました。「やぶちゃん注…ここに写真の解説が入るが全文引用は気が引けるので中略とする。」

第一会場には、このほか蚕糸館、特許館、染織工芸館、雑工業業館などの陳列館が立ち並び、七万点を超す各種産物が陳列されました。また、飲食店や各府県の売店、余興地の活動写真、不思議館などの興行は多くの人々にぎわい、入場者は一三万人以上にのぼりました。

期間中前橋・渋川間には電車が開通し、市街地の家庭には電灯がとまり、会場の建物は夜間イルミネーションに輝くなど、電気時代の幕開けのなか空前のにぎわいとなりました。

《引用終了》

とあり、これと考えると間違いあるまい。まさに朔太郎好みのイベントである。感じからはこの第一会場であろう。

「ここで記号が配されて歌群が終了している。」

くもり日

死なん哉さらば生きん

すてばちの身をば柱になげかけて
忍びなきする此の頃のくせ

ぴすとの口を額に押しあてゝ
そのつめたさに驚きて泣く

大方は死なでもあるか越し方は
みな一筋の灰色の途

「やぶちゃん注…底本校訂本文は「越し方」を「來し方」と『訂』する。従わない。」

空虚^{うつろ}なるこの心をば充たすべき
何物もなし酒店に入る

居酒屋の樽に腰かけ焼酎^{しやうちう}を
飲み習はすもいたましき哉

「やぶちゃん注…「しやうちう」はママ。正しくは「せうちう」。」

「かきおき」を書きたることも五つ度の
上にのぼれど尚知死なであり

「やぶちゃん注…次の一首でも全く同様の「死」を抹消して「知」とする朔太郎自身による訂正があるが、「ソライロノハナ」ではこうした抹消訂正は極めて珍しい。」

たゞひとつ戀はれ戀してあることを

死知らで死ぬるが悲しさに泣く

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

コニヤクの強き心をもつ人に

此の女等はもの足らぬかな

異教徒の如くに我はもてなされ

酒肉の席を逃れ出でにき

「やぶちゃん注…原本は「異教従」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「異教徒」とする。」

わが心いやしくなりて株式の

話を父とするを悦ぶ

不敵にもかの王法わうぽうを破りたる

謀叛人をうつ銃の音

（逆賊は殺されたり、あゝ）

あそびや

鐘が鳴るあれは上野か浅草か
逢引の夜の月の出もよし

鼻唄が知らで過ぎたる角見世の
その「蘭蝶」に更くる色街

音羽屋とかけ聲なぐるその下に
やくざ男が拍子木をうつ

「やぶちゃん注…「拍子木」は原本は「調子木」。校訂本文を採った。」

明烏夢の淡雪消ゆるより
果敢なき戀のくりごとを聞く

あそびやの離れ座敷の丸窓に
ひとゝもたれて見たる初雪

「やぶちゃん注…「離れ座敷」は原本は「放れ座敷」。誤読の恐れがあるので校訂本文を採った。」

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

敗荷集

「やぶちゃん注…「敗荷」とは枯れ朽ちた蓮の意。これらは末注に示すように與謝野鉄幹の詩「敗荷」へのオードである。」

不忍池、長酩亭に我等が

壺みたる酒のつめたさよ

柳ちるまた鐘が鳴る不忍の

池をめぐりて秋は來りぬ

「やぶちゃん注…前書の「壺みたる酒」の「壺」を校訂本文は「酌」と『訂』する。採らない（この字は漢字として存在し、「くむ」と読める）。前書の「長酩亭」その他の詳細注は最後に附した。」

み手とればこゝにも秋の夕日落つ

亭をかこめる枯れ蓮のうへ

「やぶちゃん注…「枯れ蓮」は原本では「枯」の字は（「木」＋「固」）であるが、校訂本文に従い、訂した。」

欄により酒をふくめば盃の

底にも秋のうれひたゞよふ

「やぶちゃん注…この一首のみ先行発表作がある。朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に掲載された三首の内の一、

欄に寄り酒をふくめば盃の底にも秋の愁ただよふ

標記違いの相同歌である。」

悲しくも君に強いられ我が叫ぶ

挽歌の節に冷ゆるさかづき

「やぶちゃん注…「挽歌」は原本は「晩歌」。少々迷ったが、誤字と判断して、取り敢えずは校訂本文と同じく「挽歌」とした。」

鐘なれば敗荷に秋の夕日落つ

君寄り泣けばまた欄におつ

自墮落に弾く三味線も

盃の冷ゆるも悲し秋の水樓

絶えまなくむつごとするも涙おつ

かつは悲しき秋の日なれば

諧謔かいぎやうの別れ話も手をとれば
彼の涙おつ我が涙おつ

「やぶちゃん注…「長酩亭」は「ちやうだてい（ちようだてい）」と読む。不忍の池の池の弁天島（中之島）の南岸にあった酒店である。元尾張藩儒者であった文人わしづきどう鷺津毅堂（文政八（一八二五）年～明治一五（一八八二）年）の事蹟を詳細に綴った彼の外孫であった永井荷風の「下谷叢話」の「第三十九」の叙述中に以下のようにある（底本は国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」を視認した）。

＊

……不忍池の周囲が埋立てられて競馬場となつたのは明治十八年である。されば此の時池塘の風景は天保の頃梁川星巖が眺め賞したものと多く異なる所がなかつであらう。毅堂等諸家の集り會した酒亭三河屋は辯才天を安置した嶋の南岸にあつた。維新以前には嶋の周囲に酒亭が檐を接してゐたのであるが、維新の後悉く取拂はれて、獨三河屋のみが酒帘（れん）を掲げることが許された。これは主人長太の妹お徳といふものが東京府に出仕する官吏某の妾となつてゐた故であつたと云ふ。毅堂等の詩人は長太の酒亭を呼ぶに長蛇亭或は

長酩亭を以てした。わたくしの母の語る所を聞くに三河屋の妹徳は後に池の端に待合を出した。また三河屋の娘お福は詩會の散じた折には廻廊めぐりぞうと共に穀堂を送つて竹町の邸に來たが、三河屋破産の後お福は三味線掘の小芝居柳盛座の中賣になつてゐたさうである。明治三十二三年の頃わたくしは三河屋のあつた所に岡田という座敷天麩羅の看板の掲げられてあるのを見た。その後明治四十四年の夏に至つて、わたくしはこゝに森鷗外先生と相會して廬に荷花を觀たことを忘れ得ない。その時先生は曾て秋山に謁して贅を執らんことを欲して拒絶せられたことを語られた。枕山が花園町に住してゐた時だと言はれたから其の歿した年である。

＊

この叙述から分かるように、これは亭主の名長太を振つた屋号であり、しかも朔太郎がこの歌を詠んだ頃には、後掲する朔太郎の文に出るように、実は同位置に酒店はあつたものの既に屋号は変わつていた。

即ち、これらの「敗荷集」歌群は、実は與謝野鉄幹二十八の時の作で詩集「紫」に載る、

敗荷 與謝野鉄幹

夕不忍の池ゆふへしのばすゆく

涙おちざらむや

蓮折れて月はすうすき

長酩亭酒寒しちやうだてい

似ず住の江のあづまや

夢とこしへあま甘きに

とこしへと云ふか

わづかひと秋

花もろかりし

人もろかりし

おぼしきに倚りて

君伏目がちにふしめ

嗚呼何とか云ひし

蓮に書ける歌はす

に基づくオードなのである（詩は以下に示す萩原朔太郎の「與謝野鐵幹論」の底本とした筑摩書房版萩原朔太郎全集の「引用詩文異同一覧」の原典を底本とした）。「詩の出版社 ミッドナイト・プレス」の公式ブログの「[敗荷 与謝野鐵幹](#)」によれば、これは明治三三（一九〇〇）年八月に大阪に旅した鉄幹が山川登美子・鳳晶子らと住之江の住吉大社に遊んだが、その「わづかひと秋」の後の日に、不忍池の長酩亭にて独り酒を酌みつつ、その時の思い出を「花もろかりし／人もろかりし」と詠んだ追懷吟であったとある。

山川登美子は鉄幹を慕っていたが、明治三四（一九〇一）年に親の勧めに従って山川家に嫁いだ（翌年、夫と死別。なお、同年に鉄幹は晶子と結婚している）。その後も鉄幹は彼女を「白百合の君」と呼び、「新詩社」の晶子らとともに道を同じくしたが、明治四二（一九〇九）年に没した。

朔太郎は昭和一五（一九四〇）年二月号『文学界』に発表した「與謝野鐵幹論」（後に「帰郷者」に所収）で、この詩を『おそらく鐵幹の抒情詩中で、唯一の壓巻ともいふべき傑作である』と称揚して、全詩を掲げた上、以下のように評している（底本は筑摩版全集に拠る）。

＊

前の「殘照」と共に、死んだ愛人に對する追懷の詩であるが、「敗荷」といふ題が示すやうに、逝きて返らぬ日への追懷と、永久に失はれた戀への傷心とが、落魄蕭條とした敗殘者の心境で歌はれてゐる。「夕べ不忍の池ゆく、涙おちざらむや、蓮折れて月うすき。」といふ冒頭から既に悲調であり、敗荷に晩秋の夕陽が落ちかかつてゐる、上野不忍池畔の景情をよく表してゐる。「長酩亭酒寒し」の長酩亭は、不忍池辯天堂の境内にある旗亭で、今は名が變つて別の屋號になつてゐるけれども、昔ながらの他に面して、欄干の周圍が蓮の葉に圍まれてゐる。詩の第四聯で再度此處を鮎出し、「おぼしまに倍りて、君伏目がちに、嗚呼何とかいびし、蓮に書ける歌。」と結んだのは、過去にその京都の愛人と、同じ旗亭で戀を語つたことがあるのだらう。その追憶の旗亭に來て、敗荷に落つる夕陽を眺めながら、ひとり寒い酒を飲んでゐる詩人の心境を、落魄たる敗殘者の悲調で歌つてゐるこの詩の如きは、けだし鐵幹詩中の一傑作であるばかりでなく、明治新體詩中に於ても異例に秀れた戀愛詩

の絶唱であらう。定評される如く、藤村は明治戀愛詩人の第一人者であるけれども、その戀愛リリズムの本質となしてるものは、旅愁に似た淡い漂泊者の愁ひであつて、かうした鐵幹の詩に見る如き、斷腸裂帛の悲調を帯びた戀愛詩とは、本質的に全く異つたものであることを知らねばならぬ。

＊

と絶賛する（但し、最初の部分の「死んだ愛人」というのは事実としては誤りであるが：しかし……朔太郎にとつては失恋の相手とは押しなべて「死んだ愛人」であつたことも内的な真実であつたに違いない……）。因みに、これより前の部分で『漢詩獨特の悲壯なエスプリが、鐵幹に於て戀愛抒情の中に取り込まれ、星と董の感傷的な情緒の蔭で、新しい西歐詩風な變貌を示したことは、明治新体詩史上に於て充分特筆すべきことでなければならぬ。かうした鐵幹の秋風悲壯調は、次の詩に於て最も完璧に現れてゐる』として掲げられてある「殘照」（同「紫」所収）についても、鉄幹と朔太郎のために同底本から正統な詩形を引用しておく。

殘照 與謝野鐵幹

そぞろなりや

そぞろなりや

夕髪みだるゆふかみ

地に霜あり

常住も何んの夢ぞじやうぢやう

人堪へんや

花堪へんや

嗚呼わりなし

水さびしげに竹をめぐり

痛手負ふ子に似ていたで

獨り秋を去いなんとす

山蓼やまたでの莖くきあらはに
黄ばむ日戸に弱し
人しのばざらんや
西の京の山

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

さびしき町

溝板をもるゝ湯の香につゝまれて
逢曳したる夜のおもひで

「やぶちゃん注…「溝板」は原本では「構板」。暫く校訂本文に従う。」

みだらなる別府の町の三味線と
馬車のラツパと忘れぬ哉

煤すすけたる温泉宿の三階に
呆然として立つ男あり

煤黒き温泉宿の立ち竝ぶ
露地ろぢを出づれば冬の海みゆ

裏町の床屋が角に張られたる
芝居のびらに吹く秋の風

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「古き日の秋（昔うたへる歌）」という標題で「夢みるひと」名義によ

り掲載された五首連作の巻首の一首、

裏街うらまちの床屋とこやが角かどに張はられたる芝居しばあのびらに吹ふく秋あきの風かせ
の標記違いの相同歌である。」

街角に廓がよひの四五人が

佇たたずみて聴く松前追分

「やぶちゃん注…「佇たたずみて」はママ。「松前追分」は「まつまへおひわけ（まつまえおいわけ）」と読む。辞書では江差追分に同じで、北海道の民謡で江差地方の座敷歌。信濃追分が越後から船乗りなどによって伝えられて変化したものというところがあるが、個人サイト「線翔庵」の「[松前追分](#)」によれば、北海道桧山郡松前町に伝わるそれは微妙に違うとある。確かに『信州中山道と北国街道の分岐点「追分宿」（長野県北佐久郡軽井沢町）で、飯盛女達によって歌われた「追分節」が、全国に伝播したもの。その頃、『馬方節』に三下りの三味線の手がつけられたという意味の『馬方三下り』といった』とあるものの、全国に広がったそれは微妙に地域的変化を示しており、『「蝦夷や松前…」という歌詞から、『松前』（新潟潟あたりでは転訛して『松舞』などとも…）という曲名に変化したものもある』とし、『江差追分』として現在のような、前唄・本唄・後唄といったスタイルになる前の形の追分は、北海道を初めとして各地に残っています。その一つといえるのが『松前追分』で、『現在はあまり聴くことは少ないですが、『江差追分』とも若干趣の違う節回しが魅力です』とはつきりと違いが示されている。リンク先では「江差追分」の音源も聴ける。」

夕暮の町にたゞよふアルボース

足竝はやき蕩子らのむれ

「やぶちゃん注…「蕩子」はママ。校訂本文は「蕩兒」とする。

「アルボース」ドイツ語 *Arbosa*。辞書には親水性の薄黄色の固体で消毒剤として用いるとあるのだが、今一つ、正体が藪くさめない。そもそも私の持つドイツ語の辞書にはこの単語が載らない。但し、アルヴォ・ペルトがタルコフスキに捧げた偏愛するアルバム「ARBOS」でラテン語の意味なら樹木であることは知っていた（羅和辞典を引くと他に檣・舵・船等の意もある。一方では古い海事用語であつたらしい）。翻って、アルボース石

鹼液というのがあり、実はこれ、我々が学校の手洗い場でお馴染みの、あの緑色の液体石鹼のことである。この短歌の「アルボース」の注としてはあの消毒薬みたような臭いを想起出来ればそれでよいのであろうが、私としては、あんなに見慣れた石鹼液なのに、孰れの辞書も「アルボース」なるものの原料を明記していないのが気になるのである。ラテン語から多分植物由来であろうことぐらいは分かるが、妖しい。アルボース石鹼の販売会社を調べると、消毒効果の主成分は添加するクロロキシレノール (chloroxylenol) と呼ばれるものであることが分かった(毒性その他はウィキの「クロロキシレノール」を参照。そこには強い魚毒性を有するとある。由来原料を記さないところを見るとこれは化学合成物質らしい)。今時、ずっと我々が何の心配もせずに使い続けてきた謎の緑石鹼を問題にしないということはあるまいと検索すると、やはりあった。シロクニC62氏のブログ記事「アルボース石鹼・・・大丈夫?」である。それによれば名前からの想像通り、アルボース石鹼は精製された植物油がベースらしい(それでも何の植物か分らない)。問題はやはり配合消毒成分クロロキシレノール及びエデト酸塩・緑色二〇一号・緑色二〇四号・黄色四号である。そこな書かれた数多くの副作用の危険性があるなど、これ、ゆめ知らず使っていた。蛇足ながら附けたしておく。」

格子戸のまへにたゝづみたそがれの

悲しき街を女みて居り

「やぶちゃん注…「たゝづみ」はママ。」

遠く居る君も忍べと夜なれば

涙流して尺八を吹く

裏街うらまちの暗き屋竝ぞ忘れぬ

博多少女のあはれなる唄

「やぶちゃん注…本歌群は二首目から別府温泉での囑目吟であることが知れ、底本の年譜で見ると、満二十一歳の明治四〇(一九〇七)年十二月の冬季休暇(当時は熊本五校第一部乙類英語文科一年で寄宿舎に入寮していた)に友人二人と十日程、別府温泉に遊んだと

あるのがそれであろう。当該年譜には滞在中の『ある日、朔太郎がとつぜん笑い出し、何をしてもしまらず、同行の二人が氣が狂ったのではないかと思った。また、同郷を名乗る人に金を貸し、三人とも旅費が不足し、各自自宅へ三十圓ほど送金を依頼、春休みの歸省時にともに父親から叱責された』とある。

ここで記号が配されて歌群が終了している。」

春のたはむれ

沈みゆくセロの響きに神経の
ふるふがごとき春の夕暮

行きづりの絆纏わろぐちばらが悪口を
こわがる君とあねもねを買ふ

「やぶちゃん注…「行づり」「こわがる」はママ。「絆纏」は原本では「纏」の字が「糸」でなく「糸」であるが、校訂本文を採った。」

たゞよへる祭の夜の灯の海に
我等は赤き帆をあげて行く

歌舞伎座のかへりに我をつゝみたる
床しきマントわすられぬひと

「やぶちゃん注…「歌舞伎座」は原本では「歌舞妓座」。以下に掲げる相同歌で訂した。この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の一首、

歌舞伎座かぶきざのかへりに我われをつつみたる床ゆかしきマント忘わすられぬひと
の標記違いの相同歌である。」

セレナーダ
オロンの小夜曲ともきゝ居りぬ
世にも悲しき訴へごとを

あやうくもこと定まりし別れ路を
またかゝること言ひて泣かせ給ふか

「やぶちゃん注…「あやうく」はママ。」

すさ
荒み樽心のこのごろ君をえて
夜も日もわかず消息を書く

「許せ」「否輕き眩暈^{めまい}す」かの夜の
暖爐はげにもあつすぎしかな

「やぶちゃん注…「眩暈」の「暈」は原本では「曇」。誤字と断じて訂した。改訂本文も「眩暈」とする。そのルビ「めまい」はママ。改訂本文は「暖爐」を「煖爐」とするが、従わない。」

若き身のわれが奏するマンドリン
ちゝろちゝろと泣くが哀しき

キュラソオの淡きにほひの漂へる
くちびるをもて吸はれけるかな

「やぶちゃん注…「キュラソオ」フランス語「curacao」。キュラソー。リキユール的一种。オレンジの果皮から香気をラム酒やブランデーに浸出させた甘い洋酒。カクテルに用いる。元来はのキュラソー島（カリブ海南部ベネズエラ沖にあるオランダ自治領）産のオレンジを用いたことに由来する。」

寢室の窓のガラスに息かけて
君が名をかく雪どけの朝

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

秋より冬へ

ニツケルのしやぼんの箱にゆがみたる
顔のうつるも悲し初秋

ニコライの尼が僧衣のま白なる
カフスのうへにたゞよへる秋

「やぶちゃん注…『ニコライ』現在、群馬県前橋市千代田町にある前橋ハリストス正教会聖
使徒大主教聖ニコライ聖堂か（同教会公式サイトは[こちら](#)）。」

いへばえに君がくちびるほのかにも
秋の憂の來りゞよふ

「やぶちゃん注…原本は以下の通り。

いへばへの君がくちびるほのかにも
秋の憂の來りゞよふ

しかしこれでは意味がよく通らない。これは恐らく古語の「言へば得^えに」の誤りと思われる。
「に」は打消しの助動詞「ず」の連用形の古形で、「口に出して言おうとするが、そう
するとしかし、うまく言うことが出来ない」の意である。校訂本文もそう採って「いへば
えに」と訂する。」

夜をこめてまどろみもせむあかつきの
白熱燈の消ゆる侘しさ

「やぶちゃん注…「侘しさ」の「侘」は原本では「佗」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「侘しさ」とする。」

かぎりなく一直線につゞきたる
街を盡くれば白き冬海みゆ

「やぶちゃん注…「冬」は抹消。」

ほのかにも瓦斯のほひの漂へる
勸工場のくらき敷石

「やぶちゃん注…原本は「觀工場」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「勸工場」。この一首は、朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の三首目、

ほのかにも瓦斯がすのほひのただよへる勸工場くわんこうぜうの暗き鋪石しきいし

の標記違いの相同歌と判断する。この「くわんこうぜう」はママ。底本全集校訂本文では「くわんこうば」と訂するが従わない。誤りとしても朔太郎が音韻上、これで詠んだ可能性を排除出来ないからである。無論、「勸工場」は正しくは「くわんこうば」が正しい読みではある。老婆心ながら再注しておく、勸工場かんこうばとは明治・大正期に一つの建物の中に多くの店が入って種々の商品を陳列・即売した一種のマーケットのことで、明治一一（一八七八）年一月に政府の殖産興業政策の方針に沿って東京府が瀧馬河の口（現在の千代田区内）に常設商品陳列場としての「東京府勸工場」を開設したことに始まる（ここには前年に東京上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会に展示された出品物も移されて陳列された。当時の出品点数は合計三十五万点、入場者合計五千二百人に及んだとされる）。後には本格的なデパートの進出により衰退した。勸商場。」



こゝろよき朝飯あさげの後のストープに
林檎を焼けば淡雪のふる

「やぶちゃん注…校訂本文は「朝飯」を「朝餉」と『訂』する。採らない。」

吉原のおはぐる溝のほのぐらき
中にひかれる櫛の片われ

「やぶちゃん注…「おはぐる溝」は原本では「おはぐる構」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「おはぐる溝」とする。この一首は二首前と同じく朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の二首目、

吉原よしはらのおはぐる溝どろのほの暗くらき中なかに光ひかれる櫛くしの片割かたわれ
の標記違いの相同歌である。」

あはれなる落葉の上の戀がたり
み膝のうへの夕時雨かな

藤村のふるき詩集のあひだより
あせし葦の落ちし悲しさ

ほのかにも木立の影に煙草の灯
白きベンチのひかる夕暮

「やぶちゃん注…校訂本文では「煙草の灯」を「煙草の火」と『訂』する。採らない。」

赤城山鹿の子まだらに雪ふれば
故郷びとも門松をたつ

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に「萩原咲三」名義で掲載された（「咲三」の誤りで校正漏れか誤植）三首の二首目、

赤城山鹿の子まだらに雪ふれば故郷びとも門松を立つ
の標記違いの相同歌である。

「ここで記号が配されて歌群が終了している。」

前席の瓢六玉がしなり出て

また活惚を踊る夜長さ

「やぶちゃん注…敢えて原本のママで出すこととする（私は原本を初めて読んだ際、唯一、一読、読みも意味も分からなかった短歌だったからである）。校訂本文は、

前席の表六玉がしなり出て

また活惚を踊る夜長さ

と訂する。「瓢六玉」は間拔けな愚か者のことを指す「表六玉」「兵六玉」で「へうろくだま／ひやうろくだま（ひょうろくだま）」。因みにこの語源は亀に纏わる「賢い亀は六を隠し、愚かな亀は六を表す」という伝承に基づく。亀は甲羅から頭・尻尾・四肢の計六箇所、生体可動部を持つが、ここは亀にとって攻撃を受けた場合、生死に関わる箇所でもあり、通常の亀は危険を感じるとこれらの部分を素早く甲羅の中に隠す。ところが愚鈍な亀はこの六つの箇所を表に出したままにしているという意味に基づく（「玉」は接尾語でやや嘲りの意を含んで人をその程度の人物であると決めつける語）。「活惚」は「かつぼれ（かつぼれ）」と読む。幕末から明治にかけて流行した俗謡と踊りで、鳥羽節から願人坊主の住吉踊りに取り入れられて大道芸となり、豊年斎梅坊主らによってお座敷芸となった。名は「かつぼれ、かつぼれ、甘茶でかつぼれ」というその囃子詞から。」

悪玉のたくらみごとが長かりし

場末の寄亭よせのかんてらの色

(以上二首寄亭にて)

「やぶちゃん注…校訂本文は短歌と後書の「寄亭」を「寄席」に訂する。」

長き夜の浪のみ船の楫音の

よくきこゆれば怪しみてきく

「やぶちゃん注…「楫音」の「楫」は原本では「揖音」。この「揖」は音「ユウ・シュウ」で、訓は「ゆずる」「へりくだる」「あつまる」、敬意を表わすために両手を胸の前に組んで囲みをつくった形にすることを意味する漢字であり、明らかな誤字と断じて訂した。校訂本文も「楫」とする。」

冬の來る頃

涙して火鉢の炭をふくことも

若き我れには痛ましきかな

うなだれて街を歩けばおまはりも

鬚をひねりて我を見送る

しもやけのうすら痒きがうら悲し

母に無心の手紙かくとき

人混みの中を歩くも歸りきて

寢床に入るもすべて悲しき

何物か我まつ如く思はれて
追はるゝ如く町をさまよふ

かなしみて家にかへればありしごと
我を迎ふるにくき小机

「やぶちゃん注…「迎ふる」の「迎」の字は原本では「迴」の「回」を「向」にしたもの。
読めないので、校訂本文を採用した。」

妻もたぬ身には慰さむ人もなし
柱によりて忍び泣きする

「やぶちゃん注…「慰さむ」はママ。」

行きづりし中學生の四五人が
われを見返り物言ひてすぐ

「やぶちゃん注…「行きづり」はママ。」

街行けばあれは酒飲み度しがたき
のらくらものと行人の見る

おまはりを相手にくだを巻きて居る
酔ひどれの兵士が懐かしき哉

酒を呑む癖がつきてより錢もたぬ
日には臥床をひき被ぎ寝る

學校を休みしほどの楽しさと
またそこばくの投げやりとあり

何ごとか一人ごととして歩るきしを
途行く人の怪しみて見る

「やぶちゃん注…「歩るきしを」はママ。」

あることが可笑しくなりて何うしても
笑ひがやまず電車の中にて

思ひ出せぬ顔をやうやく思ひ出しぬ
それがつまらぬ人なりし悲しさ

酒場の一隅より

薄暗き酒場の隅にあるひとが
我に教へし道ならぬこと

「やぶちゃん注…これは朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された一首、
薄暗き酒場の隅に在るひとが我に教へし道ならぬ道
の標記違いの相同歌である。」

賭^{ばくち}奕はも如何に楽しきその錢を
持ちて女を買ふは尚よき

「やぶちゃん注…「賭奕」はママ。」

くどくどと佛頂面にかのやから

何ごとを説く春の灯のまへ

あることを知らで言ひしが不覺にも
わが一生のあやまちとなる

もるひねを計り^{はか}あたへよびすとのを
のんどにあてよたれかとくせよ

あゝ遂に今日も死にえずぴすとのを
ふところにして酒店に入る

學校を追はれし我がさかしげに
世を罵れば親はまた泣く

悲しきは生をしたへる執心が
また一方に死を願ふこと

我をよく誰れか如何にととかせよ殺すとか
あるひは活かすとかいづれにかせよ

「やぶちゃん注…「あるひは」はママ。」

人竝に可笑しきことも言ひ居れば
誰れか知るらん死を願ふ子と

酒を飲むその時の外の我を見れば
生きてあるごとし死にてあるごとし

酔ひどれの臭き息をば酒のまぬ
ときに嗅ぐより悲しきはなし

新しき我等が軍の尖兵の
中にまぢれる鼓手の少年

「やぶちゃん注…「まぢれる」はママ。「鼓手」は「こしゆ（こしゆ）」で軍隊の戦列兵の鼓手。「鼓」は「鼓」の異体字。筑摩版全集校訂本文は「鼓」に訂する。」

たゞ人は物言ふおきもうつむける
少年とのみ我を見るらむ

わがまへに人いくたりかつまづきし
かの途を行きこの途をゆく

僅かなる在府の錢を思ひつゝ
酒場を出でゝ風に吹かるゝ

その心ダイナマイトに似たれども
弱々しげに見ゆる少年

事ごとに心跳りてときめきし
十七の春とらふ由なし

その頃の十七才の少年と
われを思へる祖父のいましめ

「やぶちゃん注…筑摩版全集校訂本文は「才」を「歳」に訂する。」

何時となく覚えしものを罪てふか
かくれてあそび酒を飲むこと

まちあひ
待合の勘定書と質札と
白銅とのみ残れる財布

「やぶちゃん注…「白銅」 白銅貨。当時流通していたのは菊を刻印した五銭白銅貨幣と後発の同じく稲を刻印した五銭白銅貨幣。」

その朝の痛める心はらちもなく
また来よといふ人を憎みぬ

宵ごとの父の小言を時ありて
きかざることを悲しみとする

放蕩の報ひというふに餘りにも
あきらめられぬことがあるかな

「やぶちゃん注…「報ひ」はママ。」

いかでわれ罪を悔いんや悲しきは
矛盾といへる鬼のすること

「やぶちゃん注…「矛盾」は原本では「矛盾」。誤字と断じて訂した。」
生じいに神のこゝろを量りたる
その天罰がわれを苦しむ

「やぶちゃん注…「生じい」はママ。」

新宿のレストランのよごれたる
紺簾をくぐる夜のならばし

「やぶちゃん注…「紺簾」はママ。校訂本文は「暖簾」に訂する。恐らくはこの校訂は九分九厘正しいのであろうが、私には朔太郎の眼に「紺の暖簾」が現前としてあったのだと思われ、これを容易に誤字として訂することが出来ないのである。」

なんとなく若き女とつれだちて
浅草などへ行きたくなりぬ

一人にて梅見に行きしがそのことが
悲しくなりて逃げてかへりぬ

わが隠袋かくしかの色文とピストルと
争ひつゝも七日共棲む

「やぶちゃん注…「隠袋」は原本は「隠衣」。誤字と断じて、校訂本文と同じく「隠袋」とした。」

きちがひになりたくなりて爪屑を
火鉢にくべて見て居たるかな

「やぶちゃん注…爪を焼く香りは火葬場の臭いとはよくいう（当然である）が、個人サイト「鯉乃國の万談義」の[こちらの「おぢちゃん おばやんの言い伝え」の記事](#)の中に土佐では「爪を燃やすと貧乏になる」「爪を燃やすと気がふれる」ともいうらしい。」

わがために二ニンが五たるそのことの
ある日を思ひ生くる愚かさ

「やぶちゃん注…「思ひ生くる愚かさ」は原本は「思ひ生ぐる愚かさ」。孰れも誤字と断じて校訂本文を採った。」

横町のぼんくら安も人並み

我を説かんと日をおきて来る

我が髪をわれとむしれる習慣ならはしの
久しくなれば櫛も通らず

「やぶちゃん注…私ことながら、この一首、タイプしながら、私が小学校三年生の頃、一時、眉毛を引き筆る神経症的な癖が起こり、遂に右眉が半分位なくなってしまう、母が眉描きで描いて呉れたのを思い出した。」

EGOIST われも酒場によこたはり

將某に負けしことを悲しむ

「やぶちゃん注…「將某」の「某」は「棋」の異体字。」

新思想と國體

新しき此の國の人犬のごと

口籠くちこせられて生くるはかなさ

わが酒場かの黨員と日毎きて
カルタきるより樂しきはなし

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

あさくさ

暖秋小春日の午後

浅草公園の雑闇を歩く時

ほど心たのしきものはあらぢ

やるせなき心抱きて浅草に

來れる我も玉乗りを見る

「やぶちゃん注…前書の「あらぢ」はママ。前書中の「雑闇」は「ぎつたふ（ぎつとう）」と読み、「雑踏」「雑沓」に同じい。「闇」は本来は音は「ダウ（ドウ）」で騒ぐ・騒がしくする・騒がしい・賑やかという意である。」

南無大悲大慈大悲の觀世音

わが思ふこととゞかせ給へ

何時までも觀音堂の廻廊に

柳散るを眺めて居たりき

かの巡查いつも立ちて居り境内の

手洗鉢みたらしの屋根の柳散るころ

柳散る觀音堂のきざはしに

不門品ふもんぼんを誦して居たる男よ

「やぶちゃん注…「不門品」のルビは原本では「ふもんぼん」。誤字と断じて訂した。無論、校訂本文もそう訂する。」

浅草の十二いろはの三階の

色硝子より見たる町の灯

われ母の影にかくれて餌をやりし
その鳩を思ひ浅草に行く

やる瀬なき心抱きて浅草に
來れる我も玉乗りを見る

「やぶちゃん注…ママ。本歌群「あさくさ」の冒頭の一首の重出。」

あはれかの浅草の人と物音の
中を歩くも心痛めり

公園のベンチに來りモスリンの
灯の見ゆるまで座りて居たりき

「やぶちゃん注…「モスリン」(英語: muslin) は綿や羊毛などの単糸で平織りした薄地の織物。[ウィキの「モスリン」](#)によれば『日本では、モスリンは薄手の平織り羊毛生地を指すのが普通で、綿生地を綿モスリン、羊毛生地を本モスリンと呼んで区別することがある』。『別名、メリンス(スペイン語に由来)、唐縮緬(とうちりめん)』。『絹のモスリンはシフオンと呼ばれる』。『薄地で柔らかくあたたかいウール衣料素材で、日本では戦前の普段着の着物、冬物の襦袢、半纏の表、軍服(夏服・夏衣)などに用いられていたが、近年では東北地方北海道の一部以外ではほとんど流通しておらず、目にする機会は少なくなっている』とある。ここは最後が直接体験過去の「き」であるから、「モスリン」を着た人物の換喩であるが、これは朔太郎自身であろう。なお、校訂本文は「座」を「坐」と訂する。」

一人にて酒をのみ居れる憐れなる
となりの男なにを思ふらん

(神谷バアにて)

浅草の活動寫眞の人ごみの
中にまぢりて一人かなしむ

はらからもわが淺草に行くことの
深きこゝろを知らぬかなしさ

その日頃

わが少女捕虜とりこのごとくくゝられて
鞭もて打たれ泣きたしといふ

西洋の花なる故にダリヤの花
を好みたる人、その人いまい
づれにありや

眠むたげに尚キスせんと言ふ人の
側へにありて午後の茶を飲む

古めきし我が洋館のバルコニに
晝も夢みる人と住みにき

かあてんも動かずなりし八月の
午後を我等はキスして居たりき

窓あけよ餘り我等が長き日に
空氣も今は重くしづめり

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

「やぶちゃん注…以下、大標題「うすら日」。」

うすら日はやゝ來て這へる露臺など

紅き花など咲けるこのごろ

「やぶちゃん注…「うすら日」の標題の裏に一首のみ配されたもの。因みに筑摩書房版「萩原朔太郎全集」第十五卷（昭和五三（一九七八）年刊）の校訂本文では「やや来て」となっているが、この新字体「来」は明らかに誤植である。」

ひとづま

なにごとくも花あかしやの木影にて

きみ待つ春の夜にしくはなし

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、『朱鸞』第三卷第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に載った、

なにごとくも花あかしやの木影にて君まつ春の夜にしくはなし

の標記違いの相同歌である。」

あいらすのにはひぶくろの身にしみて

忘れかねたる夜のあひぐき

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月二日附『上毛新聞』に載った、

あいらすのにはひぶくろの身^みにしみて忘れ^{わす}かねたる夜^{よる}のあひぐきの標記違いの相同歌である。」

夏くれば君が矢ぐるまみづいろの
浴衣の肩にほふにひづき

「やぶちゃん注…本歌は同じく朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月二日附『上毛新聞』に載った、
夏なつくれば君きみが矢車やぐるまみづいろの浴衣ゆかたの肩かたにほふ新月にひづき
の標記違いの相同歌である。」

しなだれてはにかみぐさも物はいへ
このもかのも逢曳のそら

「やぶちゃん注…前歌と同じ初出の、
しなだれてはにかみぐさも物ものは言いへこのもかものあひぐきのそら
の標記違いの相同歌である。」

おん肩へ月は傾むき煙草の灯
ひかれる途のほたるぐさ哉

「やぶちゃん注…底本校訂本文では「傾むき」を「傾き」に、「灯」を「火」と『訂』する。
採らない。特に後者は明らかな捏造である。」

なにを蒔く姫ひぐるまの種をまく
君を思へと涙してまく

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、『朱鸞』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に載った、
なにを蒔くひめひぐるまの種を蒔く君を思へと涙してまく
の標記違いの相同歌である。」

あひゞきの絶間ひさしき此の頃を
かたばみぐさのうちよりて泣く

うち侘びてはこべをつむも淡雪の
消^けなまく人を思ふものゆへ

「やぶちゃん注…「ゆへ」はママ。朔太郎満二十六歳の時、『朱戀』第三巻第四号（大正二
（一九一三）年四月発行）に載った、
うちわびてはこべを摘むも淡雪の消なまく人を思ふものゆゑ
の標記違いの相同歌である。」

かくばかりひとづま思ひ遠方の
きやべつの畑の香にしみてなく

いかばかり芥子の花びら指さきに
しみて光るがさびしかるらむ

「やぶちゃん注…「芥子」は原本では「艾」（よもぎ）の右払いの左の起筆箇所^に左下向き
の点が入った字体。後掲する先行する歌形に従い、「芥子」と訂した。本歌は朔太郎満二十
六歳の時、大正二（一九一三）年十月二日附『上毛新聞』に載った、
いかばかり芥子^{けし}の花^{はな}びら指^{ゆび}さきに泌^しみて光^{ひか}るがさびしかるらむ
の標記違いの相同歌である。」

はつはる

ぎたあるのあの糸の切れしをつぐ如し
しづかにくるゝ春のゆうべは

「やぶちゃん注：「ゆうべ」はママ。」

ほのかにもケレオソートのにほひして
はつはるの日はくれて行くかな

「やぶちゃん注：「ケレオソート」クレオソート。ブナなどの木タールから得られる無色又は黄色がかった油状の液体で、グアヤコールなど種々のフェノール類の混合物。刺激臭があり、防腐薬・鎮痛薬などに用いる。現在の正式呼称は木クレオソート^{もく}。所謂、正露丸の臭いである。」

春あさき若草山のふもとにて
しづこゝろなく吸ふ煙草かな

すつぽんと花火の玉の破れしとき
さくらさくらはあめいろに咲く

薄葉^{すすやう}に口紅すこしにぢむほど
月の出よしやくちづけのあと

「やぶちゃん注：「すすよう」のルビ及び「にぢむ」はママ。「薄葉」は「薄様（様）」とも書き、読みは「うすえふ（うすよう）」が正しい。薄手の鳥の子紙・雁皮紙又は一般に薄手の和紙を指す。」

思ふどち語りつかれて息らへる
藤椅子^{といす}の影の青きくちなし

「やぶちゃん注：「藤椅子」はママ（「籐椅子」が正しい）。ルビもママで、萩原朔太郎は詩篇「[交歓記誌](#)」（大正三（一九一四）年七月号『創作』。リンク先はこの注のために急遽作った私の電子テキスト）でも「藤椅子」と書き、しかも「といす」とルビを振っているか

ら、朔太郎は普段も「藤椅子」を「藤椅子」と書き、しかも「といす」と発音していたと
考えてよく、これは朔太郎にしばしば見られる一種の確信犯的誤用であるからママとした。」

なにかしてうき身をきつくし死ぬばかり
ひと戀ふすべをおぼへたきかな

「やぶちゃん注…「おぼへ」はママ。」

ふきあげのみづのこぼれをいのちにて
そよぎて咲けるひやしんすかな

「やぶちゃん注…朔太郎満二十六歳の時、『朱戀』第三卷第五号（大正二（一九一三）年五
月発行）に掲載された、

ふきあげの水のこぼれを命にてそよぎて咲けるひやしんすの花
の標記違いの相同歌である。」

きのふ心ひとつに咲くばかり
ろべりやばかり悲しきはなし

「やぶちゃん注…「ろべりや」キキョウ目キキョウ科シヅカクシ（溝隠）属 *Lobelia* のロン
リア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）及びその園芸品種。[歌](#)
群「[ろべりや](#)」他で既注。本歌は前と同じ『朱戀』に掲載された、

きのふけふ心ひとつに咲くばかりろべりやばかりかなしきはなし
の標記違いの相同歌である。」

たち別れひとつひとつに葉柳の
しづくに濡れて行く俤かな

「やぶちゃん注…本歌も前と同じ『朱戀』に掲載された、
たちわかれひとつひとつに葉柳のしづくに濡れて行く俤かな

の標記違いの相同歌である。」

しのゝめのまだきに起きて人妻と

薺冊の窓より見たるひるがほ

「やぶちゃん注…底本では「薺冊」の「薺」は（「米」＋「氣」）であるが表示出来ないし、意味は明らかに汽車であるから、かく訂した。因みに校訂本文は「汽車」としている。「薺」は「汽」の異体字である。以前から申し上げている通り、意味に変化がなく、誤用でないにも拘らず、異体字まで『校訂』してしまっている底本にはやや疑義がある。何故なら異体字を総て正字化する根拠とその徹底可能性には明らかに限界があるからであり、それが絶対の定本とされること自体に疑問を持つからである。本歌は、前と同じ『朱鸞』所収の、しのめのまだきに起きて人妻と汽車の窓より見たるひるがほの標記違いの相同歌である。」

ちりほこり散らばふ黄なる木の葉など

むしろのうへの名所繪圖など

あさはかの女ごゝろにちらちらと

酒のこぼれて嘆く夜かな

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。」

けふのうた

すきみたる女の顔の白粉か

酒に酔ひたるのちのこゝろか

われは尚生きて居たりき氣まぐれに
折から歌を詠みいでしため

むくむくと煙たちのぼり玉手箱
わがたのめごと消えはてにけり

「やぶちゃん注…原本では上句が「むくむくと煙たりのぼり玉手箱」であるが、意味が取れない。校訂本文を採る。」

一となげよ兔にも角にもすてばちの
このさいころを轉がしてみよ

こゝろ惱ましく狂ほし

とんがらしくるりくるりとめぐる日は
眼にいたいたし泣け泣け咲二

「やぶちゃん注…前書は原本は「こゝろ惱ましく狂ほし」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「惱」とする。「くるりくるり」及び「いたいたし」の「いたいた」の後半は原本では踊り字「へ」。この踊り字使用は「ソライロノハナ」の中で特異点で、しかも同一歌の中に二箇所使われている点でもこれは確信犯で、この時の朔太郎にとってはこのスラーのような踊り字が、「こゝろ惱ましく狂ほし」の内在律を示すための音楽記号のようなものでもあったのかも知れない。「咲二」は萩原朔太郎が二十二〜二十六歳頃に盛んに作歌していた頃の雅号。」

かへろかへろ山しよ太夫の赤面か
やんまとんぼか飛べ飛べきちがひ

きちがひのうすら笑ひに茜さし
いなこの如く鳳仙花とぶ

ひとゝこを見つめて居れよ日は照れよ
くるりくるりとめぐれひぐるま

「やぶちゃん注…ここで記号が配されて歌群が終了している。以上が「ソライロノハナ」の全短歌である。」

なを蒔くひめひぐるまの種を蒔く君を思へと涙してまく

なにごとくも花あかしやの木影にて君まつ春の夜にしくはなし

うちわびてはこべを摘むも淡雪の消なまく人を思ふものゆゑ

「やぶちゃん注…『朱鸞』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）の「暮るる日の雪」欄の「その十一」に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十六歳。

一首目は初出では「ひめひぐるま」が「ひめぐるま」となっている。校訂本文に準じて脱字と断じて訂した。「ひめひぐるま」の「ひぐるま」は「日車」でヒマワリの別称であるから、同属の觀賞用小型品種を指すか。

前の投稿から二年の空隙がある。但し、底本年譜にはこの間の大正元・明治四五（一九一二）年の十月に「峽灣」という歌群があることを記すが、そこには『未詳』とあり、これは底本全集編集時に未入手であることを指している。なお、老婆心乍ら、『朱鸞』は「ザンボア」と読み、北原白秋編集になる文芸雑誌である。明治四四（一九一一）年十一月から大正二（一九一三）年五月まで十九冊を刊行、後期浪漫派の活躍の場となった（大正七年一月に発刊された改題誌『ザムボア』は短命で同年九月に廃刊している）。

年譜を見ると、この年二月に大磯・小磯に遊び、また平塚の病院に人を訪ねた、と記す。

その後に編者注として、平塚の佐々木病院に『昔知れる女友の病むときいて』訪ねたところ、同女は既に『此の世から消えてしまったのである』という「ソライロノハナ」の『一九一一、二』のクレジットを持つ「二月の海」の「[平塚ノ海](#)」の冒頭の一節を引いている（年譜の引用には一部表記に問題があるので引用形態をとらなかった。なお、リンク先は私がオリジナルに作った電子テキストである）。ここには実際の朔太郎の永遠の恋人エレナのモデルとされる、朔太郎の妹ワカの友人で本名馬場ナカ（仲子とも 明治二三（一八九〇）年〜大正六（一九一七）年五月五日享年二十八歳）の死との大きなタイム・ラグが存在する。これについて不学な私は現在、読者を納得させるべき知見を持たないが、人妻（明治四二（一九〇九）年に高崎在の医師（佐藤姓）に嫁している）であり、死病であった結核に罹患していたことを念頭におけば、そのトラウマが引き出したところの「永遠のエレナ」と「詩人萩原朔太郎」との物語の時間的齟齬は、不思議に感覚的には不審と思わないことを述べておきたい。同時にエレナについて詳しい識者のご教授を乞うものでもある。ただこの短歌群によって少なくとも、「ソライロノハナ」の創作的虚構的時間を遡ったように見受けられるエレナ／ナカへの詩人の感懐そのものは、決して虚構ではなかったことはつきりと分かるのである。」

* * *

しのめのまだきに起きて人妻と汽車の窓よりみたるひるがほ

ふきあげの水のこぼれを命にてそよぎて咲けるひやしんすの花

たちわかれひとつひとつに葉柳のしづくに濡れて行く俤かな

きのふけふ心ひとつに咲くばかりるべりやばかりかなしきはなし

「やぶちゃん注…『朱鸞』第三巻第五号（大正二（一九一三）年五月発行）の「青き瞳」欄の「その二」に「萩原咲二」名義で掲載された。朔太郎満二十六歳。意識的なフローラ尽くしである。また何より一首目に出現する「人妻」によって、これが、そして先行し、かつこれに続く悲恋唱歌群のその殆んど総てが、やはり永遠の「エレナ」馬場ナカであるこ

とはほ間違いないものと私は思うのである（因みに妹の友人であったナカとの出逢いは一説に朔太郎十三歳の時にまで遡るといふ）。「ろべりや」キキヨウ目キキヨウ科ミゾカクシ（溝隠）属 *Lobelia* のロベリア・エリヌス *Lobelia erinus* 和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）及びその園芸品種。[歌群「ろべりや」](#)に既注。

* * *

一群の鳥（歌）

夢みるひと

遠く行く一群の鳥
かへりみて

我を想へば涙はてなし。

悲しくも人に隠れて
故郷に歌などつくる
我の果敢なさ。

寂しさに少しく慣れて
なにがなし

この田舎をば好しと思へり。

かの遠き赤城を望む
わが部屋の窓に咲きたる
木犀の花。

クロバアの上に寝ころび
空ばかり眺めてありし
中學の庭。

ともすればを休み

泣き濡れて

小出の林を歩きし昔。

その昔よく逢曳したる

公園の側の波宜亭

今も尚あり。

酒のめど

このごろ酔はぬさびしさ

うたへども

あゝあゝ遂に涙出でざり。

いまでも尚

歌つくることを止めぬや

かく問ひし

わが古き友の嘲りの色。

新昇のサロンに來り

夜おそく

口笛を吹く我のいとしさ。

時にふと

盃を投げてすゝり泣く

いとほしやと母も流石思へり。

米專の店に飾れる

馬鹿面の人形に我が似しと

思ふ悲しさ。

公園こうえんのベンチにもたれ

哀かなしみて

遠とほき浅間あさまの煙けむりを眺ながむ。

「やぶちゃん注…大正二（一九一三）年八月九日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された土岐哀果（善磨）や石川啄木ばりの三行分かち書きの十三首連作。朔太郎満二十六歳。

四首目は初出「木犀もくぎ」とルビを振るが、後に示す習作で確認し訂した。

七首目及び掉尾十三首目の「公園」の「こうえん」のルビはママ。正しくは「こうゑん」。

八首目三行目は初出では「あゝあゝ遂に涙出でさり。」であるが、濁音化して示した。

十首目「新昇」の「しんせう」のルビはママ。正しくは「しんしょう」。

十二首目「人形」の「にんげう」のルビはママ。正しくは「にんぎやう」。

同じ一九一三年八月のクレジットを持つこれらの習作連作十九首が残る（底本全集第二巻「習作集第八巻（哀憐詩篇ノート）」所収）に残る。以下に示す。取り消し線は抹消を示す。最後の【*】のマークは発表されたものから除かれたものを示す私のマーキングである。標題に「歌二十首」とするが、初出も校訂本文も十九首しかない。しかもそれについての編者注もなく、しかもなお「ゝ」の圈点があると編者注はあるのだが、そこにはない『二十首の上に』あるという不可解な記載があるのでこれ（圈点復元）は断念した。

一群の鳥

（歌二十首）

遠く行く、一群の鳥

かへりみて

我を想へば涙はてなし

哀しくも人にかくれて

故郷に歌などつくる我のはかなさ

淋しさに少しく慣れて
なにがなし

この田舎をば好しと思へり

かの遠き赤城を望む

わが部屋の窓に咲きたる木犀もくせいの花。

公園のベンチによりずもたれ

哀しみて

遠き浅間の煙を眺む

その昔よく逢曳したる

公園のそばの波宜亭

今も尚ありや

波宜亭はぎの柱に書きし戀の歌
かの頃の歌、今も忘れず【*】

その昔

身をすりよせて君と我と

よく泣き濡れし波宜亭の窓【*】

クロバアの上に寝ころび

空ばかり眺めてありし

中學の庭

學校をよく休みたる

その頃の悲しかりし日よ

なつかしき日よ【*】

ともすれば學校を休み
學校を休み

泣き濡れて

小出の林を歩きし昔

酒のめど

このごろ酔はぬさびしさ

歌へども

あゝあゝ遂に涙出でざり

時にふと

盃投げてすゝり泣く

いとほしや母も流石に思へり

新昇のサロンに來りて

夜おそく

口笛を吹く我のいとしさ

いまも尚

歌つくることを止めぬ^や

かく問ひし

わが古き友の嘲りの色

あゝ如何に我や老いたる

かく思ひ、この日ひそかにためいきをつく【＊】

米專人形の店に飾れる

馬鹿面の男人形に

わが似しと思ふ悲しさ

死ぬよりは尚よろしかり

とかくして

今日もまた安らかに寢床に入れり【*】

眞劍になりて嬉しと思ふこと

いつの日か

我が身の上にめぐり來たるならむ【*】

(一九一三、八)

順列の投稿に際して変更も行われている点に注意されたい。

「中學」朔太郎の在学した群馬県立前橋中学校（現在の前橋高等学校）と考えてよいか。朔太郎はここに明治三三（一九〇〇）年四月入学、明治三七年の五年進級に際して落第、明治三十九年三月に満十九歳で卒業しており（旧制中学は五年制）、十三の時には「エレナ」と出逢っていてその多感な青春の六年間をこの中学校で過ごしている（その四月には高等学校受験の予備校に相当する同中学校補習科に入学したが、七月末日を以って退学、九月に東京の早稲田中学校補習科に再入学している）。

「波宜亭」専ら後の朔太郎の「純情小曲集」（大正一四（一九二五）年八月新潮社刊）の「郷土望景詩」で知られる茶店。

波宜亭

少年の日は物に感ぜしや

われは波宜亭はぎていの二階によりて

かなしき情歡の思ひにしづめり。

その亭の庭にも草木茂さうもくみ

風ふき渡りてばうばうたれども

かのふるき待たれびとありやなしや。

いにしへの日には鉛筆もて

欄干おぼしにさへ記せし名なり。

また、同詩集の自註「郷土望景詩の後に」には、

V 波宜亭

波宜亭、萩亭ともいふ。先年まで前橋公園前にありき。庭に秋草茂り、軒傾きて古雅に床しき旗亭なりしが、今はいづこへ行きしか、跡方さへもなし。

と記す。Tetsudotabi 氏のサイト「鉄道で行く旅」の「萩原朔太郎と郷土望景詩について」の「[波宜亭](#)」に『文献には「萩の餅で名高い旗亭」と書かれている』とある。現在の群馬県前橋市大手町にある遊園地前橋市中央児童遊園（愛称は「前橋るなぱあく」）の敷地相当の一画にあった。

「小出の林」これも後の朔太郎の「純情小曲集」（大正一四（一九二五）年八月新潮社刊）の「郷土望景詩」の私の偏愛する一篇「小出新道」で知られる地名。

小出新道

ここに道路の新開せるは

直ちよくとして市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方よもの地平をきはめず

暗鬱なる日かな

天日家竝の軒に低くして

林の雑木まばらに伐られたり。

いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん

われの叛きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。

また、同詩集の自註「郷土望景詩の後に」には、

IV 小出松林

小出の林は前橋の北部、赤城山の遠き麓にあり。我れ少年の時より、學校を厭ひて林を好み、常に一人行きて瞑想に耽りたる所なりしが、今その林皆伐られ、檜、樺、藁の類、むざんに白日の下に倒されたり。新しき道路ここに敷かれ、直として利根川の岸に通ずる如きも、我れその遠き行方を知らず。

とある雑木林である（「藁」は「ぶな」と読む）。但し、「小出新道」という名称は朔太郎の造語であつて通称名でもないので注意。やはりTetsudotabi氏のサイト「鉄道で行く旅」の「萩原朔太郎と郷土望景詩について」の「[小出新道](#)」に「小出河原」とし、『小出新道』というのは朔太郎が勝手に命名した名前なので、地元の人には通じないらしい。「前橋の市街から小出河原（敷島公園）へ通じる道路」が朔太郎の「小出新道」である。その敷島公園には萩原朔太郎の生家の一部が保存されている』と写真も載る。

「新昇のサロン」新昇というのは前橋にあつた洋食屋。公益財団法人前橋観光コンベンション協会の公式サイト「[前橋まるごとガイド](#)」の「前橋の歴史」にある「萩原朔太郎の世界」の「[朔太郎の好きな食べ物](#)」に、『朔太郎は、前橋の街なかにあつた「新昇ホール」でお銚子を立てながらサーロインステーキをしばしば食べ、焼き方はそのときの気分によつてレアだったり、ミディアムだったりしたようです』。『斉藤総彦と朔太郎は、一時、萩原家そばの家を借り、同居したことがあります。音楽活動のためでしょう。そのときに、朔太郎は、総彦に、スパゲティーやオムレツを作らせたそうです。総彦は、「新昇ホール」のマスターから料理の手ほどきを受け、その腕もなかなかのものだったということです』とある。この斉藤総彦（明治三四（一九〇一）年〜昭和六二（一九八三）年）は朔太郎主宰の「上毛マンドリン倶楽部」の後継者となった人物である。朔太郎十五歳年下。

「米専」呉服屋。現在の前橋弁天通り商店街の青年会長しゅんこう氏のブログ「[前橋まちなかガイド 朔太郎まちなか遊興コースを巡ってきました](#)」に当時の前橋の商店街の中では大きな呉服屋で、『全面ガラス張りのショーウィンドーに人形があつて、そのバカ面に自分の姿を重ねる詩が残っています』とある。詩とあるのはこの短歌のことと考えてよいであろう。現存しない。」

* * *

うすあかりかへらぬ人の戀しさに明けそめて降る雪のはなかさ

はかなかり羽虫のはねの白ろ白ろと光るを見れば夏はすぎけり

「やぶちゃん注…「虫」はママ。「白ろ白ろ」の後半は底本では踊り字「へ」。この一首は底本全集第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「羽蟲の羽」歌群（最後のクレジットによれば大正二（一九一三）年四月の作でペン・ネームは「街の葉ざくら」）の巻頭にある、

おしなべて羽蟲の羽のさも白く

ひかるをみれば夏は來にけり

の相似歌である。」

浮寝鳥うつらうつらと夢のごと青き渚をたどる悲しさ

「やぶちゃん注…「うつらうつら」の後半は底本では踊り字「へ」。この一首は底本全集第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「うまごやし」歌群（クレジットによれば大正二（一九一三）年四月作）の三首目、

浮寝鳥旅に來りてかくばかり

長き渚をたどる哀しさ

の相似歌である。」

「やぶちゃん注…以上は一九八九年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集補卷の「短歌」パートにある既刊全集に洩れた短歌群の内、大正二（一九一三）年九月号『創造』に掲載された三首。」

* * *

あひぐき

夢みるひと

あゝいゝすのほひぶくろの身にしみて忘れかねたる夜のあひぐき

しなだれてはにかみぐきも物は言へこのものあひぐきのそら

夏くれば君が矢車みづいろの浴衣の肩にほふ新月

なにを蒔く姫ひぐるまの種を蒔く君を思へと涙してまく

いかばかり芥子の花びら指さきに泌みて光るがさびしかるらむ

(一九一三、四)

「やぶちゃん注…大正二(一九一三)年十月二日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された五首連作。朔太郎満二十六歳。

「あいりす」は単子葉植物綱キジカクシ目アヤメ科アヤメ属 *Iris* の総称。シヨウブが根や茎に香りを持つのに対してアヤメは花から清潔感のある香りを放つ。特にイタリア産アイリスの花はその非常に良い香り立ちから香料として人気が高い(香料通販会社の記載を参考にした)。

第四首目は同年四月の『朱鸞』投稿の、
なにを蒔くひめひぐるまの種を蒔く君を思へと涙してまく
の標記違いの同一首。】

* * *

秋思

夢みるひと

指^{ゆび}さきに吸^すひつく魚^{うを}のこころよりつめたく秋^{あき}は流^{なが}れそめたり

いぢらしく東京^{とうけう}淺草^{あさくさ}の仲見世^{なかみせ}に秋^{あき}が遊^{あそ}ぶと思^{おも}ふ侘^{わび}しさ

材木^{さいもく}の上に腰^{うへ}かけ疲^{つか}れたる心^{こころ}がしみじみと欠呻^{あくび}せるなり

透間^{すきま}よりのぞきしに秋^{あき}ははや遠^{とほ}くかげなき麓^{ふもと}を行^ゆき渡^{わた}りけり

石工^{いしく}の眼赤^{めあか}きを見^みればうら侘^{わび}し櫟^{くぬぎ}林^{はやし}の秋^{あき}の落^{らく}日^{じつ}

「やぶちやん注…大正二（一九一三）年十月十日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された五首連作。朔太郎満二十六歳。

二首目「東京」の「とうけう」のルビはママ。正しくは「とうきやう」。

三首目「欠呻」はママ。正しくは「欠伸」。

これらの習作である二行分かち書きの連作「中秋雜詠」十四首が残る（底本全集第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収）に残る。以下に示す。取り消し線は抹消を示す。なお、七首目以下九首は、習作にのみある短歌である。

ゆびさきに吸^すひつく魚^{うを}のこころより

つめたく秋^{あき}は流^{なが}れそめたり

材木^{さいもく}うへに腰^{こし}かけしみじみと

疲^{つか}れし心が欠呻^{あくび}せるなり

かみてすつる葡萄^{ぶどう}の核^{かく}のやるせなく

椽端^{つち}の土^{つち}にしみこめる秋

いぢらしく東京淺草の仲見世に
秋が來りて遊ぶわびしさ

石工いしくの眼赤きを見れば胸いたむ
櫟林の秋の落日

透間すきまよりのぞきし秋はいや遠き
牧場屋並のうへを渡るなりけり

摘めばすいすいあとより延のびる芝の芽か
秋は身うちに泳ぎ來れり

樹の幹に指をふるゝもなにがなし
涙流れてやまぬ秋なり

ド、レ、ミ、ハ、ソ、ラ、シ、ド、嬉しさに
階子段をば馳け降るなり


かの遠き風見の上にかゞやける暖秋の日
はのうらゝかなるかな

うらゝかに菊も咲き出で故郷の
少女子どもが遊ぶなりけり

こゝろなく秋もおはりとなりしかば
門邊に出でゝながくさけべり

暖秋の目白に行きてしたゝめし
晝餉ひるげの後の友の諧謔

みなそこに浮べる雲のよしえやし
わが故郷はいかに遠きかも

三首目の「葡萄」は初出では「葡萄」であるが訂した。十二首目の「おはり」、掉尾の一首の「よしえやし」はママ。後者は「よしゑやし」が正しく、これは、副詞「よし」（原義は「縦し」と許可する意）＋嘆息を表わす間投助詞「ゑ」＋語調を整えて感嘆の意を添える間投助詞「や」＋強意の副助詞「し」で、「ままよ！」「ええい！ どうでもよいわ！ 」といった感動詞的性質を持つ副詞（「たとい」「仮に」という仮定を示す場合もある）。

後半九首は実際孰れも平板な印象を免れないように思われ、除かれたのは正しいと感ずる。」

* * *

古き日の秋

（昔うたへる歌）

夢みるひと

裏街の床屋が角に張られたる芝居のびらに吹く秋の風

吉原のおはぐる溝のほの暗き中にれる櫛の片割

ほのかにも瓦斯のほひのただよへる勸工場の暗き鋪石

さくさくと靴音させて中隊のすぎたるあとに吹く秋の風

歌舞伎座のかへりに我をつつみたる床しきマント忘れぬひと

「やぶちゃん注…大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された五首連作。朔太郎満二十六歳。

三首目「くわんこうぜう」はママ。底本全集校訂本文では「くわんこうば」と訂するが従わない。誤りとしても朔太郎が音韻上、これで詠んだ可能性を排除出来ないからである。無論、「勸工場」は正しくは「くわんこうば」が正しい読みではある。老婆心ながら附しておく、勸工場とは明治・大正期に一つの建物の中に多くの店が入って種々の商品を陳列・即売した一種のマーケットのことで、明治一一（一八七八）年一月に政府の殖産興業政策の方針に沿って東京府が澁田の口（現在の千代田区内）に常設商品陳列場としての「東京府勸工場」を開設したことに始まる（ここには前年に東京上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会に展示された出品物も移されて陳列された。当時の出品点数は合計三十五万点、入場者合計五千二百人に及んだとされる）。後には本格的なデパートの進出により衰退した。勸商場。」

* * *

辨慶

夢みるひと

わが
我がなつかしき

さかなや
魚屋のペンケイに

はしそば やすきけは
橋側の安酒場こそまたなけれ、
、
、
、
、
き
も
來て酔ひて唄へる

あき
酔ひどれのかの辨慶も秋くれば路傍に立ちて物を思へり

いろきらがひ さかなや
あはれなる色氣狂の魚屋が我に教へしさのさ節かな

さかなや あか こばな おそあき さけば のき み
魚屋の赤き小鼻を晩秋の酒場の軒に見るが哀しさ

あざかや くら ゆか なにおも
居酒屋の暗き床をばみつめつゝ何思ふらむかゝる男は

ほの暗^{くら}き床^{ゆか}にこぼれし酒^{さけ}を見てふとべんけいが叫^{さけ}び出^{いだ}せり

淫^{みだ}らなるかの辨^{べん}慶^{けい}の諧^{かい}謔^{ぎやく}も秋^{あき}の酒^{さけ}場^ばにきけば悲^{かな}しも

いかばかり悲^{かな}しく彼^{かれ}が眺^{なが}むらむ酒^{さけ}場^ばの窓^{まど}の赤^{あか}き落^{らく}日^{じつ}

(一九一三、一〇、酒場にて)

「やぶちゃん注…大正二(一九一三)年十月二十六日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された八首連作。朔太郎満二十六歳。「辨慶」は前橋(?)の商店街の魚屋の屋号かその主人の綽名と思われるが、詳細は不詳。一首目などは明らかに名にし負はばの弁慶に、謡曲「安宅」や歌舞伎「勧進帳」の後半部を重ねた確信犯である。

「酒場」のルビ「さけば」は全首に一貫した表現なので改めなかった(底本校訂本文では総て「さかば」と『訂』されてある)。

三首目「教へし」のルビ「おし」はママ。

六首目下句の頭「ふとべんけいが」は初出は「ふとべんけがい」。誤植として訂した。」

* * *

酒^さ場^けの窓^{まど}

夢みるひと

つばくらめ酒^さ場^けの軒^{のき}をちらちらくゞれる時^{とき}に我^{われ}も入^いり來^くる

場^ば末^{すへ}なる酒^さ場^けの窓^{まど}に身^みをよせて悲^{かな}しき秋^{あき}の夕^{ゆう}雲^{ぐも}を見^みる

薄^は給^{つきふ}の車^{しや}掌^{せう}も我^{われ}と盃^{さかづき}をさして語^{かた}れば悲^{かな}しまれけり

放^は埒^{うち}の惡^{あく}所^{しょ}通^とひを悲^{かな}しめどわが寂^{さび}しみは行^ゆくところなし

COGNACの酔にあらねど故郷の酒場の月も忘れがたかり

あせし志村一座の幟などはためく頃を酒店に入る

かくばかり我が放埒のやるせなき心きかんと言ふは誰が子ぞ

(以下公園にて)

晩秋の我が故郷の公園を悲しく今日も歩むなりけり

グラウンドの芝生の上に乗る捨てし自轉車の柄の光る夕ぐれ

公園の碑石に手を觸れ哀しめる心つめたく泣き出したり

(故郷前橋にて)

「やぶちゃん注…大正二（一九一三）年十月二十八日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された八首連作。朔太郎満二十六歳。

「酒場」「酒場」の標記違い及び「さけば」の読みはママ。

二首目のルビ「ばすへ」及び「ゆうぐも」はママ（正しくは「ばすゑ」「ゆふぐも」）。

三首目のルビ「しやせう」はママ（正しくは「しやしやう」）。

六首目の「志村一座」は旅回りの芝居一座と思われるが不詳。

七首目のルビ「ほうらつ」は底本では「ほうらつ」であるが先行首に正しいルビがあるので誤植と断じて訂した。

八首目以降三首の「公園」とは朔太郎の愛した「郷土望景詩」に出る前橋公園、現在の群馬県前橋市大手町にある遊園地前橋市中央児童遊園（愛称は「前橋るなばあく」）であるう。

九首目の「夕ぐれ」のルビはママ。」

* * *

「やぶちゃん注…各注が長くなったので、先に注しておく。以下に示す六首は底本の筑摩書房版全集第十五卷（昭和五三（一九七八）年刊）の「短歌補遺」に載る（掲載はこれらのみ）もので、先行する第三卷の短歌の編集の際に漏れたものと思われるもの。『創造』第三十七号・大正二（一九一三）年十月号の「詠草欄」に掲載されたものである。朔太郎満三十二歳。」

寂しさに少しく慣れてなにがなしこの田舎をも懐しみをる

「やぶちゃん注…初出では「なにがなし」が「なにがし」であるが、以下の習作などから脱字と断じ、底本校訂本文通り、「なにがなし」とした。この一首は、先に全歌を掲載した底本第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の二十首連作の歌群「一群の鳥」の第三首目、

淋しさに少しく慣れて
なにがなし

この田舎をば好しと思へり

が原案に見え、またこれを改稿した、この『創造』での掲載の二ヶ月前、大正二（一九一

三）年八月九日附『上毛新聞』に発表した「一群の鳥」の第三首目、
寂しさに少しく慣れて
なにがなし

この田舎をば好しと思へり。
の更なる改稿と思われる。」

しんしんとする水の音かな齣冊はまたトンネルを出でてひた走りけり

「やぶちゃん注…初出は上句を「しんしんとする水の音がな齣冊はまた」とするが、以下の習作から訂した。この一首は、底本第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の十七首連作の歌群「林檎の核」（大正二（一九一三）年七月十三日相当のクレジットを最後に持つ）の第四首目に、

ゝしんしんたる水の音かな

汽車はまた

トンネルを出でゝひたに走れり

とある（首巻の「ゝ」は圈点）。初案の方が韻律はよいものの何か平板で、この改作の方が汽車のリズムに合っている気が私はする。」

油日照りつく日にしきりなく黒くつづける蟻の列かな

「やぶちゃん注…初出は上句を「黒くつづける蟻の列かな」とするが、以下の習作から訂した。この一首も前の一首と同じく底本第二巻「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の十七首連作の歌群「林檎の核」の掉尾第十七首目に、

かんかんたる酷熱の日に

きりもなく

〔赫土に〕

續ける蟻の列かな

〔黒く〕

とあるものの改作である（「ゝ」の二行は二つの語句が並置されて残っていることを示す）。漢詩めいた佶屈聱牙な初期形が和歌の響きとなっている。」

酒飲めどこのごろ酔はぬさびしさに唄へどもああ遂に涙もいらず

「やぶちゃん注…初出は「酒飲めどこのごろ酔はぬさびしきに唄へども」。少し迷ったが、以下の習作などから校訂本文と同じく「さびしさに」と訂した。この一首はやはり、先に全歌を掲載した底本第二巻「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の二十首連作の歌群「一群の鳥」の第十二首目、

酒のめど

このごろ酔はぬさびしさ

歌へども

あゝあゝ遂に涙出でざり

が原案と思われ、またこれを改稿した、この『創造』での掲載の二ヶ月前、大正二（一九

一三）年八月九日附『上毛新聞』に発表した「一群の鳥」の第八首目、

酒のめど

このごろ酔はぬさびしさ

うたへども

あゝあゝ遂に涙出でざり。

の更なる改稿とも思われる。短歌らしくはなつたものの、パッションが行儀よくなつてしまつた分、初期形二稿の方が私は好きである。」

時にふと盃投げてすゝり泣きいとほしき母の寝顔をながむ

「やぶちゃん注…この一首もやはり、先に全歌を掲載した底本第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の二十首連作の歌群「一群の鳥」の第十三首目、

ゝ時にふと

盃投げてすゝり泣く

いとほしや母も流石に思へり

が原案と思われ（「ゝ」は朔太郎自身の附した圈点）、またこれを改稿した、この『創造』での掲載の二ヶ月前、大正二（一九一三）年八月九日附『上毛新聞』に発表した「一群の鳥」の第十一首目、

時にふと

盃杯を投げてすゝり泣く

いとほしやと母も流石思へり。

の更なる改稿とも思われる。この三稿目で確かな和歌となつたという気が私にはする。」

わかき日はとくとく過ぎてわれわれは今饅えくされたる林檎の核なり

「やぶちゃん注…「とくとく」の後半は底本では踊り字「へ」。「饅えくされたる」は初出では「饅らくされたる」であるが、意味が通らないので、次の習作をもとに全集校訂本文と同じく訂した。この一首も同じく底本第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」所収の十

七首連作の歌群「林檎の核」の巻頭の、

若き日は既に過ぎ去り

今の我れは

いたく饅えたる林檎の核なり

の改稿である。説明的な初期形が歌らしくなっていると私は思う。」

* * *

古今新調

夢みるひと

小引

古歌のこゝろのなつかしさよ、わけて新古今詠嘆の調、句高きは夕闇の園に咲くアラセイトオのたぐひなるべし。官能の疲れを苦蓬酒の盃に啜り象徴のあやかしを珈琲の煙に夢みる近代の騷客、ともすれば純情の心雅びかなる古巢にのがれての古き歌集の手觸りに廢唐のやるせなき風流を學ばんとす。げにや新人のモットオに觸れデカダン樂派の新星グリークがピアノの律に啜泣く定家卿選歌の心ばかり世にあはれ深きはあらぢかし。

「やぶちゃん注…この「小引」以下の十首連作は、大正二（一九一三）年十二月一日附『上毛新聞』に標記通り、「夢みるひと」名義で掲載された。朔太郎満二十七歳。

「小引」短い序文。小序。

ルビ「ゆうやみ」「せうてう」「じゅんぜう」「かしう」「ていかけう」はママ。

最初の一文の「アラセイトオのたぐひなるべし。」最後の句点は初出にはないが、脱字と断じて底本全集校訂本文と同じく句点を配した。

「アラセイトオ」はママ（校訂本文もママ）。アブラナ目アブラナ科アラセイトウ（マツテオラ）属 *Matthiola* の花。まるらめ氏の「日だまり仔猫―園芸専科―」の「[ストック](#)」

（アラセイトウの英名：*stock*）に語源説が載る。[ウィキの「アラセイトウ属」](#)によれば、『南ヨーロッパ原産で原産地では多年草であるが、日本では秋蒔き一年草として扱う。開花期は早春〜春。花壇に植える他、切り花にされることが多』く、『よい香りを持っている』『日本では主に切花として栽培されているものと花壇に植えるものとに分かれている。切花の場合は、八重咲きの花が好まれる傾向にある。しかし、ガーデンストックの八重花

は雄ずいも雌ずいも花弁となつてしまつてゐるために生殖能力が無い。そのため、八重と一重の遺伝子を両方持つ株から採種し、選抜しなければならないので、幼苗時に鑑別を行う必要がある』とある。香りは無理だが、[グーグル画像検索「Matthiola」](#)でその華麗な多くの品種を鑑賞出来る。

末尾「あらぢかし」はママ。」

×

淡雪 あはゆき

うら侘 わびてはこべを摘 つむも淡雪 あはゆきの消 けなまく人 ひとを思 おもふものゆへ

「やぶちゃん注…先に示した『朱鸞』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に発表された、

うちわびてはこべを摘むも淡雪の消なまく人を思ふものゆゑ
の改作。」

アカシヤ

なにごと はなも花 はなあかし こかげやの木影 こかげにてき まみ待 はるつ春 よの夜 よにしくはなし

「やぶちゃん注…前首と同じく『朱鸞』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に発表された、

なにごと はなも花 はなあかし こかげやの木影 こかげにて君 ままつ春 はるの夜 よにしくはなし
の標記違いの同一首。」

水のほとりのあづまや みづ

悲 かなしき別 わかれの日 ひに

けふ みぎすぎて水 みづ際に咲 さけるべ へ、へ、へ、へ、こにや かぜもいかで風 かぜにそ なよぎ泣 なくらむ

「やぶちゃん注…底本全集校訂本文では「いかでや」を「いかでか」と補正する。採らな

い。底本全集第二巻の「習作集第九巻（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第三首目に、

水のほとりのあづまや

悲しき別れの日に

けふすぎて水際みぎはに咲けるべこにやも

いかでか風にそがひ泣くらむ

という習作が残る。」

くれがた

あづさ弓かへらぬひとの戀しさに暮れそめて降る雪のはかなさ

「やぶちゃん注…底本全集第二巻の「習作集第九巻（愛憐詩篇ノート）」の「歌」と題する七首連作の巻頭に、

あづさ弓かへらぬひとの戀ひしさに

くれ初めてふる雪のはかなさ

というほぼ同形の習作が残る。」

うすらひ

めづらしき薄氷を見て装ぞける宮城野部屋のけさのきぬぎぬ

「やぶちゃん注…二首前と同じく底本全集第二巻の「習作集第九巻（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第十首目に、

めづらしき薄氷をみて装ぞける

宮城野部屋のけさのきぬぎぬ

というほぼ同形（ルビ「そう」はママ）の習作が残る。」

べこニヤ

うぐゐすの池端に鳴けば夜をこめて枕邊に散る白きべこにや

「やぶちゃん注…「うぐゐす」「池端」はママ。全集校訂本文は「池端」を「池邊」と訂す

る。採らない。前に同じく底本全集第二巻の「習作集第九卷（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第十一首目に、

うぐゐすの池端ちへんに鳴けば夜をこめて
まくらべに散る木こはにやの花白きべこにや
というほぼ同形に直した推敲案が残る（取り消し線は抹消を示す）。」

菊きく

みちもせに俤くろまへくろま俤ゆと行きかへる今日けふしも菊きくの節會せちあひなるらむ

「やぶちゃん注…前に同じく底本全集第二巻の「習作集第九卷（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第九首目に、
みちもせに俤くろまへくろま俤ゆと行きかへる
なにしか菊の節會なるらむ
という習作が残る。」

橋はしの上うへにも柳やなぎちりかふ
ゑねちやのゑ、ゑ、ゑ、ごんこ、ん、どらど、ら、びび、ともしこ、づ心こころなくてや柳散やなぎちりりすぎにけり

「やぶちゃん注…前に同じく底本全集第二巻の「習作集第九卷（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第八首目に、
橋の上にも柳ちりかふ
ゑねちやのゑ、ゑ、ゑ、ごんこ、ん、どらど、ら、びび、ともしこ、づ心こころなくてややなぎ散りすぎにけり
という習作が残る。」

題だいしらず

こゝろばへやさしき人ひととくれがたの水みづのほとりを歩むなりけり

「やぶちゃん注…前に同じく底本全集第二巻の「習作集第九卷（愛憐詩篇ノート）」の「晩

秋」と題する十二首連作の第四首目に、

こゝろばへやさしきひとくれ方の

水のほとりをあゆむなりけり

という標記違いの同一首が残る。」

バルコンの隅すみ

人はいざ知るや知らめや短か夜の月の出窓にくちづけしこと

「やぶちゃん注…「いざ」は底本校訂本文は「いさ」と『補正』する。従わない。「みぢかよ」はママ。底本全集第二巻の「習作集第九卷（愛憐詩篇ノート）」の「羽蟲の羽」と題する三十三首連作の第十首目に、

人はいさ知るや知らめやみぢか夜の

月の出窓にくちづけしこと

というほぼ同一の習作が残る。「みぢか夜」はママ。」

* * *

「やぶちゃん注…以下、底本全集第二巻「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の内、既に類型・相似・相同歌として既注では掲げていないか若しくは一部のそれしか示していない歌群を中心に示す。

最初に掲げるのは「歌」歌群で、クレジットはない。「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」のクレジット時系列は必ずしも順番になっていないが、『一九一三、四』のクレジットを持つ「羽蟲の羽」の前に記されてはある。

なお、底本解題に「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」は大正二（一九一三）年四月から九月に書写されたものであるが、創作時とは必ずしも一致しない、と注していることから、現在、発表クレジットが明らかとなっている前掲の大正二年の「古今新調」の最後に、以下の「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に含まれる歌群を総て記載順に配することとした。

また、先行する発表作との相同性や類型性は既に先行歌に注してあるので、そのフィード・バック注は附していない。悪しからず。」

歌

襟脚もみうらのえんなる君にふる雪は
えやは消えざるものをこそ思へ

手のひらに練おしろひのときみづの
にほひにぢめる若き人妻

うくらめん春の夜に鳴くうぐひすか
「哀傷篇」の歌のこゝろか

猫の子に溢すりよせて泣くばかり
女ほしさに氣も狂ふなり

東京の朝は悲しや川蒸氣
ポーと氣笛の鳴るが悲しや

心ばそきかぎりのことは言はであれ
君また更にくちづけをせよ

あきうどの若き息子の元吉が
そろばん玉をはちき居るかな

(高橋君に)

「やぶちゃん注」：「おしろひ」「にぢめる」「川蒸氣」「氣笛」「はちき」は総てママ。

底本の初出本文の最後に『三首目「うくらめん」は上田敏の『みをつくし』所収「南露の春宵」から。「哀傷篇」は北原白秋の歌集『桐の花』に所収。』とあり、また、『七首目の獻辭は、前橋市の書店煥平堂の高橋元吉のこと。』と編者注がある。

「うくらめん」ウクライナのこと。正しくは上田敏の訳詩集「みをつくし」所収のゴー
ゴリ原作の「南露春宵」である。以下に[国立国会図書館の近代デジタルブラリー](#)の当該

詩集から視認して起こしたものを以下に示す(句点の後の有意な余白及び繰り返し記号「、」はママ。踊り字「へ」は正字化した。一部の判読推定字には直下に【?】を附した)。

*

南露春宵

ウクラインのよるをしれりや。 あはれ美しきの夜をしらすば、はやくゆきても見た給へかし。 なかぞらに月はてらしぬ。 みるがまにひろがりたる青空あおぞらの穹窿は今や、てりわたりて、息するやうなり。 白銀の波、大地にたゞよひてうるはしく、空氣はあやしくも息ぐるしきまでかぐはし。 やさしいたはりはあたりにみちてにほひのうみのふるひ動ける。

かうがうしきよるのけしきかな、物くるほしう美しきはこよひなり。 靜なるこの夕にも、命は曾良にみちねりとおぼしく、をくらき森は、やみにそよぎて、田の面に落せるかげくろし。 池のおもてには音なくて、おぼろおぼろのみながみは花園のわか葉にかくれぬ。

泉には、つめたき水ながれて、櫻のわか枝、梅の老木など臆【?】せるさまに岸をほひたり。 葉がくれに幽なるさゝやきありて怒るが如く訴ふるが如きは花の神たちのむづかりならむ。 さ丁てはいたづらの夜の風やみにまぎれて接吻くちづけせしか。

よものけしきはなべてねむりぬ。 そらも、つちもあやしきいきにつつまれていと神さびたり。 かしこみの心ゆくりなく起りぬ。 誰れかこの幽玄を曉らむ。 たれかこの崇高を仰がむ。 幻はしろがねの光よりあらはれたり。 物の音の調とゞのひたる如くあなたこなたの深みより生れぬ。 あゝかうがうしき春の夜や、わが心うれしさに亂れむとす。

忽にしてよろづ蘇生よみがへりぬ。 森も池も原もおしなべて生きたり。 ウクラインの野邊に鶯なきぬ。 玉を轉がす音の雷となりてひゞけば、月はみそらの胸によりてこの美しきこゑをすひつゝ。

ながめやる遠里小野は、あやしき眠につゝまれて音なし。 月かげをあびたる小屋のむれは、さながら浮彫をみる如く、暗とてりあひて眩むばかりなるは、そが壁なり。 鶯はなきやみぬ。 あたりはまた靜なり。 信心の農夫は、はやねむりしころならむ。 をちこちの隣に、なほあかしのもるゝは、小屋の戸口に遅【?】なはりたる家族どもが夕げたうべつゝ、あ

るなんめり。

(ゴゴル)

*

「遅【？】なはりたる」は「遅」にしか見えないが、読みが分ならず、意味も不明である。識者の御教授を乞う。因みに、不学にしてこの散文詩は初めて読んだが、個人的に、すこぶる気に入った。

「哀傷篇」北原白秋歌集「桐の花」はこちらで全篇が読める。「哀傷篇」は巻末にある。

「高橋君」たかはしとさきち高橋元吉（明治二六（一八九三）年～昭和三〇（一九六五）年）は詩人で書店「煥平堂」社長。群馬県前橋市生まれ。前橋中学校（現在の群馬県立前橋高等学校）卒業後に上京、『偶成の詩人』と称され、朔太郎の他、武者小路実篤・柳宗悦らと交友があった。書店経営をする傍ら、大正一三（一九二四）年に高田博厚・尾崎喜八らと雑誌『大街道』を創刊、昭和一〇（一九三五）年『歷程』同人。昭和三八（一九六三）年には「高橋元吉詩集」で高村光太郎賞を受賞している。没後に『高橋元吉文化賞』が制定されている。朔太郎より七つ年下（以上はウィキの「高橋元吉」及び講談社「日本人名大辞典」を参考にした）。書写年代からが作歌時とするなら、当時の元吉は丁度、二十歳である。」

* * *

「やぶちゃん注…以下は底本全集第二巻「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「羽蟲の羽」歌群。最後のクレジットによれば大正二（一九一三）年四月の作である。圈点「ゝ」（各首頭部）及び「〇」（各首下）は、編者注に従って推定復元したものである（特に「〇」の位置は「下」とのみあるので不確かである）。」

羽蟲の羽

街の葉ざくら作

ゝおしなべて羽蟲はねの羽のさも白く
ひかるをみれば夏は來にけり

花がたみ艶あでなるひとを我が待てば
遠里小野に月のぼるなり

足の爪すこしぬらして宵毎の
濱邊つたひを好む君かな

うち出でゝ濱邊にたてば月見草
月■かたむきてにほふなりけり

「やぶちゃん注…■」は判読不能字の抹消を示す。」

なわすれそ勿忘草の花つみに
來よと言ひなばおどろきて來む

たれこめて物や思へとわがために
雨ふりぐさの花咲きにけむ

いかにせんならんろべりや吹くときくだにも
泣かまくほしくもの思ふ身は

「やぶちゃん注…「ろべりや」既注であるが再掲する。キキヨウ目キキヨウ科ミゾカクシ（溝
隠）属 *Lobelia* のロベリア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）
及びその園芸品種をいう。南アフリカ原産の秋播きの一年草で、高さ二十センチメートル
ほどでマウンド状に広がる。四月から七月頃に青紫色の美しい花を咲かせ、花色は赤紫色
やピンク・白色などがある。（weblio 辞書の「植物図鑑」にある「ロベリア・エリヌス（瑠
璃蝶草）」に拠った。画像はグーグル画像検索「*Lobelia erinus*」も参照されたい。）」

春日野の若菜いろぐさおきなぐさ
けふわが來れば下萌えにけり

さくらの實みさくらばなよりほの紅き
そのくちびるをさしあてたまふ

ひとはいさ知るや知らめやみぢか夜の
月の出窓にくちづけしこと

「やぶちゃん注：「みぢか夜」はママ。次の一首も同じ。」

ひとはいさ知るや知らめやみぢか夜の
月の出窓にくちづけしこと

ゝかくとだにえやは言へざるさりげなく
夏來にけるとつげやりしかな

おしめども散りゆくものを花びらを
くちにふくみて物おもふかな

「やぶちゃん注：「おしめども」はママ。」

うたかたの水の流れとさくらばな
かひなきものは我身なりけり

かくとだにえやは言えざる女氣に
夏くるとのみつげやりしかな

「やぶちゃん注：「言えざる」はママ。」

しめやかに舗石みちを歩むとき
さつきながあめふりそめにけり

電車みちよこぎりしとき靴さを
ぬらして過ぎし夏の雨かな

夏若葉つばめ飛び行き飛び來り
めぢのかぎりを人あゆむなり

辻待ちの俤のほろも葉柳の
しづくに濡れて嘆く夜かな

たそがれてゆくゑもしらに氣車みちの
堤つみのうへをたどるなりけり

「やぶちゃん注…「堤」のルビ「つゝみ」はママ。」

磯打浪小磯が濱の貝がらの
かひなく濡れて物思ふころ

うれしきはその紅貝べにがひのふたつみつ
袂のすみにちゝと鳴ること

「やぶちゃん注…個人的に好きな一首である。」

ゝつばくらめきのふかへりてかくばかり
うれしきことを告げにけらしな

あすかやま年つきへても忘れねば
いまは牡丹の花つみにけり

○

「やぶちゃん注…「いまは」は原本では「いはま」。意味が通じないので校訂本文を採用した。」

憂きことはさらになけれど紅爪あじにべを
かめばあやふく涙するかな

かぶと蟲黒くひかりて音もなく
くぬぎ林になげくなりけり

○

さくらさくらさくらちりかひみちもせに
とりどりなれや春ゆかんとす

○

はらはらと柳ちりかひ忘れじの
そのひとはあかくにほひぬ

きのふといひ、けふといひ

あゝせんかたもなき日頃かな

あさましき我がおこなひもいかばかり
草もえ出でゝかなしかるらむ

○

とりつめし心ばかりは哀しけれ

玉菜は梅雨^{つゆ}にぬれてひかれど

ながらへてまたこの頃は若葉する

木立の中を歩むなりけり

見せばやなうすみどりせるそうぞくの
ひとつまれしゆすらごのはな

「やぶちゃん注：「そうぞく」はママ。「ゆすらご」はサクランボに似た赤い小さな実をつけるバラ目バラ科サクラ属ユスラウメ *Prunus tomentosa* の俗名。漢字表記では「梅桃」「山桜桃梅」。ウィキの「ユスラウメ」には『現在では『サクラ』を意味する漢字『櫻』は元々はユスラウメを指す字であった。ユスラウメの実が実っている様子を首飾りを付けた女性に見立てて出来た字である』とある。知らなかった（[グーグル画像検索「ユスラウメの花」](#)）。

やわからかにきみがおゆびをくちびるに
ふくみて居れば花散りにけり

「やぶちゃん注…「やわからかに」はママ。」

いつの日かその石段に立ちしとき
ぎんなんの實の落ちてきたりき

(一九一三、四)

* * *

「やぶちゃん注…以下は底本全集第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「うまごやし」歌群。冒頭のクレジットによれば大正二（一九一三）年四月の作である。圏点「○」（冒頭二首下）は、編者注に従って推定復元したものである（特に「○」の位置は「下」とのみあるので不確かである。）」

うまごやし

一九一三、四、

うまごやし身をやわからかに投げ伏して
あてなく物をさがすなりけり

○

「やぶちゃん注…「やわからかに」はママ。」

れもね水管^{くだ}もて吸へばいち早く
はつ夏來りすゞろぎにけり

浮寝鳥旅に來りてかくばかり
長き渚をたどる哀しさ

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「浮寝鳥」は「うきねどり」で、水に浮いたまま寝る鳥の意から、和歌では思う人に逢えぬ嘆きに喩えて用いる。」

ふるさとの公園地をばこの日頃
ふところ手して歩むなりけり

人思へば人のつれなく世思へば
世のあぢきなく五月雨の降る

さと下すその指揮棒にオオロンの
弓の光りて夏は來にけり

咲きにけり女ごころのさみしさに
爪かむときの夏ぐみの花

咲きにけり女ごころのさみしさに
爪かむときの夏ぎくの花

「やぶちゃん注…★以上二首は底本では一首であって、「ぐみ」と「ぎく」の部分が同位置に横に併置（別案）されているのを復元したものである。」

いとしげく戀しさまさり忍ぶれど
尚あまりゝす花咲きにけり

かくありて思ひたえんと夕潮の
身をなのりそに戀ひわたる哉

ごんがん、ごんがん、鐘鳴る鐘鳴る
たはかりの列歩み行くなり

いはれなく我身をうとむことばかり
たび重なりて夏は來にけり

哀しみて蒲公英の莖を折るときに
白き涙はにじみ流れぬ

「やぶちゃん注…「蒲公英」はママ。無論、「蒲公英」（たんぽぽ）の誤記であるが、私の好きなこの一首の中では、誤字であっても、それが何か相応しく見えるのである。」

* * *

「やぶちゃん注…以下は底本全集第二巻「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「林檎の核」歌群。末尾のクレジットによれば大正二（一九一三）年七月十三日の作であるので、ここに配した。圈点「ゝ」は、編者注に従って推定復元したものである。」

林檎の核

歌十七首

1

ゝ若き日は既に過ぎ去り
今の我は
いたくすえたる林檎の核なり

2

ゝ生くること、此の頃思ふ
悲しきは夕ぐれて酒場の軒をくぐるなりけり

3

故郷を遠く放れて
夕まぐれ

4

居酒屋の窓に口笛を吹く
、しんしんたる水の音かな
汽車はまた

5

トンネルを出でてゝひたに走れり
いかなればきちがひの如くなりて走るや
旅人の歩む悲しき途をば

6

、今日もまた
酒場を出で一切に思ふ
旅に出づること、旅に出づること

7

何事もこの空虚をば充たすなし
酒宴の床に今日も酔ひ伏す

8

ひとりなり、わが獨り身なるはいと悲し
我とても人間の生きものなれば

9

たれにてもあれ
我れと歩み行く人はなきか
盃を合はす友はあらざるか

10

いかなれば我れは哀しき
あゝいかなれば
いかなればこそかくは孤獨なる

11

利根川の河原を歩めば

12

石ころが、我れに踏まれてさぐめきにあへり

13

ほの暗きこの部屋の隅に座るは我なり

いたく哀しみて死を思ふありさま

、かくまでにわが魂^{たましひ}をみつめたる

無氣味さよ、無氣味さよ

眞晝なり

14

影なりき、わが影なりき

たれかよく

己が影をば捕ふるをえん

15

七月中旬^{ななかば}

わが心狂へりと泣く

さる程に向日葵^{ひぐるま}の花は咲けり

16

大いなる、瞳^めはあかく常に焼ゆ

卑怯^{うしろ}ものは背後に笑へり

17

、かんかんたる酷熱の日に
きりもなく

赫土^{あかつち}の上に續ける蟻の列かな

17 「やぶちゃん注」★以下は並列案の復元である。後注参照のこと。

、かんかんたる酷熱の日に
きりもなく

黒く續ける蟻の列かな

(一九一三、七、十三)

「やぶちゃん注…以上「17」二首は底本では一首であって、「赫土の上に」と「黒く」の部分が同位置に横に併置（別案）されているのを復元したものである。」

* * *

「やぶちゃん注…以下は底本全集第二卷「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「五月の歌 拾遺」歌群。但し、「拾遺」（原本は「捨遺」であるが、ここは誤字と断じて校訂本文通り「拾遺」とした）とはあるものの、これに先行する「五月の歌」本体は少なくとも「習作集第八卷（哀憐詩篇ノート）」にはなく、現存しない模様である（今まで私が電子化した短歌群にもそれに相当する歌群は見当たらない）。クレジットはないが、直前が前に掲げた「林檎の核」歌群でこれが大正二（一九一三）年七月十三日のクレジット、次の文語自由詩「月見草」が同年五月のクレジットではある。」

五月の歌

拾遺

なたねなのともし油はふすふすと

衾ふすまの影にきたり泣くなり

かくありと知りなば憂しや燃えながら

我は思ひに消えぬべらなり

（たはむれてS子に送る）

「やぶちゃん注…「S子」不詳。」

没義道もぎだうの國おきての法規を憤おきてほり
いたく言いたる君にやあらぬ

（坂梨君に）

「やぶちゃん注」は朔太郎の友人坂梨春水（明治二二（一八八九）年～昭和五二（一九七七）年 生没年は国立国会図書館の資料に拠る）。『明星』に投稿する歌人で前橋の文芸誌『おち栗』（明治四二（一九〇八）年五月創刊）の中心人物（同誌創刊号には朔太郎も新体詩「宿醉」を寄稿している）で、同じ前橋中学出身であった（朔太郎の方が三歳年上）。明治四十四年六月に起った大逆事件（翌年一月死刑判決（直後に十二名処刑、特赦無期刑は十二名）の余波（坂根俊英氏の「[萩原朔太郎論——啄木の影響と社会性](#)」によれば、坂梨がこれ以前、大阪を流浪していた頃に友人に送った長編論文の筆禍による不敬罪と推定されており、坂根氏は本短歌を掲げて「没義道の國の法規を憤ほりいたく言いたる」というのはこの論文のことを指しているらしいと述べておられる）で、同六月に逮捕され、同年十一月二十二日に前橋地方裁判所で懲役四年の判決を受けて前橋監獄に投獄された（この判決日付はサイト「アナキズム」の『[大逆事件関連家宅搜索による不敬事件の「摘発」](#)』に拠った）。但し、坂梨は大正元・明治四五（一九一二）年の大赦で出獄しており、本短歌（大正二年頃創作推定）は出獄後の彼との親しい交際の中でのオードであるので注意されたい。また、私は萩原朔太郎を今時のヘイト・スピーチに酔っている如き凡庸で御目出度い国粹主義者どもと同類であったとは思っていない。少なくとも彼の若き日の怒りや憤りは確かな正しい魂の視座に支えられてあったと信じて疑わない人間である。」

* * *

「やぶちゃん注」以下は底本全集第二巻「習作集第八巻（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「歌」歌群七首。クレジットはないが、二つ前の文語自由詩「秋」の最後に大正二（一九一三）年八月二十三日のクレジットを持ち（前の「目無し魚」はクレジットなし）、次の文語自由詩「戀魚夜曲」が同年五月のクレジットである（再度述べるが、本創作ノートのクレジット時系列は必ずしも順番になっていない）。

歌

あづさ弓かへらぬひとの戀ひしさに
くれ初めてふる雪のはかなさ

いく山川越え行く旅ぞ黄ばみたる
單衣の汗も泣かまほしけれ

夏山の麓より燕まひのぼり
大空かけりて行方知らずも

若きより悲しきものはまたとあらぢ
うす情さへ忘れなくに

まんどりん、ちゝろちゝろとわが弾けば
なにが哀しく魚の嘆くぞ

やつくちに手をさし入れて並びゆく
いつもの君のくせをこそ思へ

「やぶちゃん注…「やつくち」八つ口。他に「身八つ口」「脇明」（わきあけ／わきあき）などとも呼ぶ。女性用・子供用の和服の脇の開き部分のことをいう。由来は着物の口が八つ（身頃の脇の「身八つ口」・袖のふりの「振り八つ口」・「袖口」と襟・裾の八箇所「あき」）があることからとも、袖付けの下を左右に分けて出来る口であることから、「八の字」の形に分かれることからとする説もある。男物にはない。これは江戸時代以降、女性の帯幅が広くなった上に胸高に帯をするようになると、上腕部の自由が奪われたことから、手の動作をより楽にするために施された工夫で、子供物のそれは、帯代わりの付紐を通すための穴であると言われる。その他にも、通気効果や体温調節、着付けの際に手を挿入して整えるためや授乳時の開口部としての機能も持っている（「きもの館 創美苑」の「きもの用語大全」の「[八つ口とは](#)」に拠った。和服を着ない私には大層、勉強になった。リンク先に感謝する。）」

やまざとは雨しげきのさはにあれば
矢車菊の色まさるなり

* * *

「やぶちゃん注…以下は底本全集第二巻「習作集第八巻（哀憐詩篇ノート）」に所収する短歌群の一つ、「晩秋」歌群十二首。クレジットはないが、直前にある文語自由詩二つ「[たちの垣根](#)」と「[偶成](#)」が大正二（一九一三）年十月二十三日のクレジットを持ち、さらにその前のノン・クレジットの文語自由詩「[晩秋](#)」も含めて、この三詩篇と同一の情景をここでは短歌として詠んでいることが分かる。従って同日か若しくは遠からぬ後日の作歌と考えてよい。取消線は抹消を示す。」

晩秋

いつしかに秋もおはりて停車場の
便所の扉が風にはためく

「やぶちゃん注…「おはりて」はママ。」

新町の停車場前の掛茶屋に
酒などのみて見たる晩秋

水のほとりのあづまや

悲しき別れの日に

けふすぎて水際に嘆けるべこにやも
いかでや人にそがひ泣くらむ

こころばへやさしきひととくれ方の
水のほとりをあゆむなりけり

ふところろ悲しくなりて場末なる
女郎屋の秋を見に行きしかな

うきぐものゆきゝもしげき山の端に
ほのしらしらと咲ける露ぐさ

靴さきにすこしなぢめる薄氷うすらひを
朝の役所にさびしみるひと

「やぶちゃん注…「なぢめる」はママ。」

橋の上にも柳ちりかふ

ゑねちやのごんどらびともしづこゝろ
なくてややなぎ散りすぎにけり

「やぶちゃん注…編者注によれば、この詞書の上には小さな「○」が付されている、とある。」

みちもせに俤くみまぐろまと行きかへる
なにしか菊の節會ふしあひなるらむ

めづらしき薄氷うすらひをみて装そうぞける
宮城野部屋のけさのきぬぎぬ

「やぶちゃん注…「そう」のルビはママ。」

うぐゐすの池端ちへんに鳴けば夜をこめて
まくらべに散る木きにやの花白きべこにや

停車場の柵にもたれて日蔭者
しみじみ秋を侘ぶるなりけり

*

*

*

いといふのかげともほしやひとのとふ
みづきはばかりうすあかりして

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集『短歌・俳句・美文』の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より。校訂本文では「いといふ」を「いとゆふ」に訂する。「いとゆふ（いとゆう）」は「糸遊」で、陽炎のこと。「大辞泉」を参考に記すと語源未詳で歴史的仮名遣を「いとゆふ」とするのは平安時代以来の慣用であり、「糸遊」という漢字表記は和語「いとゆふ」が「陽炎」の意の漢語である「遊糸」^{ゆうし}の影響を受けて出来た表記である。またこれは晩秋の晴天の日に成熟した小蜘蛛が糸を吐きながら空中を飛び、その糸が光に屈折してゆらゆらと光って見える現象を原義とし、漢詩にいう「遊糸」もそれであるとある。」

* * *

亞米利加國ナイヤガラ瀑布ノ景

あかねさす山のあなたにぼうぼうと

おほいなる瀧のおつるなりけり

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集『短歌・俳句・美文』の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より。次の「阿蘭國アムステルダムノ景」という前書の一首とともに新聞かグラフ誌の写真か活動写真のニュース映像などに基づく想像吟である。「ぼうぼう」はママ。川水の激しく滾り落ちる謂いの「茫々」であるから「ぼうぼう」が正しいが、何故か完膚なきまでに厳しく訂するはずの筑摩版全集本文は誤字と指示しながらも改訂本文でも「ぼうぼう」のママとしていて、不審である。」

* * *

阿蘭國アムステルダムノ景

かゞやける青空の上をものいはぬ

ぎやまん屋敷まんとるの異人

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集『短歌・俳句・美文』の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より」前の「亞米利加國ナイヤガラ瀑布ノ景」という前書の一首とともに新聞かグラフ誌の写真か活動写真のニュース映像などに基づく想像吟である。「まんとる」は「mantle」。マント。外套。」

* * *

うらゝかに俤俤と行きかへる
けふしも年の初會はつあひなるらむ、

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集『短歌・俳句・美文』の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より」これは先行する大正二（一九一三）年十二月一日附『上毛新聞』に発表した「古今新調」の中の一首、

*

菊きく

みちもせに俤くろまぐろ俤まと行きかへる今日けふしも菊きくの節會せちあひなるらむ

*

の初案かとも思われる。

なお、前の「いといふの」「あかねさす」「かゞやける」とこの四首は底本では同じ時期に纏めて創られたもののように見えるように配されてある。」

* * *

うらうらに俤俤とゆきかへる
けふしも年の初會はつゑなるらむ

「やぶちゃん注」底本筑摩版全集「短歌・俳句・美文」の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より」より。これは大正四（一九一五）年一月一日のクレジットを持つ北原白秋宛（宛先「東京市麻布區坂下町十三」）年賀状に書かれた一首。底本全集第十三巻の「書簡」の書簡番号七六であるが、そこでは二行分かち書きではなく、

＊

新正

うらうらに俤俤とゆきかへるけふしも年の初會はつゑなるらむ

大正四年一月一日

萩原朔太郎

＊

の一行書きであるのは不審。前の一首の改案か。前の注で示した通り、これにはこの一首を含めて都合四つのヴァリアントがある。そのすべてをここで並べてみたい。

＊

○底本全集第二巻「習作集第九巻（愛憐詩篇ノート）」の「晩秋」と題する十二首連作の第九首目

みちもせに俤俤くろまぐろのまと行きかへる
なにしか菊の節會なるらむ

○大正二（一九一三）年十二月一日附『上毛新聞』発表の「古今新調」の中の一詩

菊きく

みちもせに俤俤くろまぐろのまと行きかへる今日けふしも菊の節會せちゑなるらむ

○底本筑摩版全集「短歌・俳句・美文」の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より」の本歌の前の四首の掉尾

うらゝかに俤俤と行きかへる
けふしも年の初會はつゑなるらむ、

○本歌「書簡」書簡番号七六（大正四（一九一五）年一月一日）

新正

うらうらに俤俤とゆきかへるけふしも年の初會はつあひなるらむ

朔太郎、後年の白秋への賀状に添えるほどだから、よほどの自信作であつたに違いなく、四つもヴァリアントが残るというのも彼の短歌の中では特異である。但し、私は上手い短歌とお世辞にも思わない。残念乍ら。ごめんね、朔太郎——」

* * *

この寝ぬる都の空に夜遠くすり鐘かねきこゆ火事かあるらし

「やぶちゃん注…昭和五三（一九七八）年二月刊の筑摩書房版萩原朔太郎全集第十四巻の「補遺」にある『短歌——岸とめ子送別會』と標題する一首。初出は昭和九（一九三四）年五月号『ごぎやう』（歌人中河幹子（中河与一妻）が創刊した女性文芸誌。後に歌誌「をだまき」となる）。岸とめ子なる人物は女流歌人（国立国会図書館の書誌データ内の『短歌研究』などの目次に名を見出せる）である以外は詳細を知らない。これ以外に、同巻には既刊全集分に追加された短歌はない。」

* * *

緑なす浪の江の島夢にして人と降りし岩屋道かな

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集「短歌・俳句・美文」の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より』より。これは昭和一六（一九四四）年十一月十一日附上田静栄宛書簡（昭和五二（一九七七）年刊筑摩書房版全集書簡番号七四七）に記された一首。死の凡そ七ヶ月前の短歌である。但し、「緑なす」とあるのを「緑なす」に直し、最後の読点を除去した。以下に、書簡全文を示す（踊り字「へ」は正字化し、誤字は後に「」で正字を示した）。

＊

度々御手紙や御詠歌をいただき、いつも感慨深く拜見して居ります。特に先日は、わざわざ好物の御見舞まで御持参下され、何とも御厚情御禮の申しやうもございません。

小生の病氣も、風邪が原因でしたが、それから轉化して紳〔神〕經衰弱症になつてしまひました。今では生理的に大した異狀が無いのですが、紳經衰弱が烈しくなり、戸外に出る事が非常に恐ろしく、一步も病室から出られません。人に逢ふことは絶対に厭やなので、家人でさへも、用事以外の場合にはできるだけ避けるやうにして居る仕〔始〕末です。いつになつたらこの病氣が治るのか、自分ながら到底解りません。何かのチャンスで、急に心氣一轉したら、明日にでも治るやうな氣がしますが、今の所我ながら心細い次第です。どうも自分の考では、この病氣の原因には、桶〔樋〕ロ一葉が崇〔崇〕つてゐる如く思はれます。あの退屈な歌を何百首となく、後から後からと持ちこまれたので、それが妙に氣になつて紳〔神〕經を病み出したのが、病氣の前兆のやうに思はれます。もつともその時既に紳〔神〕經衰弱にかかつて居たので、原因と結果が逆になつたのかも知れません。

御手紙の模様では、貴女も思想的に大分悩まれて居る御様子ですが、哲學書に親しまら「やぶちゃん注…」〔ら〕は衍字。』れることは、さういふ際に大へん結構と存じます。僕も青年時代には、いはゆる「人生の懷疑病」といふ奴にかかり、疑問を解決しようとしようとして、古今の哲學書を片っぱしから濫讀しました。お影で、プラトンを始め、ニイチエ、ベルグソン、シヨペンハウエル、カント、ゼームス等の哲學大要に通じましたが、結局何も得る所はなく、もとの黙〔木〕阿彌に終わりましたが、とにかく耽讀してゐる中だけは樂しみでした。つまりそれだけ得したわけでした。

この頃よく夢を見ます。數日前には江の島へ遊んだ夢を見ました。小生はよく色彩のある夢を見ますが、江の島の風景が天然色映畫のやうに綺麗でした。

薺〔綠〕なす浪の江の島夢にして人と降りし岩屋道かな、

こんな駄歌をさめて作りました。

今日は少し氣分が好いので手紙をかきました。

萩原朔太郎

上田靜榮様、

＊

上田静栄（旧姓友谷 一八九八年～一九九一年）は女流詩人。大阪生（底本全集の七四七書簡注では山口県生とする）。京城（現在のソウル）の女学校を卒業後、文学を志して上京。田村俊子の内弟子となった。大正二三（一九二四）年に林英美子との二人誌『二人』を発行し、また、岡本潤や小野十三郎とも同棲するなど、ダダイズムやアナーキズムの詩人たちとの交流の中で詩を書き始める。しかし、その後、『薔薇・魔術・学説』『馥郁たる火夫よ』『詩と詩論』などで活躍していたシュールレアリスト上田保と結婚、モダニズム詩へ向かった。代表作は第一詩集「海に投げた花」（昭和一五（一九四〇）年）。以上は関富士子氏のサイト「[rain tree](#)」の「[金属と鉋石の打軋る中へ――上田静栄――](#)」の記載を参照した。書簡中の「桶〔樋〕ロ一葉が崇〔崇〕つてゐる」というのは、新世社刊の「桶ロ一葉全集」第五卷（昭和一六年十月刊）の編集を指す旨の注記が底本とした筑摩版全集にある。」

* * *

はかなしや病ひ醫えざる枕べに七日咲きたる白百合の花

「やぶちゃん注…底本筑摩版全集「短歌・俳句・美文」の短歌パートの掉尾にある『草稿ノート』『書簡』より」より。これは昭和一七（一九四二）年二月二十二日附森房子宛葉書に記された一首。この約三か月後の五月十一日に朔太郎は肺炎のため死去した。享年五十七歳。「醫えざる」はママ（底本全集校訂本文は「癒えざる」と訂する。以下に、書簡全文を示す（中野區江古田町、四ノ一五九六 森房子様）宛。ゴム印にて「世田谷區代田一ノ六三五 萩原朔太郎」）

*

御見舞重ねてありがたうございます。

病気もまだ全快に至りませんが、氣候あたゝかにもならば温々起床できせうです、いつも御芳情うれしく。

はかなしや病ひ醫えざる枕べに七日咲きたる白百合の花

二月二十二日、

*

森房子とは女流歌人で朔太郎の全集書簡には五通が認められる。

本一首が萩原朔太郎の現存する最後の短歌である。」

やぶちゃん版萩原朔太郎全歌集 附やぶちゃん注 完